群馬県前橋市

総社閑泉明神北遺跡

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代よりの豊かな文化あふれる地であり、東国の奈良と称されています。今から２万８千年前の旧石器を始めとして、10基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの近代化を示す昭和庁舎等の近代化遺産など多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内のほぼ全域に残されています。古代の人々の暮らした家の跡、使った石器や土器などの道具や、水田跡なども多く、毎年の埋蔵文化財発掘調査により多くの新しい発見があります。

前橋市西部の総社・元総社地区は、古代の国府が置かれ、古代寺院跡や多くの古墳等の史跡が残る地区であります。

本年度調査の総社閑泉明神北遺跡では、古墳時代の水田跡や溝のほかに井戸跡などの調査を行い、地区の歴史解明にとっての重要な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました市区画整理第二課、県埋蔵文化財調査事業団、地元関係者、酷暑と湧水のなか調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成12年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　渡　辺　勝　利

例　　言

1．本書は、元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市総社町総社字閑泉明神北3615－1に所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が主体となり、前橋市教育委員会の指導のもと、山武考古学研究所が担当した。調査期間・面積・担当者は次の通りである。

調査期間　平成12年１月11日～平成12年３月21日

調査面積　5,100m^2

担 当 者　長谷川一郎・大越直樹・日沖剛史

4．現地での調査においては隣接地域で先行調査された「元総社明神遺跡Ⅷ」（前橋市埋蔵文化財発掘調査団1990）の調査成果を踏まえ、各遺構面の掌握、標準堆積土層の層序番号を、鍵層を基準として極力同一のものとした。また、共通する記述内容については一部引用した。

5．本書の執筆分担は次の通りである。

Ⅰ　井野誠一（前橋市教育委員会）

Ⅲ～Ⅵ　長谷川一郎　　Ⅳ・Ⅴ　大越直樹　　Ⅱ　日沖　剛史（山武考古学研究所員）

6．調査にかかわる遺物・図面・写真等の資料は、一括して前橋市教育委員会が保管している。

7．発掘調査参加者は次の通りである。

青木集一　石井　昭　石井正男　石井　実　磯田二郎　磯田政男　大賀良助　奥野繁雄　奥野まさ
奥野賢司　近藤和夫　桜井敬一　桜井れい　須田節子　須藤ユクエ　登坂月江　登坂義男　富田信夫
富田光雄　中澤和江　羽田良吉　星野勝正　松田　実　黛　準一　三友昭彦

凡　　例

1．挿図中に記載した北は座標北を示す。

2．本遺跡の略称は１１Ａ９７である。

3．各遺構の略称は次の通りである。

溝……W　　土坑……D　　井戸……I　　住居跡……H

4．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　全体図……１／100　Hr-FA下水田跡……１／150　　As-C下畠跡……１／150
　　溝……１／100　土坑・溝断面図……１／60
　　井戸・住居跡・畦畔・溝断面図……１／40

遺物　　１／１、２／３、１／３、１／４、１／６

5．遺物の挿図中に使用したスクリーントーン表示は以下の通りである、

施釉範囲　スス付着範囲　内面黒色処理

木製品の炭化範囲

目　次

序
例　言
凡　例
第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
第Ⅱ章　調査の方法と経過……1
　第１節　発掘調査の経過……1
　　第１項　調査の方法……1
　　第２項　調査の経過……2
　第２節　遺物整理の経過……2
第Ⅲ章　基本層序……5
第Ⅳ章　遺跡の位置と環境……6
　第１節　遺跡の立地……6
　第２節　歴史的環境……7
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物……7
　第１節　概要……7
　第２節　中世……8
　　第１項　溝……8
　　第２項　土坑……11
　　第３項　井戸……12
　第３節　古代……12
　　第１項　住居跡……12
　第４節　古墳時代……22
　　第１項　Hr-FA 下水田跡……22
　　第２項　溝……29
　　第３項　浅間Ｃ軽石（As-C）下畠跡……35
　第５節　遺物包含層……41
　　第１項　古墳時代～奈良・平安時代遺物包含層……41
　　第２項　縄文時代遺物包含層……42
　第６節　表採遺物……44
第Ⅵ章　成果と問題点……50

挿図目次

第１図　総社閑泉明神北遺跡位置図……3
第２図　地籍図……3
第３図　基本土層・柱状図……5
第４図　遺跡周辺の地形図……6
第５図　中世・古代全体図……折り込み図
第６図　Ｗ－２～９号溝土層断面図……13
第７図　Ｄ－４～６号土坑実測図……14
第８図　Ｄ－１～３号土坑、Ｉ－１号井戸、Ｈ－１号住居跡実測図……15
第９図　Ｗ－１・３～５号溝出土遺物実測図……16
第10図　Ｗ－５・６・９号溝、Ｄ－５号土坑出土遺物実測図……17
第11図　Ｗ－１・４号溝出土瓦、Ｗ－４・５号溝、II－１号住居跡出土遺物実測図……18
第12図　Ｄ－４・５号土坑出土石臼実測図……19
第13図　Ｄ－５号土坑出土五輪塔、宝篋印塔実測図……20
第14図　Ｗ－４号溝出土石鉢、Ｄ－５号土坑、Ｉ－１号井戸出土五輪塔・石臼実測図……21
第15図　Hr-FA 下面全体図……折り込み図
第16図　Hr-FA 下水田跡、Ｗ－10～12号溝実測図、断面図・土層断面図……折り込み図
第17図　Hr-FA 下水田跡出土木製品実測図……27
第18図　Ｗ－10・11号溝、Hr-FA 水田跡出土土器・木製品実測図……28
第19図　Ｗ－13号溝実測図、木製品出土状況図……30
第20図　Ｗ－13～17号溝・As-C 下面全体図 折り込み図
第21図　Ｗ－13号溝及び調査区中央部東西土層断面図……33
第22図　Ｗ－13・17号溝実測図、土層断面図……34
第23図　Ｗ－14・15・16号溝土層断面図……35
第24図　Ｗ－10号溝出土木製品実測図……36
第25図　Ｗ－13号溝出土木製品実測図……37
第26図　Ｗ－13・14号溝出土土器・木製品実測図……38
第27図　As-C 下畠跡実測図……39
第28図　As-C 下畠跡断面図……40
第29図　As-C 下畠跡出土木製品実測図……41
第30図　遺物包含層（Ⅳ層）出土遺物実測図……42
第31図　縄文時代トレンチ設定図……43
第32図　遺物包含層（XI 層）出土土器実測図……43
第33図　石器実測図……44
第34図　表採遺物実測図……45

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……4
第２表　水田面計測表……22
第３表　土器観察表（１）……46
第４表　土器観察表（２）……47
第５表　羽口観察表……47
第６表　石臼観察表……47
第７表　石鉢観察表……48
第８表　五輪塔観察表……48
第９表　宝篋印塔観察表……48
第10表　木製品観察表……48
第11表　弥生・縄文土器観察表……49
第12表　石器観察表……49
第13表　勾玉観察表……49
第14表　鉄製品観察表……49
第15表　銭貨観察表……49
第16表　凹石観察表……49

写真図版

図版１　総社閑泉明神北遺跡全景
調査区北側 Hr-FA 下面
図版２　調査区南側 Hr-FA 下面
Ｗ－13・14号溝全景
図版３　調査区北側 As-C 下面
調査区南側 As-C 下畠跡
図版４　基本土層
調査区北側中世・古代面全景
Ｗ－７号溝完掘状況
調査区北側中世・古代面全景
Ｗ－８号溝土層断面
Ｗ－１号溝土層断面
Ｗ－５号溝出土遺物
Ｗ－４号溝遺物出土状況
Ｄ－１号土坑土層断面
図版５　Ｄ－４号土坑石出土状況
Ｄ－５号土坑石出土状況
Ｄ－５号土坑完掘状況
Ｉ－１号井戸石臼出土状況
Ｉ－１号井戸石出土状況
Ｈ－１号住居跡カマド土層断面
Ｈ－１号住居跡カマド完掘
Ｗ－10号溝土層断面
図版６　Ｗ－10号溝出土遺物
Ｗ－10号溝木製品・勾玉出土状況
Ｗ－10号溝木製品（杵）出土状況
Ｗ－10号溝木製品出土状況
Ｗ－11号溝土層断面
Hr-FA 水田跡畦畔断面
Hr-FA 水田跡水口
Hr-FA 水田跡木製品出土状況
図版７　Ｗ－13号溝木製品出土状況
Ｗ－14号溝土層断面
Ｗ－15号溝土層断面
Ｗ－14号溝掘り下げ作業状況
As-C 下面作業状況
As-C 下面木製品出土状況
縄文トレンチ
縄文トレンチ土層断面
図版８　Ｗ－１・３・４～６・９号溝出土遺物
図版９　Ｗ－１・４・５号溝、Ｄ－４・５号土坑、Ｈ－１号住居跡出土遺物
図版10　Ｗ－４・９・10・11号溝、Ｄ－５土坑、Ｉ－１号井戸、Hr-FA 下水田跡出土遺物
図版11　Ｗ－10号溝、Ｈｒ-FA 下水田跡出土遺物
図版12　Ｗ－10・13号溝出土遺物
図版13　Ｗ－13号溝出土遺物
図版14　Ｗ－13・14号溝、As-C 下面出土遺物
図版15　Ｗ－13・14号溝、遺物包含層（Ⅳ層）出土遺物
図版16　遺物包含層（XI 層）、表採遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

総社閑泉明神北遺跡は、想定上野国府域の東に位置し、周辺では元総社明神地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査が十数年にわたって行われ、多くの成果が得られている。

元総社明神遺跡の発掘調査の中では、上野国府に直接結びつく遺構は見られず、区画と見られる溝が検出されているが、確証とまでは至っていない。

本遺跡の南の河川改修に関わる発掘調査では、「国厨」「曹司」の墨書や人形等も発見されており、本遺跡が重要域に隣接していることから工事に先立って発掘調査を実施することとした。

本発掘調査は、元総社蒼海地区区画整理事業に伴う発掘調査であるが、県の河川改修事業との関わりから、調査の効率を勘案し、県・市の関係課で協議を行った結果、県の河川改修地区と市の河川に沿った道路改良分の開発面積を合計し、双方の事業面積で案分して、川の上流地区と下流地区に分けて実施することとした。

前橋市分は、小字名から総社閑泉明神北遺跡とし、隣接の遺跡の状況から３面程度の遺構面が想定された。

開発協議の結果に基づき、平成11年11月15日付けで前橋市長　萩原弥惣治より前橋市教育委員会　早部賢一郎あてに、埋蔵文化財発掘調査についての依頼が提出され、同年11月16日付けで前橋市埋蔵文化財発掘調査団に、本遺跡に関わる埋蔵文化財発掘調査の実施が前橋市教育委員会より依頼された。

この依頼に対し、平成11年11月16日付で承諾の回答が出され、以後調査団と依頼者で、発掘調査実施にかかわる協議が行われた。

平成11年12月27日付で前橋市長　萩原弥惣治より前橋市埋蔵文化財発掘調査団あてに協議が提出され、平成12年１月５日付けで発掘調査の委託契約が提出された。

この委託契約締結後、協議の結果に基づき本発掘調査業務について民間調査機関に再委託を行うこととし、平成12年１月12日付けで山武考古学研究所に発掘調査業務の委託を行った。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

第１節　発掘調査の経過

第１項　調査の方法

発掘調査に先立ち、調査区が雑木に覆われた状態であることから、伐採した後に調査に取りかかることとした。調査は、近隣遺跡「元総社明神遺跡Ⅷ」の調査事例を基に遺構面まで重機で掘り下げ、その後、人力による遺構確認及び検出作業を行うこととした。なお、調査区は排土処理の関係上、南北に２分割し、南側の調査区より作業を進めることとした。この際、北側の調査区は排土置き場にすることとした。また、北側の調査区を調査する際には、反対に南側の調査区を排土置き場とした。

図面は、調査区内に公共座標を用いて４×４ｍの方眼を設定し、これを基準として作成した。各図面の縮尺は遺構全体図を1/100、遺物分布図・遺構実測図・土層断面図が1/20を基本として記録した。写真撮影は、各調査段階に応じて行い、白黒35mm・カラーリバーサル35mm・白黒６×７判・カラーネガ35mmを使用した。

また、遺跡の全体写真については、航空撮影を用いることとした。

第２項　調査の経過

調査は平成12年１月12日から同年３月21日まで行った。発掘調査の経過概要は次の通りである。

平成12年

１月中旬　現況の写真撮影終了後、調査区内に密集する樹木の伐採を開始する。また、同時にプレハブ・トイレの搬入及び安全対策に取りかかる。

下旬　重機による南側調査区（１区）第１面の表土除去開始。「元総社明神遺跡Ⅷ」で確認されているAs-Bは本調査区では検出されなかった。これと並行して遺構確認作業・安全対策を行う。

２月上旬　中世～近世の遺構面（第１面）の調査を先月に引き続き行う。土坑、溝を検出し、掘り下げ作業に取りかかる。

中旬　掘り込みが深くなることが予想され、調査を中断していた井戸（上旬の調査段階において土坑としていたが、井戸の性格を帯びてきたため名称を変更）の調査を再開する。

第２面（Hr-FA下水田跡）の調査を開始する。重機によるHr-FA上面までの掘り下げを終了後、人力によるFA除去、水田面検出作業を開始する。

古環境研究所による自然科学分析及びテフラ分析用試料サンプリングを実施する。

下旬　第３面（As-C）直下の調査を開始する。重機によりAs-C上面までの掘り下げを行う。

現牛池川の水位より遺構面が低いため、湧水対策として調査区周辺に水切り溝を掘削する。

As-Cを切る溝状の落ち込みを検出し、追って掘り下げを開始する。As-C除去作業を開始する。

３月上旬　浅い畝状の面が検出される。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行う。

第３面の調査を終了する。

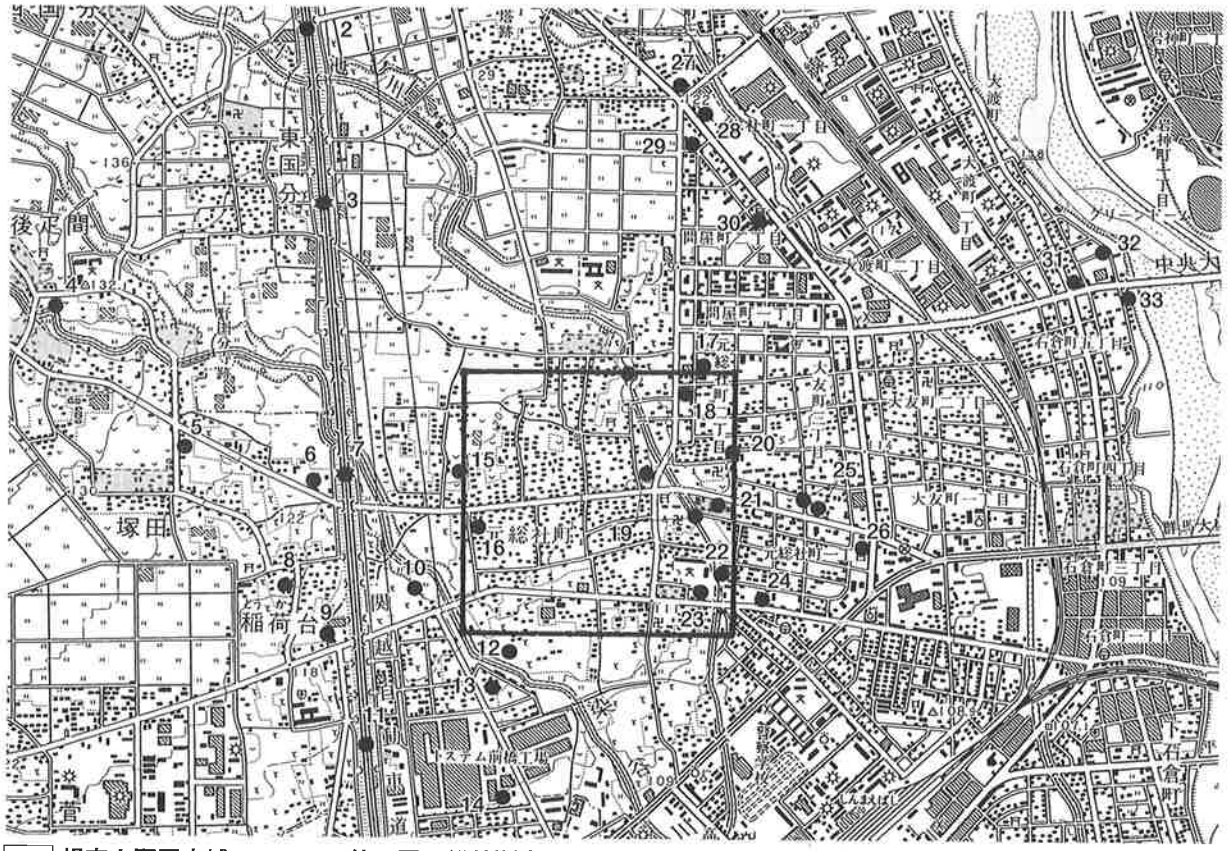
中旬　「元総社明神遺跡Ⅷ」の調査で確認されている弥生・縄文時代の遺物を含む砂礫層（XI層）のトレンチ掘削による調査を行う。その結果、縄文時代中期から後期にかけての土器片が出土する。

下旬　調査区の埋め戻しを行い、現地での調査を終了する。

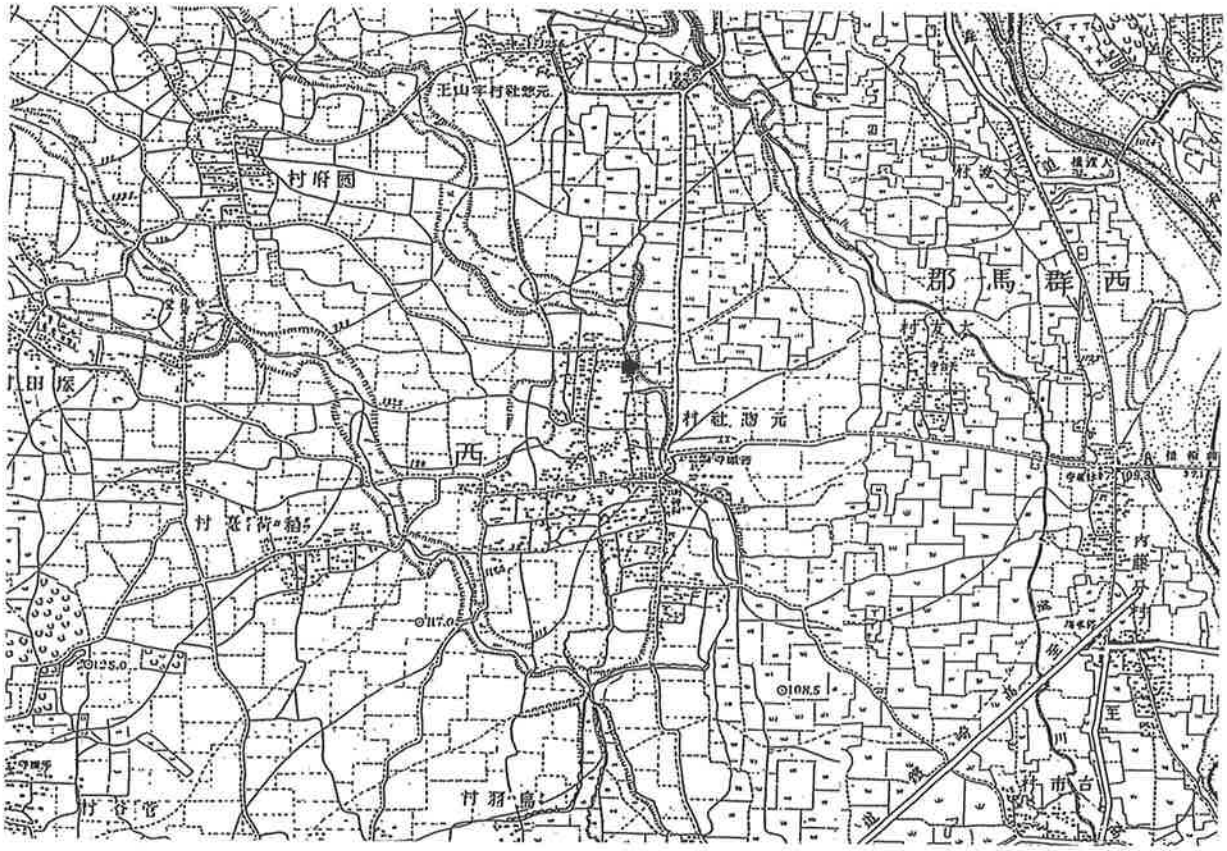
第２節　遺物整理の経過

出土した遺物は全量水洗作業を行い、各遺構ごとに仕分けした。その後、コンピュータ制御によるジェットプリンターを使用し、注記を行った。なお、注記不可能な細片についてはビニール袋に入れ、必要事項を記入して整理した。遺物の接合・復元は可能な限り行い、接合にはセメダインＣを、復元には必要に応じてエポキシ系樹脂（バイサム）を用いて修復を行った。現地で作製した実測図は各遺構ごとに整理し、図面保管封筒に保管した。

検出された遺構・遺物の数量に基づき、報告書作成用の割り付けを決定した。遺構図面は図面修正を加えた後に版組を行い、遺物実測は原寸実測を基本として、トレース作業、版組を行った。上記の作業に並行して、遺構・遺物の事実記載、調査内容についての原稿を執筆した。遺物写真撮影には、ブローニー判モノクロームフィルムを使用した。



□ 想定上野国府域　　第１図　総社関泉明神北遺跡位置図（1/25,000）

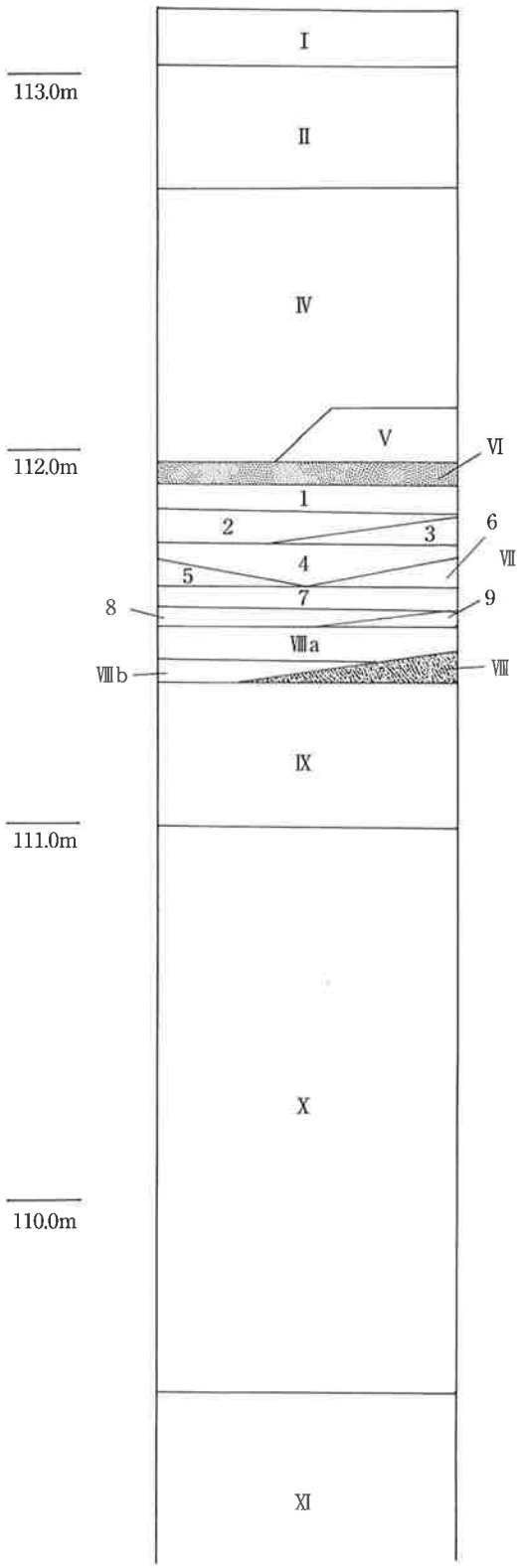


●遺跡の位置　　第２図　地籍図（明治21年陸地測量部発行、地方迅速図80％縮小で1/25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	縄　文	弥　生	古　墳	奈良・平安	中・近世
1	総社閑泉明神北遺跡					
2	国分境遺跡			集落	集落	
3	上野国分僧寺・尼寺中間地域	集落	集落	集落		
4	散布地・古墳			古墳		
5	散布地・墳墓			散布地・墳墓		
6	塚田村東遺跡				集落	
7	鳥羽Ⅱ遺跡			集落	集落	居館
8	墳墓					
9	墳墓					
10	弥勒古墳					墳墓
11	鳥羽遺跡				集落	居館
12	染谷川遺跡			包蔵地		
13	弥勒山古墳			古墳		
14	早道遺跡Ａ・Ｂ					
15	草作遺跡			集落	集落	
16	天神遺跡				集落	
17	閑泉樋遺跡			集落	溝	
18	閑泉樋南遺跡			竪穴状遺構	集落	
19	元総社寺田遺跡	旧河道	旧河道	水田	集落・水田	水田
20	堰越Ⅱ遺跡				集落	
21	大友屋敷Ⅲ遺跡				集落	
22	五反田遺跡				水田	
23	寺田遺跡				大溝・水口	
24	元総社小学校校庭遺跡				集落	
25	堰越遺跡				集落	
26	樋越遺跡				土坑・溝	
27	昌楽寺廻村東遺跡			建物遺構		
28	産業道路東遺跡	集落跡				
29	産業道路西遺跡	集落跡				
30	稲荷山古墳			円墳		
31	王山古墳			前方後円墳		
32	墳墓二			削平		
33	墳墓一			円墳・削平		

第Ⅲ章　基本層序



第３図　基本土層・柱状図

Ⅰ層　10YR3/4　暗褐色土　耕作土

Ⅱ層　10YR4/3　暗褐色土

Ⅳ層　褐色砂礫層　河川の流れによって運ばれた砂層及び砂礫層。

Ⅴ層　10YR3/4　Hr-FA に伴う火山泥流堆積物

Ⅵ層　Hr-FA（榛名二ツ岳火山灰）一次堆積層。6 世紀初頭。場所により色調が異なる。
10YR4/6褐色、10YR4/1灰色、10YR4/4褐色。

Ⅶ層　黒色粘質土と砂礫によって形成され、9 層に細分される。

1　10YR2/1　黒色土　粘性が強い。

2　10YR2/1　黒色土　As-C を多く含む。

3　褐色粗砂層

4　10YR2/1　黒色土　微砂をラミナ状に多く含む。

5　黒色粗砂層　As-C を多量に含む。

6　褐色粗砂層　As-C を多く含む。

7　10YR2/1　黒色土　粒子がきめ細かく、粘性が強い。

8　10YR2/2　黒褐色土　粘性が強い。

9　As-C の水性二次堆積層。

Ⅷa層　10YR2/2　黒褐色土　As-C 混土層。

Ⅷ層　As-C（浅間 C 軽石）一次堆積層。

Ⅸ層　10YR2/1　黒色土　粒子が細かく、締まり粘性ともに強い。

Ⅹ層　10YR2/2　黒褐色土　粒子が細かく、締まり粘性ともに強い。

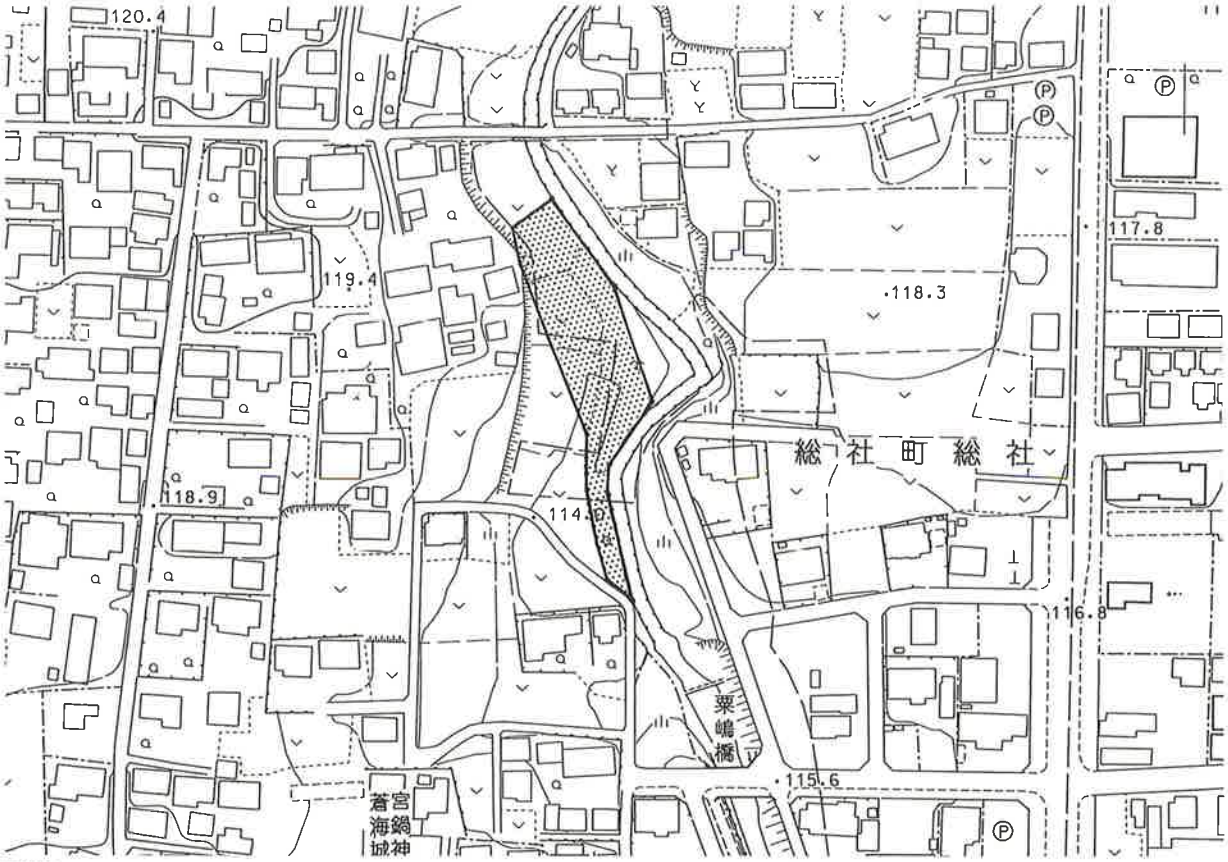
XI 層　砂礫層　河川の流れによって運ばれた礫層。縄文土器を含んでいる。

遺跡の層序は地点によって多少の違いはあるが、基本的には第３図に示した通りである。今回の調査においてはAs-B（浅間山：1108年）の堆積はみられなかった。また、Hr-FAに伴う火山泥流堆積物（Hr-FPF１）の堆積は調査区中央で部分的に検出されたのみであり、調査区の大半でHr-FA一次堆積層の直上に、水流によって運ばれたとみられる砂礫層（Ⅳ層）が直接堆積している。指標テフラを伴うものは、Ⅵ層‥Hr-FA（榛名山：６世紀初頭）、Ⅷ層‥As-C（浅間山：４世紀中葉）である。遺構検出面はⅡ層（中世）、Ⅵ層直下（古墳時代）、Ⅶ層中（古墳時代）、Ⅷa・Ⅷ層直下（古墳時代）である。遺物包含層は古墳時代から奈良・平安時代の遺物が出土した砂礫層のⅣ層、トレンチ調査によって縄文時代の遺物が出土した同じく砂礫層であるXI層である。

第Ⅳ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地

前橋市は、地質及び地形から東北部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地、東部の広瀬川低地帯、南部の現利根川氾濫原の４地域に分けられる。前橋台地は、古くは浅間山の山体崩壊が原因とされる前橋泥流により形成された洪積台地で、その後、河川の浸食、湿地化などを経て現在に至っている。台地の東側には広瀬川低地帯が幅３kmの細長い沖積地として広がり、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。なお、元利根川は現在の井野川流域



調査区域　　第４図　遺跡周辺の地形図（1/2,500）

と推定される。

前橋台地の西部には相馬ケ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下している。牛池川はその河川の一つで群馬郡群馬町東牛池沼に発し元総社町南部字落合で染谷川に合流している。

総社閑泉明神北遺跡は、前橋台地上に立地し、群馬県庁より西へ約２km、JR 上越線新前橋駅の北方約２km の牛池川右岸に位置している。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺は上野国府域として想定される地域であり、周辺で行われた発掘調査の成果からは縄文時代からの連綿とした生活の痕跡が発見されている。

縄文時代では国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡があり、前期・中期の集落遺跡が調査されている。その他、下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡なども挙げられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡と後期の住居跡が検出された国分寺中間地域、桜ケ丘遺跡、下東西遺跡などが散見される程度である。

古墳時代では６世紀前半の川原石を用いた積石塚である山王古墳、それに続く本遺跡の北約２km の総社古墳群が挙げられる。また、国指定史跡で前方部と後方部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸70m を測る遠見山古墳、また県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳など多数所在する。しかし本時代の特徴として、古墳は数多く存在するにもかかわらず大きな集落は検出されていないという指摘もある。

奈良・平安時代に至ると、国府、国分二寺が造営され、古代上野の政治・文化の中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡には、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒山遺跡がある。

国分寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代からは部分的ながら発掘調査が進められるようになった。国分僧寺の発掘調査は昭和55年から始まり、礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺の遺跡としては、中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等があり、これらの遺跡からは奈良・平安時代の住居跡が多数検出されている。また、多くの遺跡から、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、硯、墨書土器等の出土がみられ、鳥羽遺跡からは神社跡と推定される特殊遺構が検出されている。

中世には蒼海城が築かれる。現在の街路の祖形は、蒼海城の堀割り跡が道路に変化したものであり、蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用したものである。

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

第１節　概　要

調査区は、度重なる洪水による堆積土とさらに水流による浸食、砂礫の堆積を繰り返し、複雑な堆積状況をみせている。指標となるテフラは Hr-FA 及び As-C が確認されたが、As-B は認められなかった。

検出された遺構・遺物は、中世以降から縄文時代に遡るものであった。中世以降（Ⅱ層上面）では溝９条、土坑６基、井戸１基、住居跡１軒が検出されている。

Ⅳ層は旧牛池川と想定される河道に、厚く堆積した砂礫層である。この層中から、古墳時代から平安時代

にかけての土器片が多く出土している。

Ⅵ層（Hr-FA）直下からは水田跡が検出された。調査区のほぼ中央には、南北走行の大畦畔を伴う水路が検出され、北上すると東に向かって湾曲し、次第に浅くなっている。取水口はこの湾曲した部分の北西側に認められた。畦畔は水路の西側で明瞭に検出されていて、水田面からは木杭や部材などの木製品が出土している。

Ⅵ層からⅧ層に至る層位で溝５条が検出されている。これらは水田が営まれた時点では完全に埋没していたと考えられる。遺物は土師器、縄文土器、木製品が出土している。

As-C 直下の面では畠跡と想定される遺構が検出されている。

Ⅸ層以下から弥生・縄文土器を包含する層の存在が予想された為、調査を行った。その結果、縄文時代前・後期に至る遺物が出土している。

第２節　中　世

第１項　溝

本遺構面においては９条が検出されている。その性格を明瞭に捉えられるものはなかったが、W－１～６号溝については断面形状や走行の状況から河道の可能性が高く、いずれも南西から北東へと走向する。台地の傾斜からすると逆流しているかの様相であるが、西側の台地から谷地中心部への流れと考えればごく自然の走向ではある。W－７号溝は埋没土の様子から時期が下るとみられ、走向から牛池川からの取水を目的とした溝と考えられる。

W－８・９号溝は走向が他の溝とは異なり、断面形状から判断して人為的な堀跡の可能性が高い。

W－９号溝においては埋没土の様子や出土遺物から他の溝よりやや先行するものと考えられる。

いずれの溝もⅣ層が形成された以降に機能していたものであるが、出土している遺物は流れ込みとみられるもので、各溝が機能していた時期を特定することはできなかった。なお、各溝の記述において走向と併せて検出された範囲の端で底面の標高を示した。

W－１号溝（第５・９・11図、第３表、図版４・９）

位置　R・S－２グリッド。　**重複**　W－２号溝より新しい。　**規模**　調査区北東際に南東側面が検出されたのみで全容は不明。**形状**　不明。南側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　灰黄褐色や暗褐色を基調としたもので水流によって運ばれたとみられる細砂層が間層として入る。

W－２号溝（第５・６図、図版４）

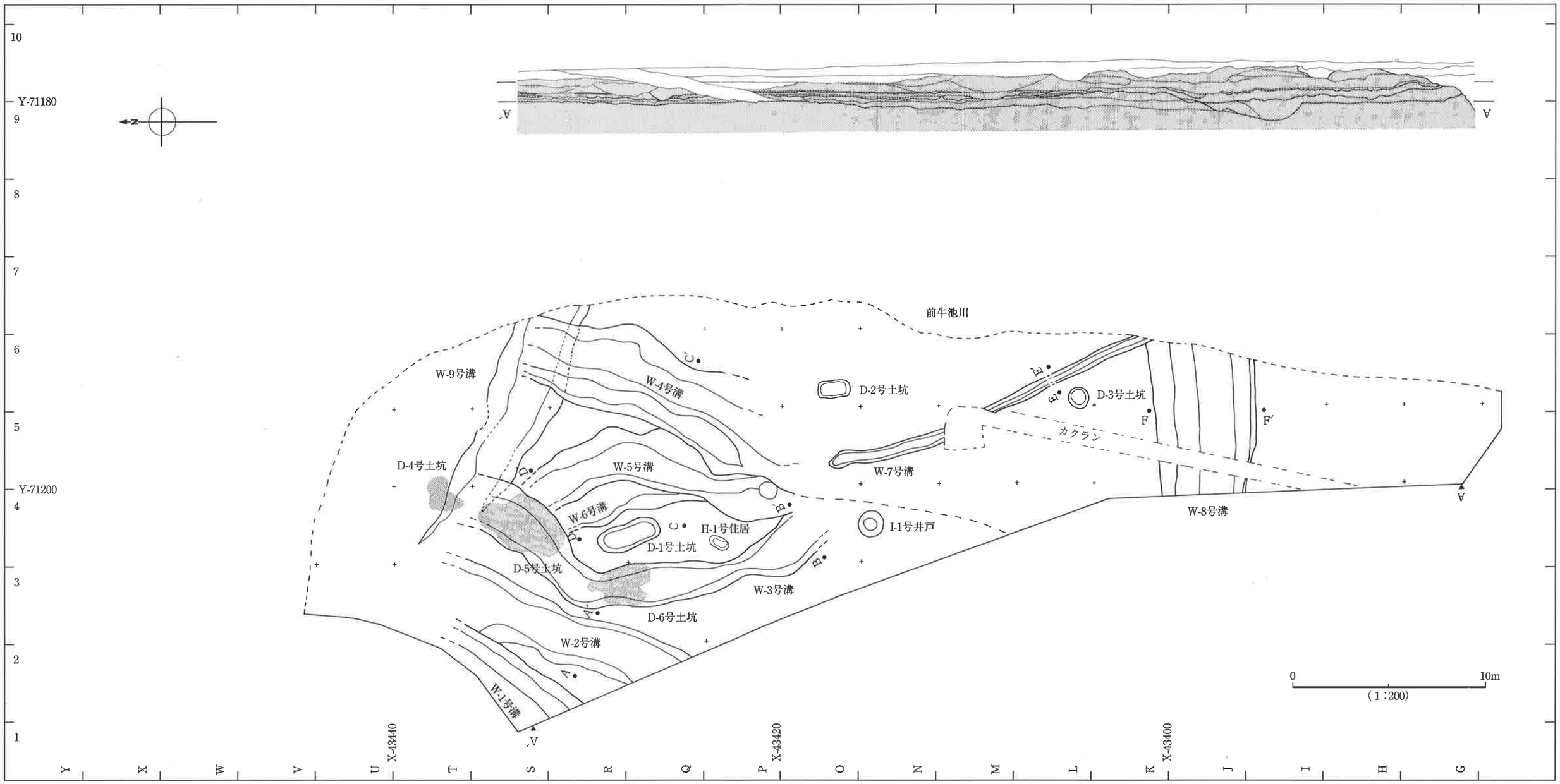
位置　R－２・３、S－３グリッド。**重複**　W－１号溝より古い。**走向**　南西（113.30m）－北東（113.02m）　**規模**　幅2.50～2.95m　深さ0.45m　**形状**　底面はほぼ平坦で側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　粘性のある土質で自然堆積。

W－３号溝（第５・６図、第３表、図版４・９）

位置　P～R－３、O・S－４グリッド。**重複**　W－５・６号溝より新しく、埋没土後にD－４・５・６号土坑が掘込まれる。**走向**　南（112.52m）－北（112.45m）　**規模**　幅1.05～2.50m　深さ0.43m　**形状**　底面は凹凸があり側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　水流に運ばれたとみられる砂礫層が自然堆積。

W－４号溝（第５・６・11・14図、第３・７・14表、図版４・９・10）

位置　P－５・６、Q－５・６、R・S－６、グリッド。**重複**　W－９号溝より新しくW－５号溝より古い。**走向**　南西（112.46m）－北東（112.37m）　**規模**　幅3.25m　深さ0.50m　**形状**　断面形は浅いＵ字


前牛池川
W-9号溝
W-4号溝
D-2号土坑
D-3号土坑
カクラン
W-7号溝
W-8号溝
D-4号土坑
W-5号溝
W-6号溝
H-1号住居
D-1号土坑
I-1号井戸
D-5号土坑
W-3号溝
D-6号土坑
W-2号溝
W-1号溝
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
0
10m
(1:200)
Y-71180
Y-71200
X-43440
X-43420
X-43400

第5図　中世・古代全体図

状で側面は緩い傾斜で立ち上る。**埋没土**　褐色を基調にした粘質土が自然堆積。

W－5号溝（第5・6・10図、第3表、図版4・9）

位置　P－4・5、Q－4・5、R－4・5グリッド。**重複**　W－6号溝より新しくW－3・4号溝より古い。**走向**　南（112.92m）－北（112.73m）**規模**　幅2.28～3.08m　深さ0.43m　**形状**　断面形は浅いU字状で凹凸があり側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　褐色を基調とした砂質土が自然堆積。

W－6号溝（第5・10図、第3表、図版4）

位置　Q・R－4グリッド。**重複**　W－3・5号溝より古い。走向から判断してW－5号の旧流路の可能性がある。**走向**　W－5号溝にほぼ並行する。**規模**　幅（2.48m）　深さ0.12m　**形状**　側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　暗褐色を基調とした粘質土が堆積し、底面付近では細砂を多量に含む層が堆積する。

W－7号溝（第5・6図、図版4）

位置　K・L－6、M～O－5グリッド。**重複**　W－4号溝より新しい。**走向**　北西（113.40m）－南東（113.12m）**規模**　幅0.62m　深さ0.12m　**形状**　断面形はU字状である。**埋没土**　耕作土に似る土質で小礫が含まれる。

W－8号溝（第5・6図、図版4）

位置　K－5・6、L－5・6グリッド。**重複**　なし。**走向**　西－東。検出範囲においてほぼ水平（112.53m前後）。**規模**　幅5.18m　深さ0.52m　**形状**　底面は平坦で側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　暗褐色を基調とした粘質土が自然堆積。

W－9号溝（第5・10図、第3・4・15表、図版4・10）

位置　R－6・7、S－4・5、T－4・5グリッド。**重複**　W－3・4号溝より古い。**走向**　北西－南東。検出範囲においてほぼ水平（114.10m前後）。**規模**　幅3.21m　深さ0.10m　**形状**　断面形は浅いU字状で側面は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　暗褐色を基調とした粘質土が自然堆積。

第2項　土坑

土坑と呼称したものは6基であるが、このうちD－4～6号土坑はW－3号溝の埋没後にその埋没土を掘り込んでいる。いずれも、礫が出土していて、D－3、D－4号土坑からは宝篋印塔、五輪塔、石臼が出土している。

D－1号土坑（第5・8図、図版4）

位置　Q・R－4グリッド。**重複**　なし。**規模**　長軸3.22m　短軸1.30m　深さ0.38m　**形状**　平面形は楕円形で底面はほぼ平坦である。側壁はやや開き気味に立ち上がる。　**主軸方向**　N－161°－E　**埋没土**　褐色を基調とした粘質土が堆積。**出土遺物**　なし。

D－2号土坑（第5・8図、図版4）

位置　O－6グリッド。**重複**　なし。　**規模**　長軸1.62m　短軸0.90m　深さ0.29m　**形状**　平面形は長方形で側壁は傾斜して立ち上がる。**埋没土**　暗褐色を基調とし小礫を多く含んだ土層が堆積。**主軸方向**　N－176°－E　**出土遺物**　なし。

D－3号土坑（第5・8図、図版4）

位置　L－6グリッド。**重複**　なし。**規模**　長軸1.06m　短軸1.00m　深さ0.36m　**形状**　円形で側壁はやや傾斜して直線的に立ち上がる。　**埋没土**　暗褐色を基調としたもので、水流により堆積したものと思われる。**出土遺物**　なし。

D－4号土坑（第5・7・12図、第6表、図版4・5・9）

位置　T－4グリッド。**重複**　W－3号溝より新しい。**規模**　平面形状は本土坑とW－3号溝との埋没土の判別が困難であり捉えきれなかった。**出土遺物**　自然礫と共に五輪塔水輪、石臼が出土している。**所見**　W－3号溝埋没土を掘り込んでいると判断されるが、礫の出土範囲はW－3号溝のプラン内に収まっていることから、溝がその痕跡を留めているある時期に構築されたと判断される。

D－5号土坑（第5・7・12・13図、第4・6・8・9表、図版4・5・9・10）

位置　S－4グリッド。**重複**　W－3号溝より新しい。**規模**　長軸3.46m　短軸（中央部）2.72m　（北東部）1.35m　深さ0.78m　**形状**　不整長方形で北東では円形に張り出すような形状である。底面は皿状で側壁は北東部ではほぼ垂直に立ち上がり、中央部分では傾斜して立ち上がる。**埋没土**　細砂を含む暗褐色を基調としたやや粘性のある土が堆積する。**出土遺物**　土師質土器小皿、宝篋印塔の基礎、五輪塔の空風輪、火輪、石臼が出土している。**所見**　掘込みの範囲はW－3号溝のプラン内に収まっていて、構築に際してはW－3号溝の存在を意識していたと判断される。北東部での礫や五輪塔は規則的に配置された様子がみられ、中央部では掘込みの側壁から底面にかけて広く出土している。

D－6号土坑（第5・7図、図版4）

位置　Q・R－3グリッド。**重複**　W－3号溝より新しい。**規模**　長軸2.58m　短軸2.42m　深さ0.24m　**形状**　平面形は不整形で断面形は浅い皿状である。やや凹凸がある。**埋没土**　暗褐色を基調としたやや粘性のある土が堆積する。**所見**　D－4・5号土坑と同様にW－3号溝埋没土を掘り込んで構築されている。構築に際してはW－3号溝の存在を意識していたと判断される。

第3項　井戸

I－1号井戸（第5・8・14図、第1・6・8表、図版4・5・10）

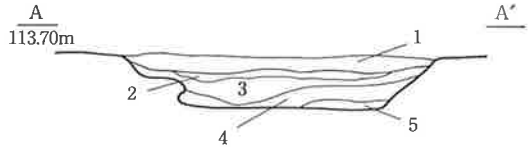
位置　N－4グリッド。**重複**　なし。**規模**　直径1.36m　深さ1.36m　**形状**　平面形は円形で底面は平坦である。断面形は下方はほぼ円筒形で、上方はやや開き気味に傾斜する。**埋没土**　小礫や細砂を含んだ暗褐色を基調とした土が堆積する。**出土遺物**　自然礫と共に五輪塔の火輪が出土している。

第3節　古代

第1項　住居跡

H－1号住居跡（第5・8・11図、第4表、図版4・5・9）

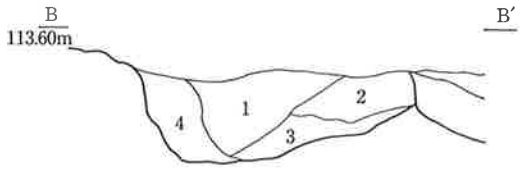
位置　P－4グリッド。**重複**　なし。ただし周辺部をカクランによって切られる。**規模**　長軸(1.05m)　短軸（0.6m）　深さ0.23m　**埋没土**　焼土粒、炭化粒を含んだ暗褐色土が堆積。**出土遺物**　土師器坏、須恵器坏、羽釜が南東寄りから出土している。**所見**　住居竪穴部は削平されカマドのみの検出である。形状から判断して北カマドの可能性が高い。



W-2号溝

W-2号溝層序説明

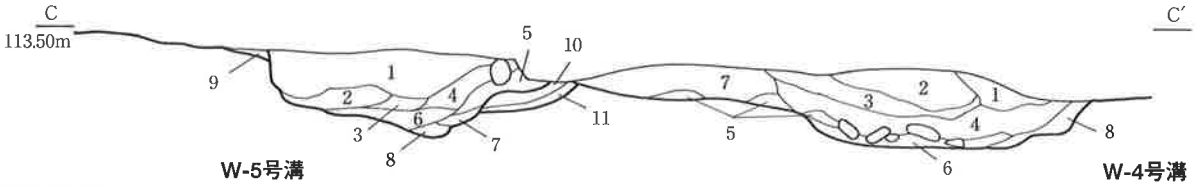
1	7.5YR3/2	黒褐色土	粘質土。細砂を多く含む。締まりよく堅い。粘性あり。
2	10YR3/3	暗褐色土	砂層。締まりよく堅い。粘性ややあり。
3	10YR4/2	灰黄褐色土	シルト質土。よく締まり堅い。粘性あり。
4	10YR4/2	灰黄褐色土	砂層。締まりよくや粘性ややあり。
5	10YR4/4	褐色土	シルト質土。細砂を多量に含み、浅間C軽石（φ2～5mmを微量含む。締まりよく堅い。粘性ややあり。



W-3号溝

W-3号溝層序説明

1	10YR4/1	褐灰色土	細砂層
2	10YR4/1	褐灰色土	細砂層。水平にラミナ状堆積。
3			礫（φ10～50mm）が堆積。
4	10YR4/3	暗褐色土	細砂を少量含む。締まりよく粘性ややあり。



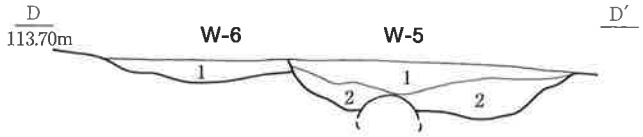
W-5号溝　　W-4号溝

W-5号溝層序説明

1	10YR4/1	褐灰色土	砂質土。下位には小礫（φ10mm）が厚さ5cm前後で層状に堆積する。締まりよく粘性ややあり。
2	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。細砂を少量含む。締まりよく粘性あり。
3	10YR4/1	褐灰色土	砂質土。下位には小礫（φ10mm）が厚さ5cm前後で層状に堆積する。締まりよく粘性ややあり。
4	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。細砂を少量含む。白色微粒子を微量に含む。締まりよく粘性あり。
5	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土。ブロック状のシルト質土（FAに伴う堆積物か）を多量に含む。締まりよく硬い。粘性あり。
6	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質土。ブロック状のシルト質土（FAに伴う堆積物か）をやや多く含む。締まりよく硬い。粘性あり。
7	10YR4/5	にぶい黄褐色土	砂質土。ブロック状のシルト質土（φ10mm）を微量含む。締まりよく硬い。粘性ややあり。
8	10YR4/5	にぶい黄褐色土	砂質土。小礫（φ10mm）を多量に含む。締まりよく堅い。粘性ややあり。
9	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。細砂を少量含む。白色微粒子を微量に含む。締まりよく粘性あり。
10	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。礫（φ10mm）を多量に含み、細砂少量含む。締まりよく粘性あり。
11	10YR4/1	褐灰色土	砂質土。締まりよい。粘性ややあり。

W-4号溝層序説明

1	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。砂を少量含む。締まりよく粘性あり。
2	10YR4/4	褐色土	シルト質土。砂を多量に含む。締まりよく、粘性ややあり。
3	10YR5/6	黄褐色土	砂質土。暗褐色のシルト質土を多量に含む。締まりよく、粘性ややあり。
4	10YR5/1	褐灰色土	上位に褐色化した砂層（厚さ5cmほど）が層状に入る。締まりよく、粘性ややあり。
5	10YR4/1	褐灰色土	細砂層。中位に褐色の砂層（厚さ10mm）が層状に入る。締まりよく、粘性ややあり。
6	10YR4/2	灰黄褐色土	泥流堆積物をブロック状（φ50mm）に含む。締まり弱く、粘性ややあり。
7	10YR3/4	暗褐色土	泥流堆積物をブロック状（φ50mm）に少量含む。締まりよく、粘性ややあり。
8	10YR4/2	灰黄褐色土	砂層に泥流堆積物をブロック状（φ50mm）に含む。締まり弱く、粘性ややあり。



W-5・6号溝

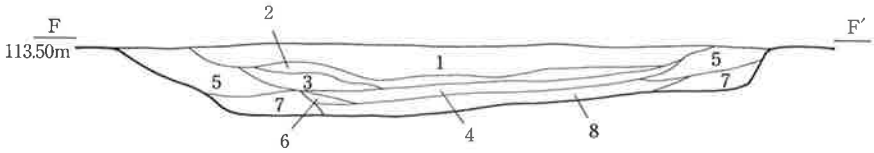
W-7号溝

W-7号溝層序説明

1	10YR3/4	暗褐色土	小礫、As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。締まりよい。粘性あり。

W-6号溝層序説明

1	10YR4/1	褐灰色土	砂質土。締まりよく粘性ややあり。



W-8号溝

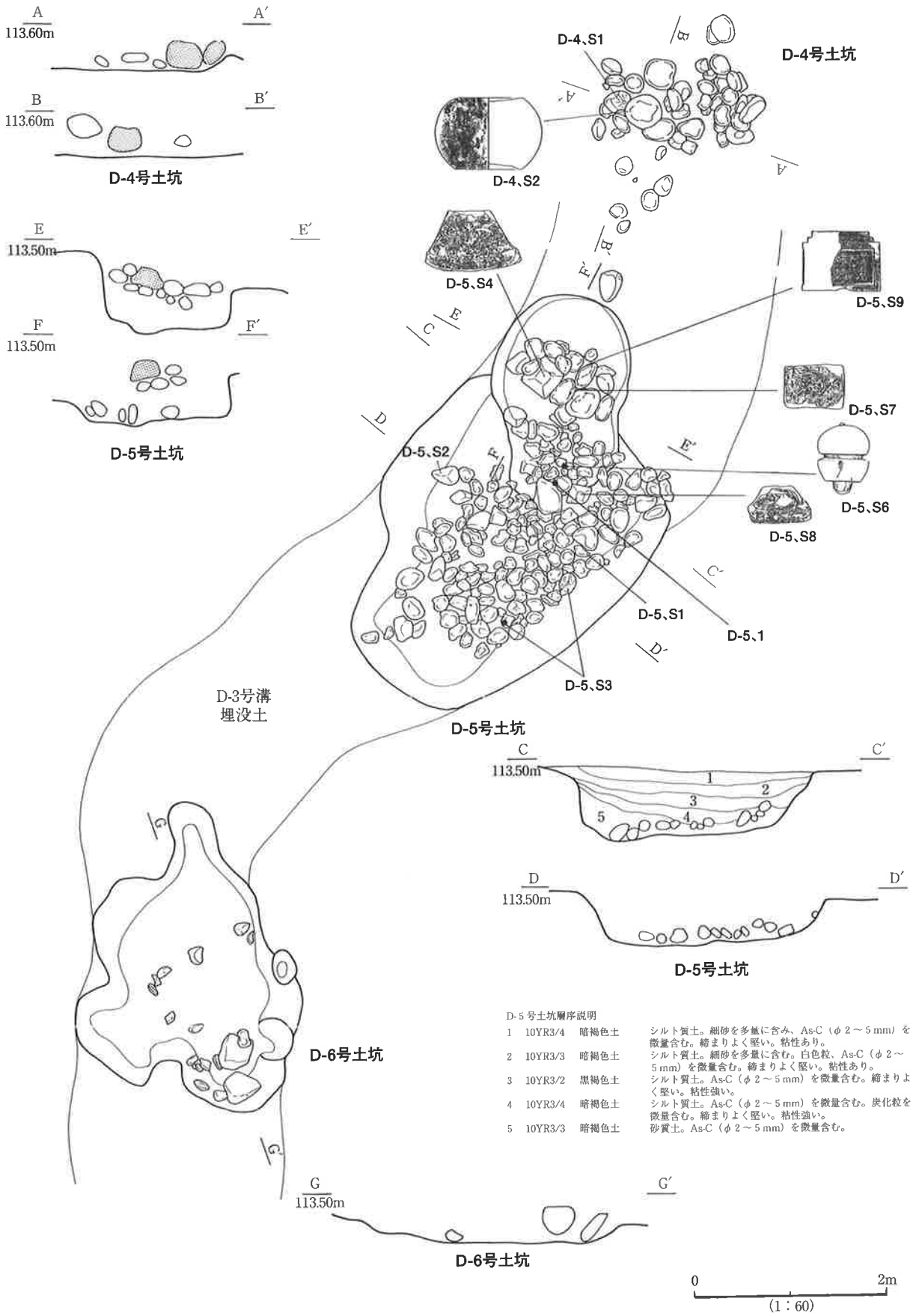
W-8号溝層序説明

1	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ5～10mm）を多く含む。締まりよく堅い。粘性あり。
2	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ5～10mm）を多く含む。締まりよい。粘性ややあり。
3	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ5～10mm）を多く含む。締まりよく堅い。粘性あり。
4	10YR3/2	黒褐色土	FP（φ3～5mm）を多く含む。締まりよい。粘性ややあり。
5	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ3～5mm）を多く含む。締まりよく堅い。粘性ややあり。
6	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ5～10mm）を多く含む。締まりよい。粘性ややあり。
7	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ3～10mm）を多く含む。
8	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ3～10mm）を多く含む。締まりよく堅い。粘性あり。
	10YR3/4	暗褐色土	FA粒子を多量に含み、FP（φ3～10mm）をやや多く含む。締まりよい。粘性ややあり。

W-9号溝

0　2m
(1：60)

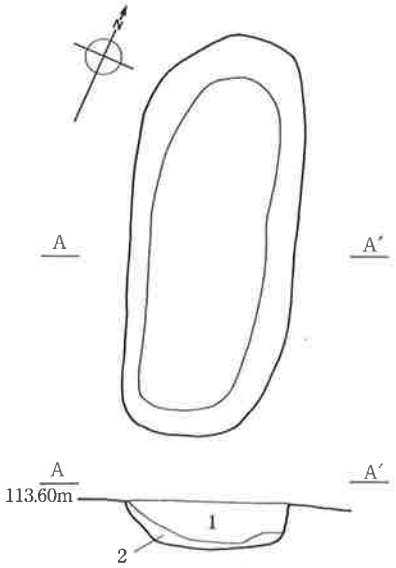
第6図　W-2～9号溝土層断面図



D-5 号土坑層序説明

1	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。細砂を多量に含み、As-C（φ 2 ～ 5 mm）を微量含む。締まりよく堅い。粘性あり。
2	10YR3/3	暗褐色土	シルト質土。細砂を多量に含む。白色粒、As-C（φ 2 ～ 5 mm）を微量含む。締まりよく堅い。粘性あり。
3	10YR3/2	黒褐色土	シルト質土。As-C（φ 2 ～ 5 mm）を微量含む。締まりよく堅い。粘性強い。
4	10YR3/4	暗褐色土	シルト質土。As-C（φ 2 ～ 5 mm）を微量含む。炭化粒を微量含む。締まりよく堅い。粘性強い。
5	10YR3/3	暗褐色土	砂質土。As-C（φ 2 ～ 5 mm）を微量含む。

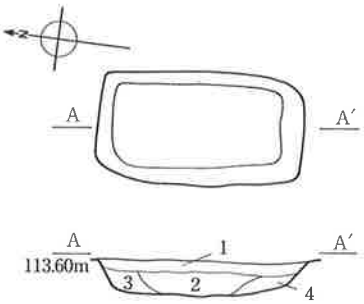
第７図　D- 4 ～ 6 号土坑実測図



D-1号土坑

D-1号土坑層序説明

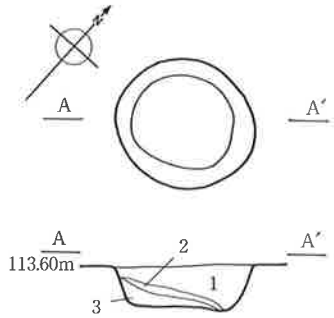
1	10YR4/4	褐色土	シルト質土。細砂を多量に含み、白色軽石粒を微量含む。締まりよく堅い。粘性あり。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	シルト質土。細砂を多量に含み、白色軽石粒を微量含む。締まりよく堅い。粘性ややあり。



D-2号土坑

D-2号土坑層序説明

1	10YR3/4	暗褐色土	小礫、細砂、炭化粒、白色粒、白色軽石（FPではない）をまばらに含む。締まりよい。粘性弱い。河川の氾濫により埋もれたものと思われる。
2	10YR3/3	暗褐色土	小礫、にぶい黄褐色粘質土、炭化粒、白色粒、白色軽石（φ1～2mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性ややあり。河川の氾濫により埋もれたものと思われる。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	小礫、炭化粒、白色軽石（φ3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性ややあり。
4	10YR3/4	暗褐色土	細砂をまばらに含む。締まりよい。粘性ややあり。



D-3号土坑

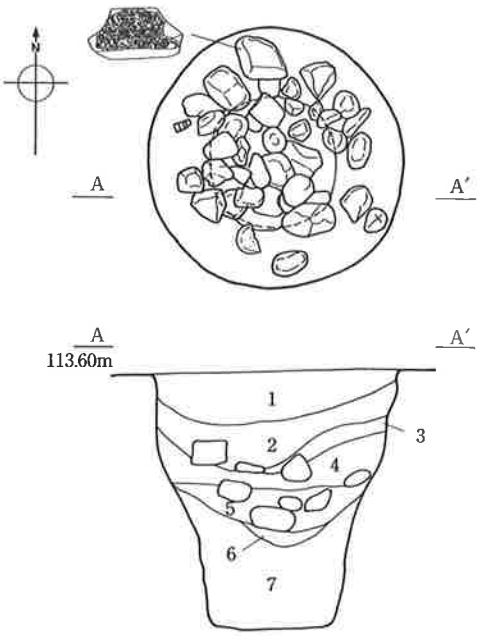
D-3号土坑層序説明

1	10YR4/4	褐色土	小礫、細砂、白色粒、鉄分を含む褐色土、白色軽石（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。河川の氾濫により入り込んだものと思われる。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	細砂、白色粒、白色軽石（φ2～5mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性ややあり。所々に鉄分の沈着がみられる。
3	10YR3/3	暗褐色土	小礫、細砂、炭化粒、白色粒、白色軽石（φ1～2mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性弱い。河川の氾濫によって入り込んだものと思われる。

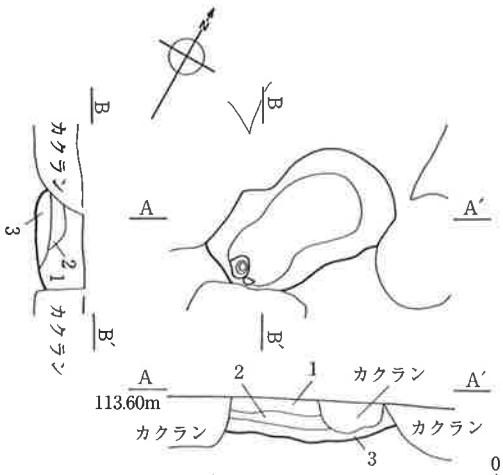
0　2m
（1：60）

I-1号井戸層序説明

1	10YR3/3	暗褐色土	小礫、炭化粒、白色軽石（φ3mm）を多く含む。締まりよい。粘性ややあり。
2	10YR3/3	暗褐色土	小礫、炭化粒、白色軽石（φ3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性ややあり。
3	10YR3/3	暗褐色土	小礫、炭化粒、白色軽石（φ3mm）をやや多く含む。締まりよい。粘性ややあり。
4	10YR3/2	暗褐色土	小礫、細砂、炭化粒、白色粒、白色軽石（φ1～2mm）をまばらに含む。締まりあり、粘性弱い。
5	10YR3/3	暗褐色土	FP（φ3～5mm）を多く含む。締まりよく堅い。
6	10YR3/2	暗褐色土	砂礫（φ細～20mm）から成り、酸化鉄粒子を多量に含む。
7	10YR3/3	黒褐色土	細砂を多量に含む。締まりない。



I-1号井戸　（1：40）



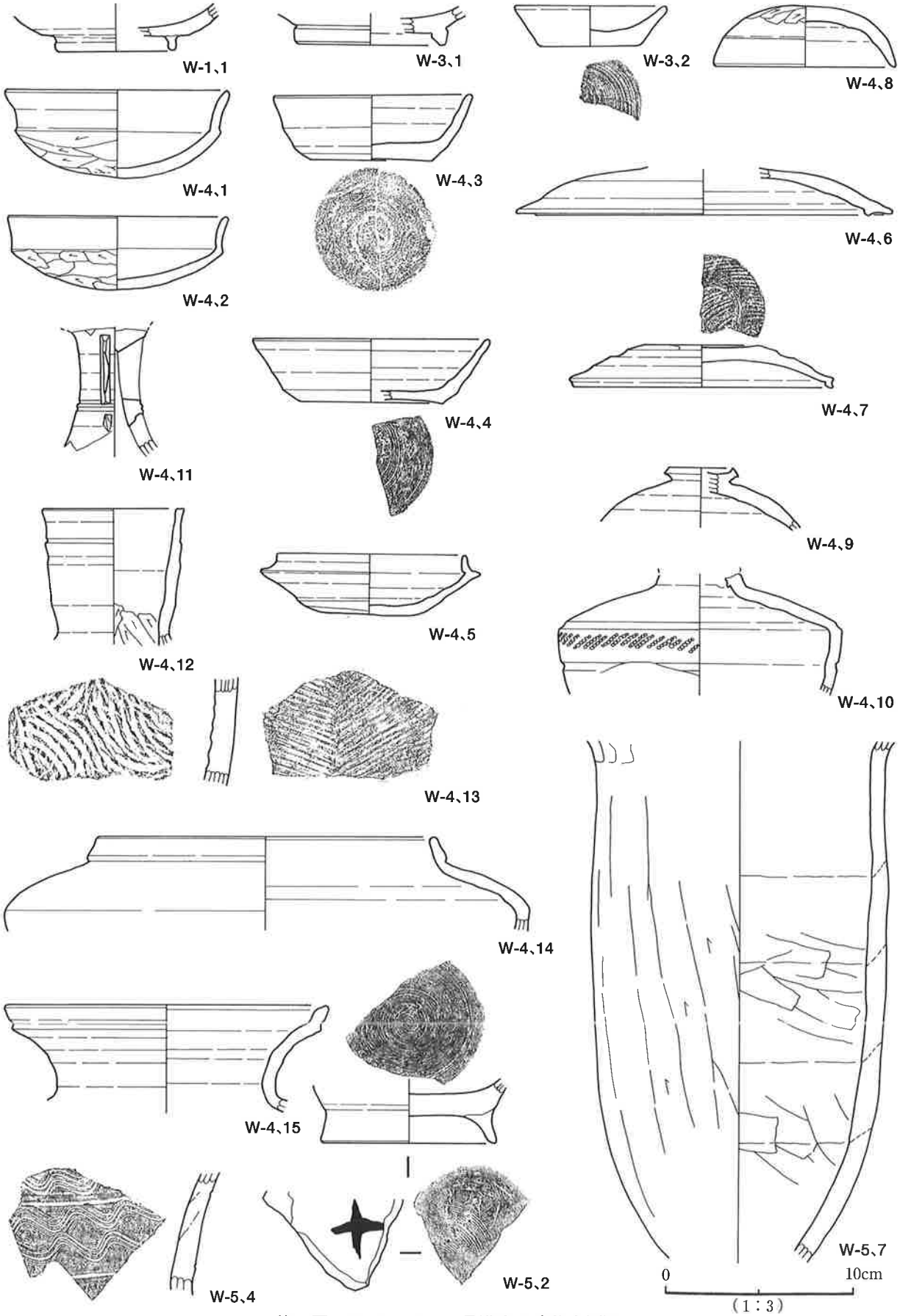
H-1号住居跡

H-1号住居跡層序説明

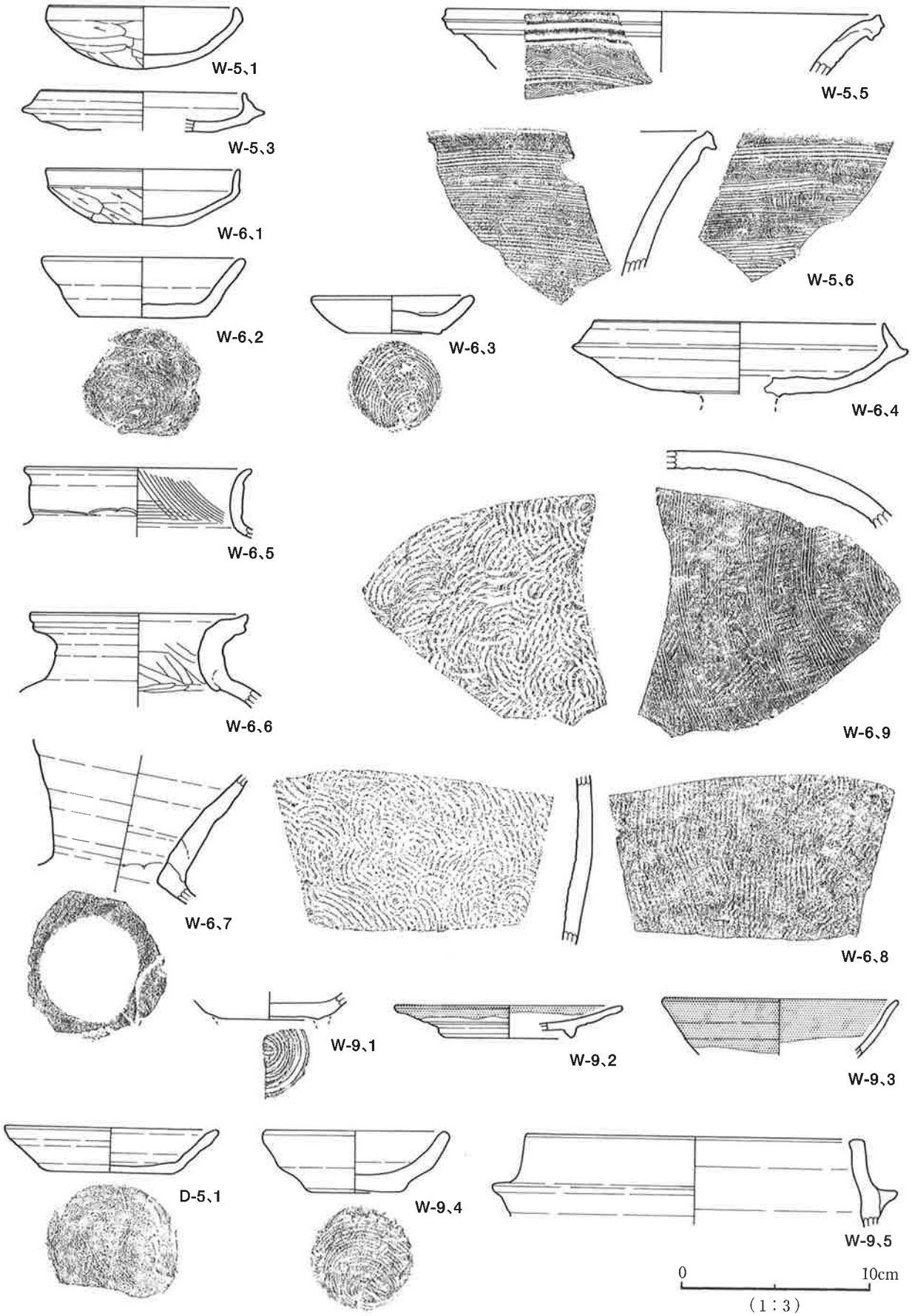
1	7.5YR 3/2	暗褐色土	焼土粒・炭化粒・白色粒（粘土質）＊褐色粒が微量に含まれる。細砂。締まりよく堅い。粘性強。
2	10YR3/3	暗褐色土	焼土粒・炭化粒が微量に、白色粒（粘土質）が少量、褐色粒・細砂が多量に含まれる。締まりよく堅い。粘性あり。
3	10YR3/3	暗褐色土	炭化粒・白色粒（粘土雑）・褐色粒が少量、シルト質土が大量に含まれる。締まりよく堅い。粘性強。

0　1m
（1：40）

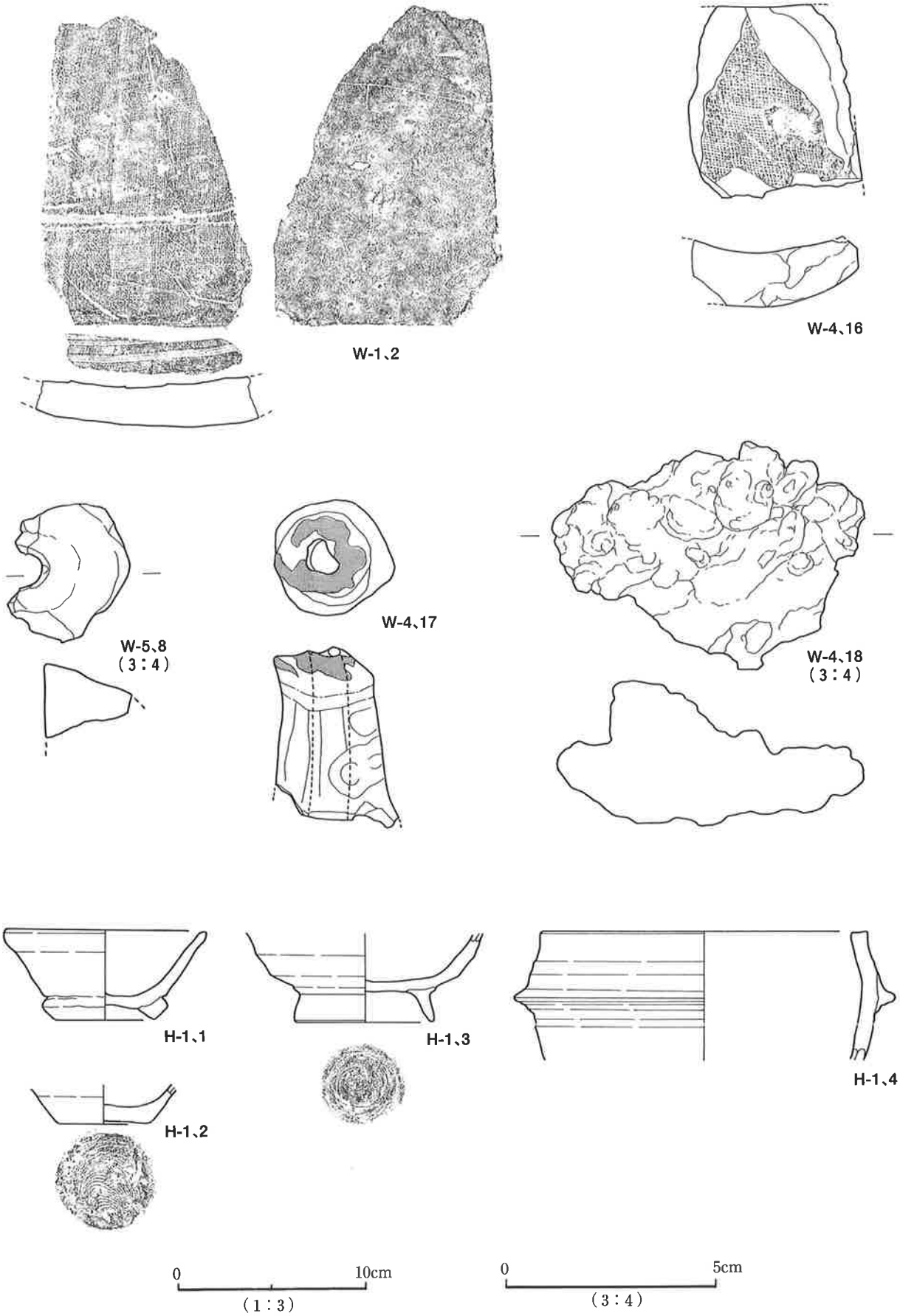
第8図　D－1～3号土坑、I－1号井戸、H－1号住居跡実測図



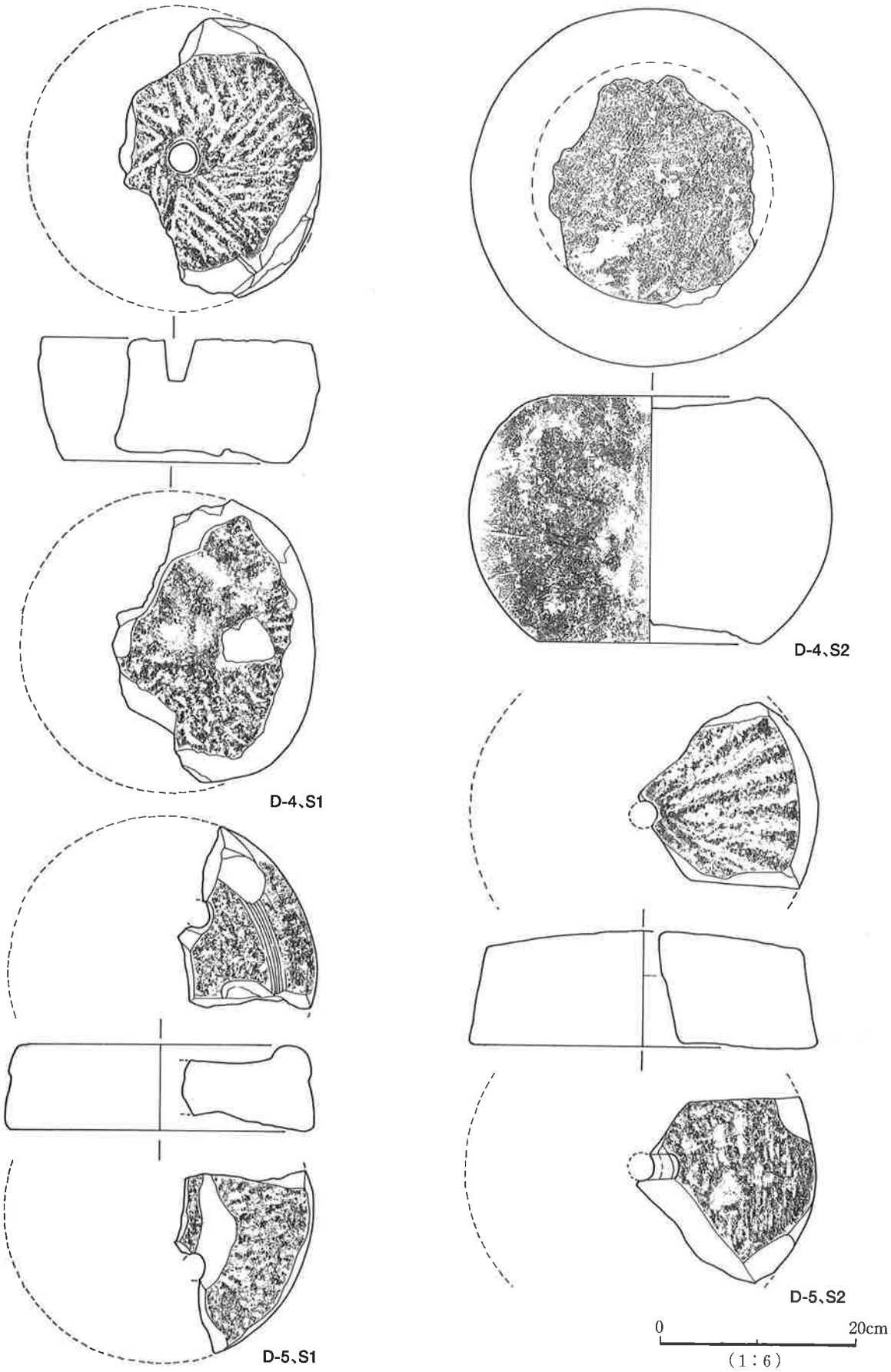
第９図　W-１・３～５号溝出土遺物実測図



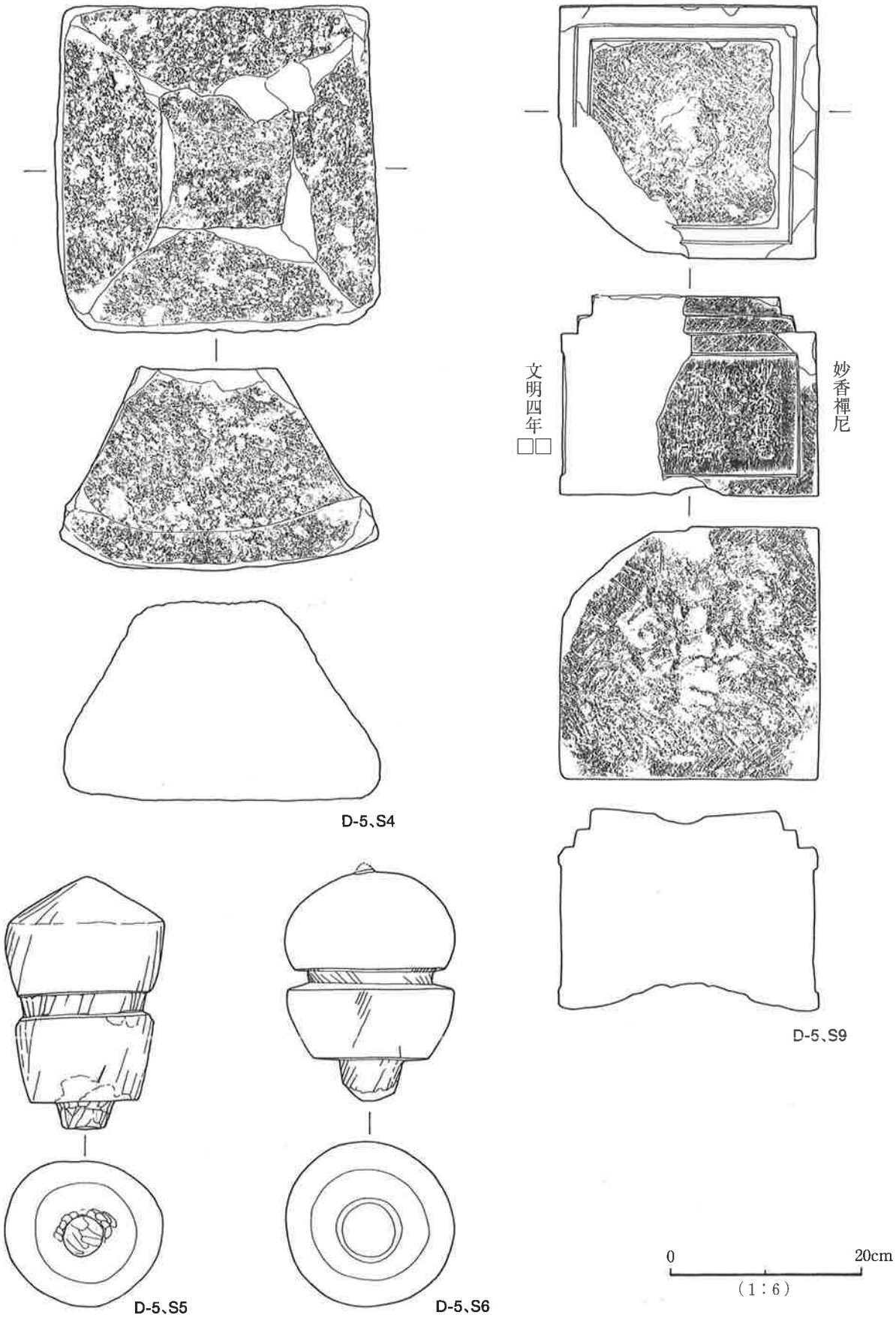
第10図　W－5・6・9号溝、D－5号土坑出土遺物実測図



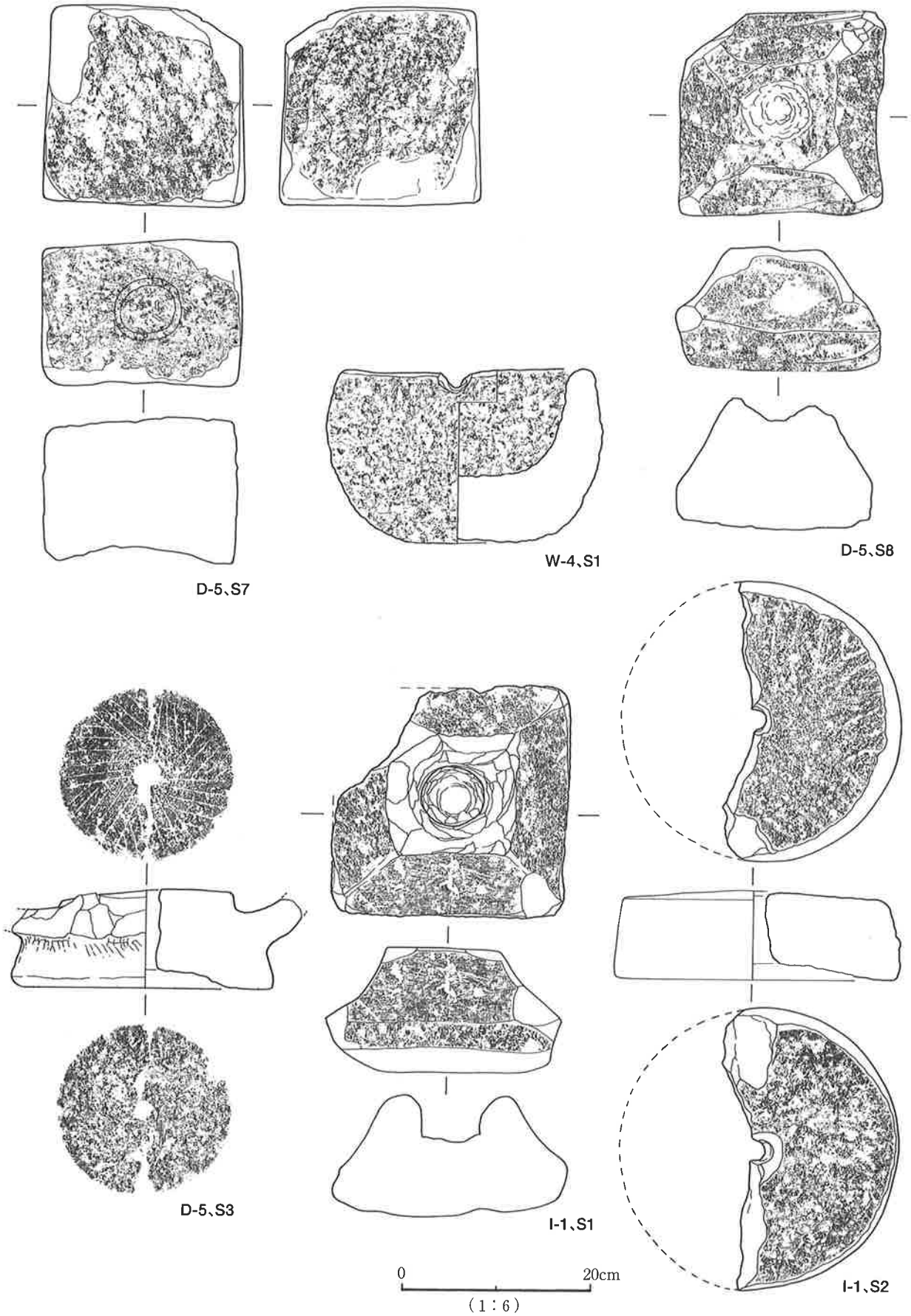
第11図　W－1・4号溝出土瓦、W－4・5号溝、H－1号住居跡出土遺物実測図



第12図　D－4・5号土坑出土石臼実測図



第13図　D-５号土坑出土五輪塔・宝篋印塔実測図



第14図　W－4号溝出土石鉢、D－5号土坑、Ｉ－1号井戸出土五輪塔・石臼実測図

第４節　古墳時代

第１項　FA 下水田跡（第15・16・17・18図、第２・４・10表、図版１・２・５・６・10・11・12）

調査区の東半部は昭和40年代に行われた牛池川改修工事以前の流路であり、遺構面は検出されなかった。

西半部では２～８cm ほどの厚さで堆積した Hr-FA によって覆われた水田跡が検出され、調査区北東寄りで比較的明瞭な小区画水田が検出されている。Hr-FA に直接被覆された溝は W－10・W－11号溝の２条であり、これらの溝によって水田面への配水を行っていたと考えられる。

水田域の微地形は北から南に緩く傾斜していて、北方の水田面 A と南方の水田面 K との比高差は0.15m ほどある。また僅かな差ではあるが東から西に下る傾向がみられる。水田面の高さの差から判断して、小区画水田の北方に設けられた W－11号溝の取水口から、南方へ向かって配水された状況が捉えられる。

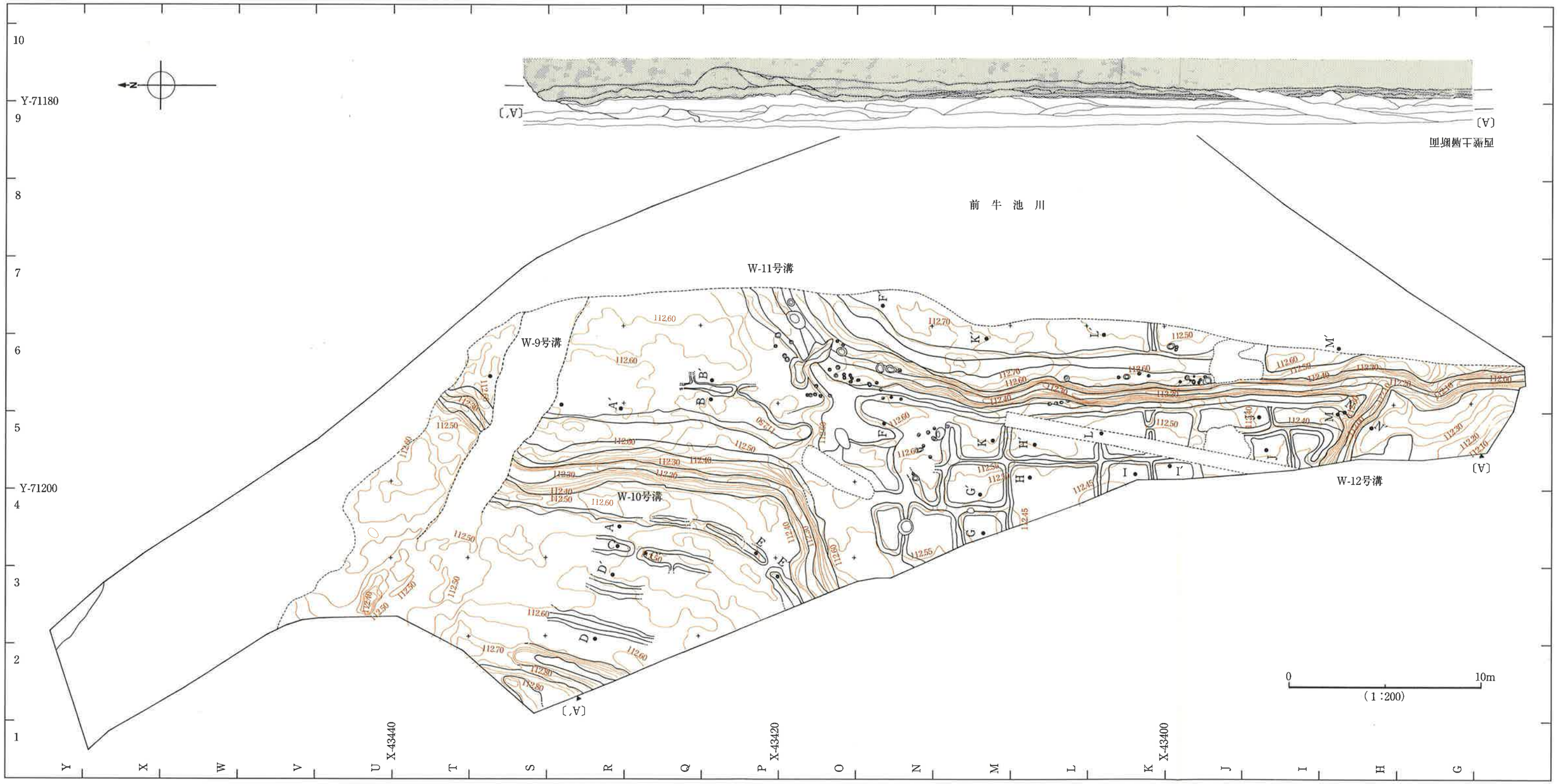
水田面

水田面は調査区の W－10溝西側と W－11号溝の西側に検出された。W－10号溝西側では畦畔の高まりはわずかで詳細は不明瞭であるが、Q－３、R－４グリッドで畦畔の高まりがきれる箇所があり、この部分が水口と想定される。W－11号溝西側では比較的明瞭に検出された。畦畔の走向は北－南方向で下幅0.39m～0.82m、高さ0.01m～0.08m ほどである。全体が把握でき計測可能な水田面は D 水田面（第？図）のみであった。水口は N－５、L－５グリッドで検出されていて、水田面の比高差から P－６グリッドに位置する W－11号溝からの取水口から南方へ配水していたと考えられる。**出土遺物**　水田面直上から杭や部材などの木製品が出土している。また、L－４グリッド内で図示はしていないが Hr-FA 中に稲葉茎部の痕跡（下部写真参照）が検出され、籾が出土している。

第２表　水田面計測表

水田面	長軸(m)	短軸(m)	標高(m)	備考
水田A	2.00	1.20	112.55	
水田B	2.40		112.55	
水田C	2.00	1.80	112.60	
水田D	2.80	1.80	112.50	
水田E	2.00		112.50	
水田F	4.20		112.50	
水田G	4.20		112.45	
水田H	2.00		112.45	
水田I	1.90		112.50	
水田J	3.50	1.10	112.40	
水田K	1.80		112.40	

写真１　Hr-FA 面稲葉茎部痕



第15図　Hr-FA下面全体図

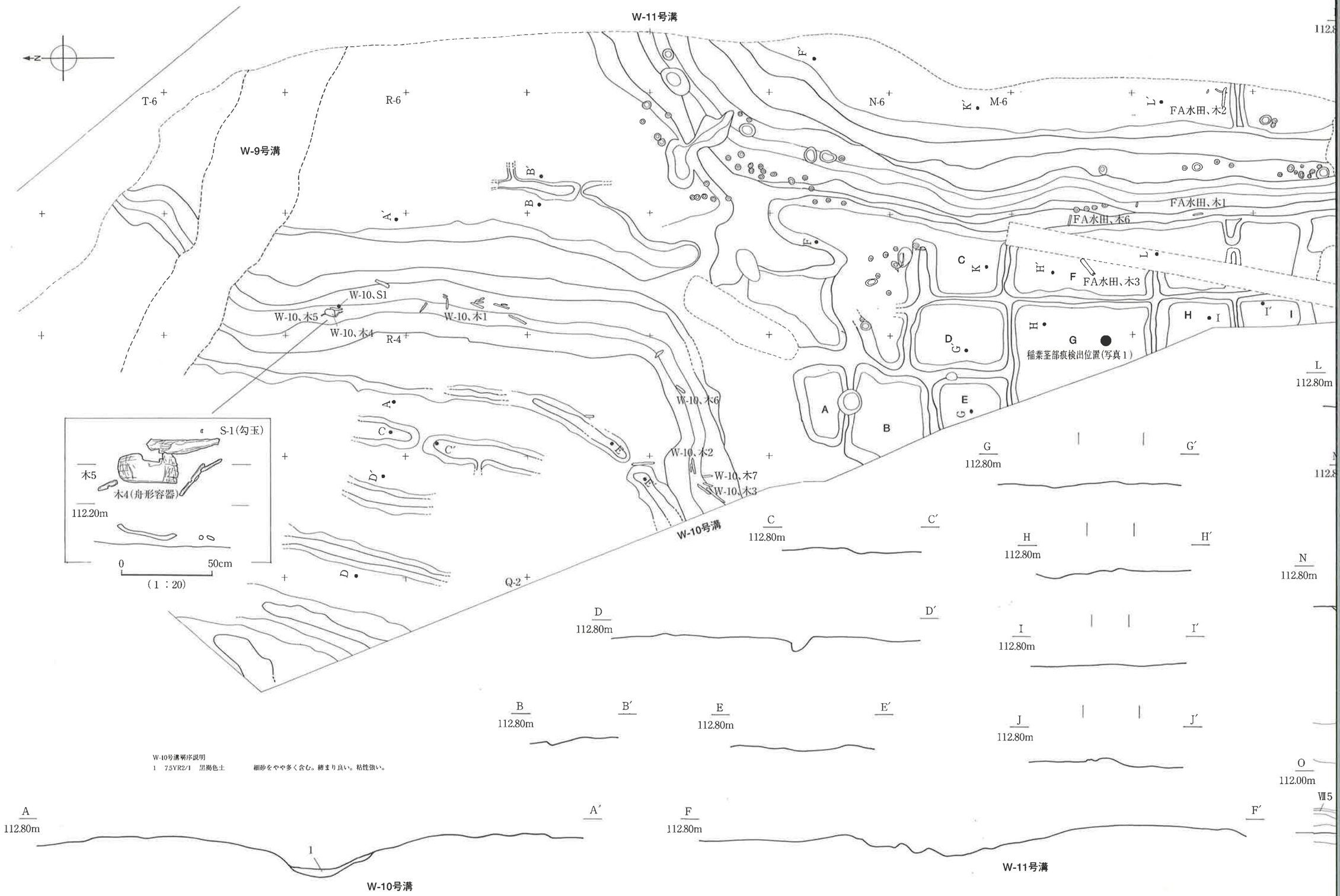
W-11号溝層序説明

1	10YR4/2	灰黄褐色土	砂粒、白色粒、褐色粒、鉄分をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。
2	10YR4/2	灰黄褐色土	第1層と同様であるが、鉄分が含まられない。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	Hr-FAの二次堆積層。砂粒、鉄分、FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性あり。
4	N6/0	灰色土	Hr-FAの二次堆積層。砂粒、FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性あり。
5	10YR4/2	灰黄褐色土	砂層。炭化粒、砂粒、白色粒、FA（φ2～3mm）、鉄分をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。
6	N6/0	灰色土	砂層。鉄分の混入が無いだけで、第5層と同様。
7a	10YR4/3	にぶい黄褐色土	Hr-FA純層。鉄分、Hr-FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性あり。
7b	10N6/0	灰色土	Hr-FA純層。FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。

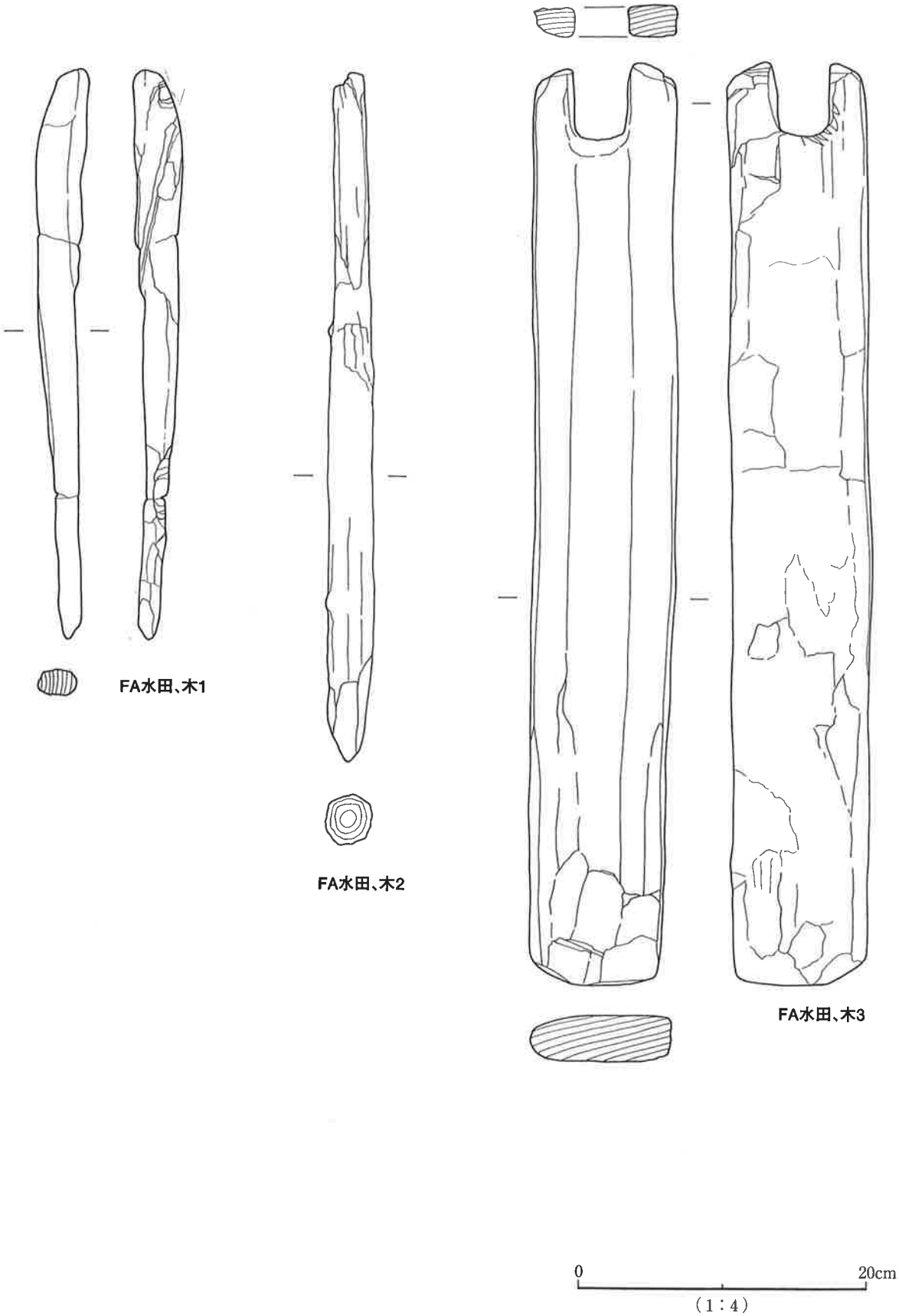
W-12号溝層序説明

1	10YR/	褐色土	小礫、細砂、鉄分、Hr-FA（φ5～10mm）を密に含む。締まりよい。粘性なし。
2	10YR4/2	灰黄褐色土	小礫、細砂、白色粒をまばらに含む。酸化鉄粒を多く含む。締まりよい。粘性なし。
3	10YR4/2	灰黄褐色土	第1層と同様であるが、酸化鉄粒が含まられず、黄色帯びていない。
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土	Hr-FAの二次堆積層。砂粒、鉄分、FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性あり。
5	10YR4/2	灰黄褐色土	砂層。炭化粒、細砂、白色粒、Hr-FA（φ2～3mm）、酸化鉄粒をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。
6	N6/0	灰色土	Hr-FA純層。鉄分、FA（φ2～3mm）をまばらに含む。締まりよい。粘性なし。

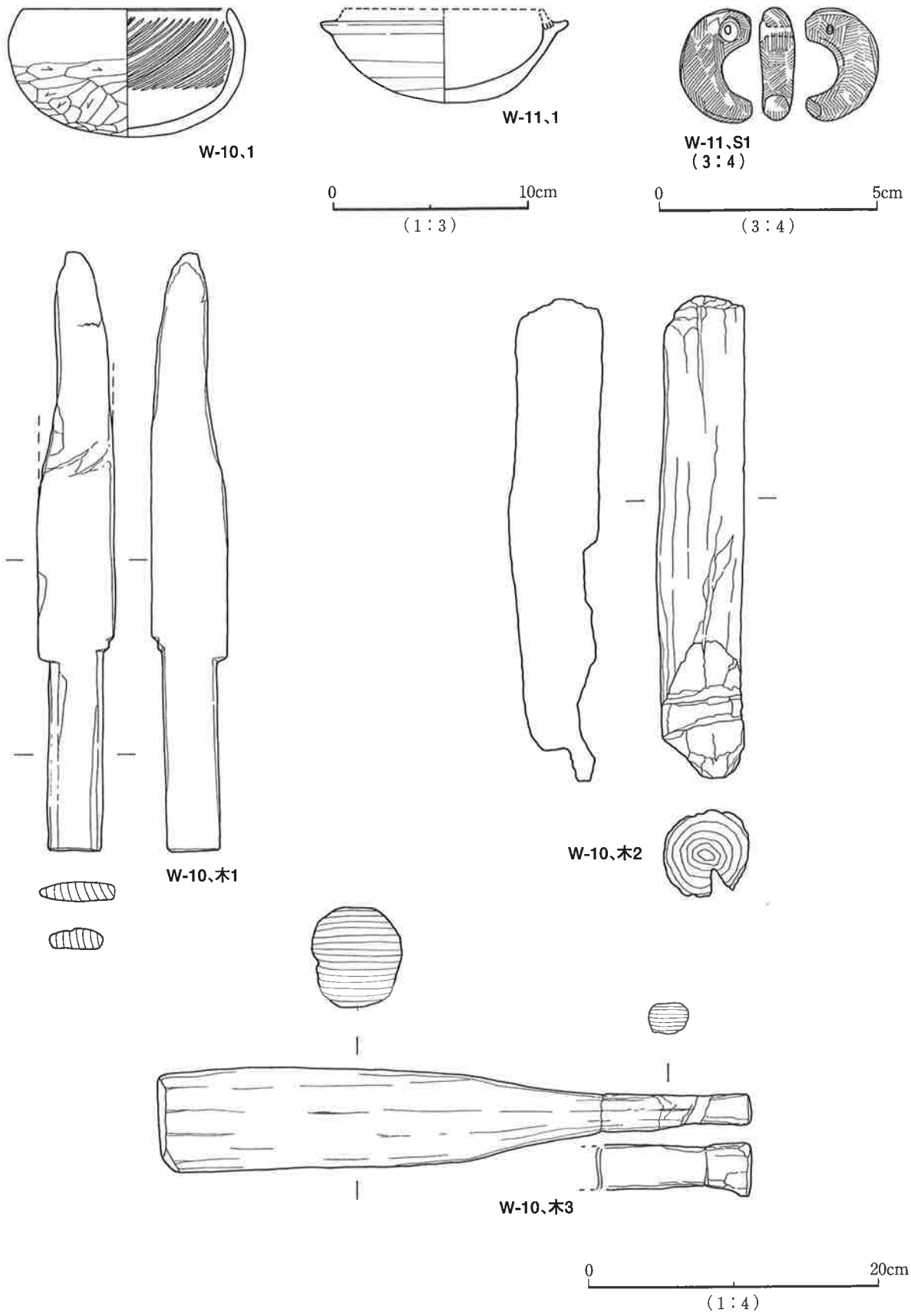
第16図　Hr-FA下水田跡、W-10～12号溝実測図、断面図・土層断面図



第16図　Hr-FA下水田跡、W-10～12号溝実測図、断面図・土層断面図



第17図　Hr-FA下水田跡出土木製品実測図



第18図　W-10・11号溝出土土器・木製品実測図

水　路

W－10号溝（第15・16・18図、第４・10表、図版１・５・６・10・11・12）

位置　P－４、P・Q～T－５、U－６グリッド。**重複**　なし。**走向**　北（112.35m）－南（112.28m）。

規模　幅1.16～1.93m　深さ0.28～0.33m　**埋没土**　底面直上には細砂を含んだ黒褐色土が底面中央部で５cm 程度堆積していて、Hr-FA 一次堆積層はこの層の上面に堆積している。この黒褐色土中から木製品が出土している。**形状**　断面形はＶ字状である。**出土遺物**　土師器埦や舟形容器（槽）、杭、建築部材などの木製品が出土している。

W－11号溝（第15・16・18図、第４・13表、図版２・６・10）

位置　L～N－５、G～P－６、O・P－７グリッド。**重複**　なし。**走向**　北（112.51m）－南（112.00m）。**規模**　幅0.89～2.43m　深さ0.41～0.48m　**形状**　断面形は緩いＶ字状である。　**取水口**　南東から南に走向を変えるO－６グリッド内で、北西側に取水口が設けられている。溝底面と取水口との比高差は0.08m である。**埋没土**　底面には間層を挟まないで Hr-FA が直接堆積し、その上に Hr-FA を多量に混入した土層が堆積している。**出土遺物**　須恵器坏を図示した。

W－12号溝（第15・16図、図版２）

位置　I－５・６グリッド。**重複**　なし。I－６グリッドでＷ－11号溝と接続する。**走向**　底面レベルは南東から北西に向かって10cm ほど下がっているが検出範囲が僅かのため詳細は不明。**規模**　幅1.37m　深さ0.27m　**形状**　断面形はＶ字状である。**所見**　As-C 下面で検出されたＷ－19号溝とほぼ同様の走向を示している。

第２項　溝

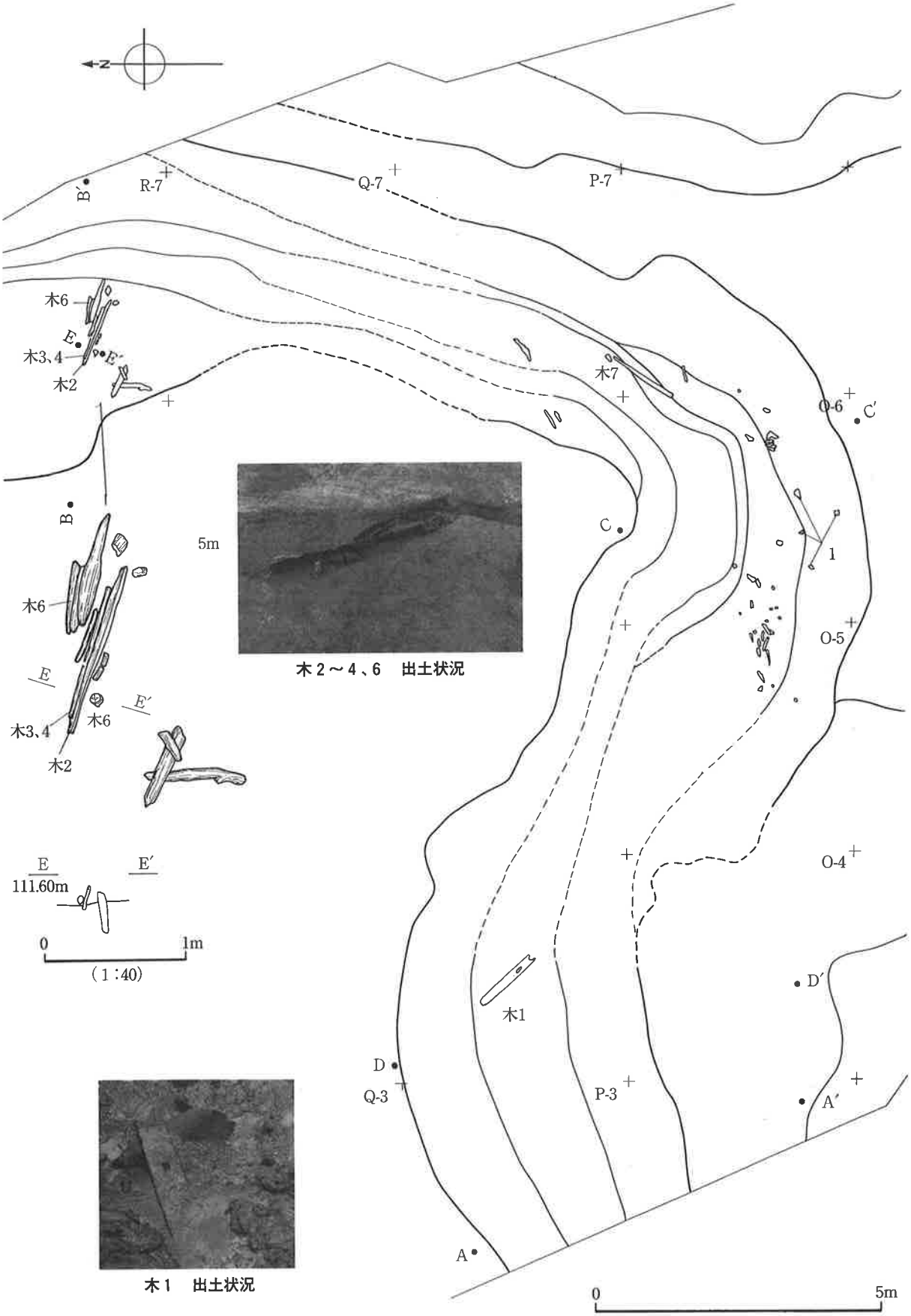
Hr-FA 水田下層から As-C 一次堆積層に至る土層中から４条の溝が検出されている。調査区壁面の土層観察の結果、基本層序のⅧa 層が形成された時点では機能していたことが確認され、Hr-FA 下水田が営まれる以前には完全に埋没していることが判明した。

W－13号溝（第19・20・21・22・25・26図、第10・11表、図版２・７・13・14・15）

位置　P－５・６、P～S－７、Q－３～５グリッド。**重複**　As-C 下面を切る。**走向**　北西方向から南東に向かい「くの字状」に湾曲して北東方向にのびている。**規模**　幅3.08～4.33m　深さ1.26m　**形状**　底面は丸みがあり、側面は急激に立ち上がっている。**埋没土**　As-C や粗砂が水流によって運ばれ、埋没した様子が窺え、部分的には As-C のみで混入物を含まない層も形成されている。層序から判断して、水流による砂礫の堆積と流出を繰り返しながら、次第に埋没していった様相がみられる。**所見**　形状から自然流路の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

W－14号溝（第20・23・26図、第４・11表、図版２・７・14・15）

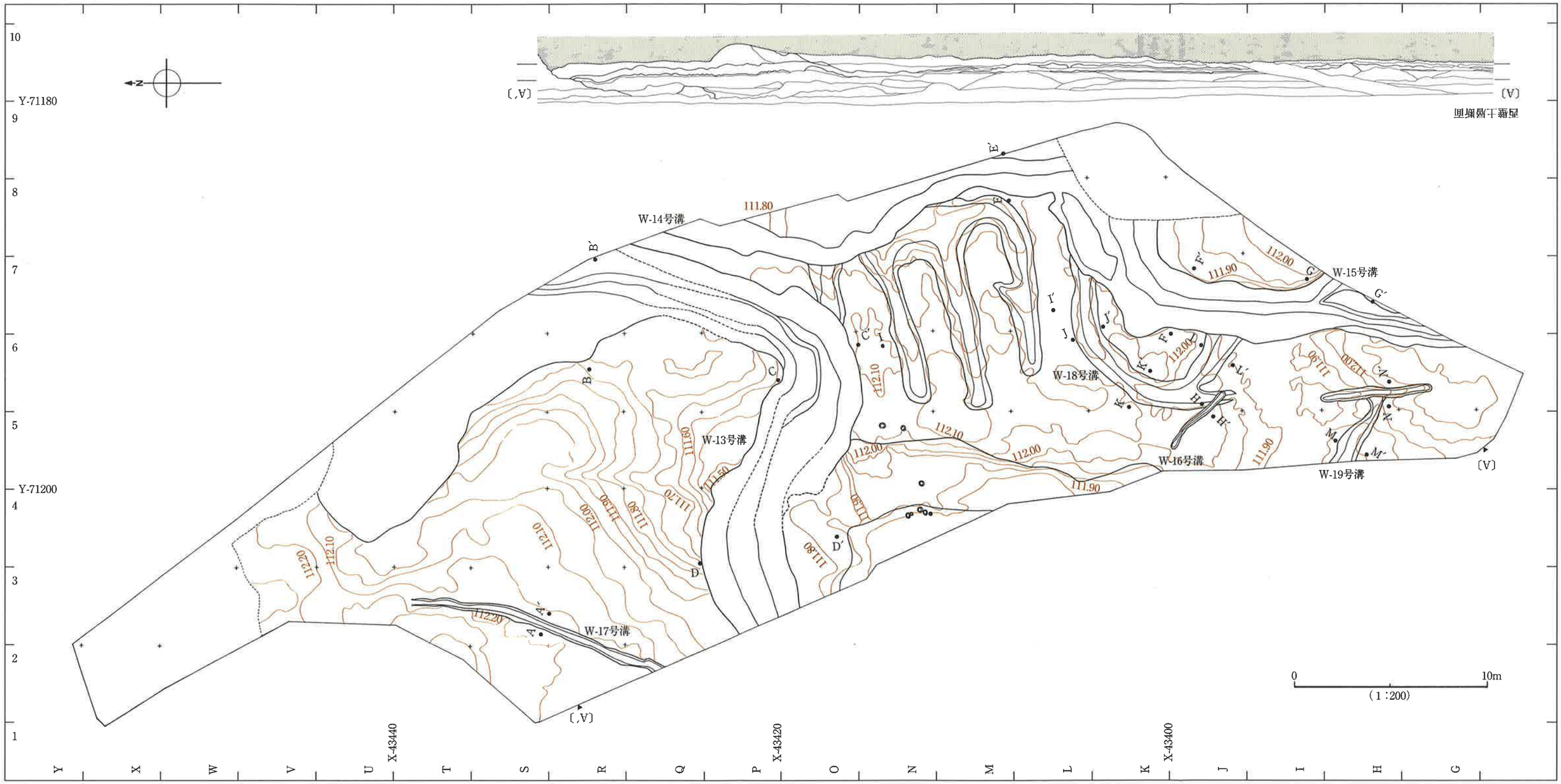
位置　H・I－６、H～L－７、L～R－８、M・N－９グリッド。**重複**　As-C 下面を切る。**走向**　北方から南に向かいL－８・９グリッドで西に向かって「くの字状」に折れ曲がり、L－７グリッドで湾曲し再び南へと向かっている。**規模**　幅0.97～2.40m　深さ1.15m　**形状**　断面形状は検出部の北方では、底面は平坦で側面は湾曲しながら立ち上がっているが、全容が捉えられるL－６グリッド周辺ではきれいなＶ字状を呈している。**埋没土**　As-C は含まれるが、主体となるのは砂粒や黒褐色土でＷ－13号溝とは様相が異なっている。**所見**　断面形状から人為的な可能性も考えられるが、詳細は不明である。本溝の流路は東側に近接して流れる現在の牛池川の流路に酷似している。



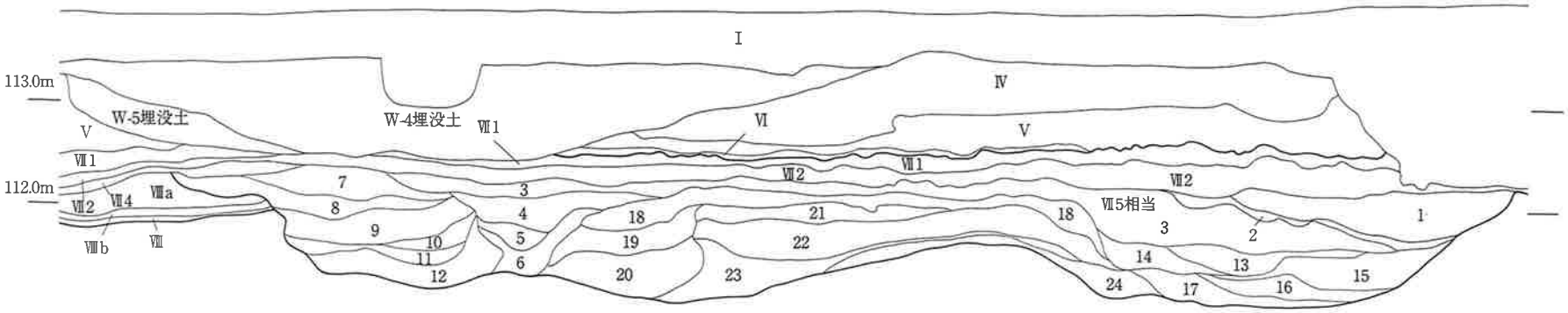
木2～4、6　出土状況

木1　出土状況

第19図　W-13号溝実測図、木製品出土状況図



第20図　W-13～17号溝、As-C下面全体図



層序説明

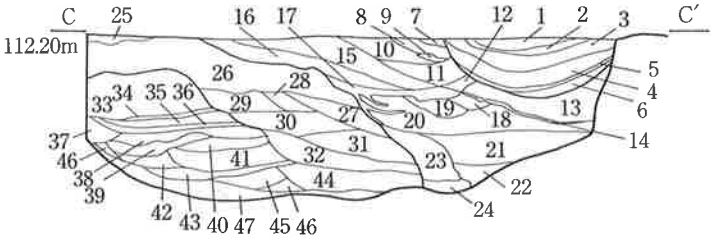
1	10YR3/3	暗褐色土	細砂層。As-C（φ２～５mm）を多量に含む。酸化鉄を帯びる。
2	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。As-C（φ２～５mm）を多く含む。
3		黒褐色粗砂層	As-Cを多量に含む。
4			微砂層。
5	10YR2/3	黒褐色土	微砂を多く含む。
6	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ２～５mm）を多量に含む。
7	10YR2/2	黒褐色土	酸化鉄を帯びたAs-C（φ２～５mm）堆積層。黒褐色土を含む。
8	10YR2/2	黒褐色土	褐色粗砂層。As-C（φ２～５mm）を多量に含む。
9	10YR3/3	暗褐色土	細砂層。As-C（φ２～５mm）を多量に含む。酸化鉄を帯びる。
10	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ２～５mm）堆積層。
11			細砂層。
12			粗砂層。
13	10YR2/3	黒褐色土	細砂層。ラミナ状堆積。As-C（φ２～５mm）を多く含む。
14	10YR2/2	黒褐色土	砂質土。As-C（φ２～５mm）をやや多く含む。
15			細砂層。
16			細砂層。As-C（φ２～５mm）を多量に含む。
17	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ２～３mm）をやや多く含む。酸化鉄を帯びる。
18	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ２～５mm）を多量に含む。
19	10YR2/1	黒褐土	微砂を多く含む。
20			粗砂層。
21	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ２～５mm）を多量に含む。
22			As-C（φ２～５mm）の水性二次堆積層。酸化鉄を帯びる。
23	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。
24	5 YR3/2	暗赤褐色	As-C（φ２～５mm）の水性二次堆積層。酸化鉄を帯びる。

0　2m
（1：60）

第21図　W-13号溝及び調査区中央部東西土層断面図

W-17号溝

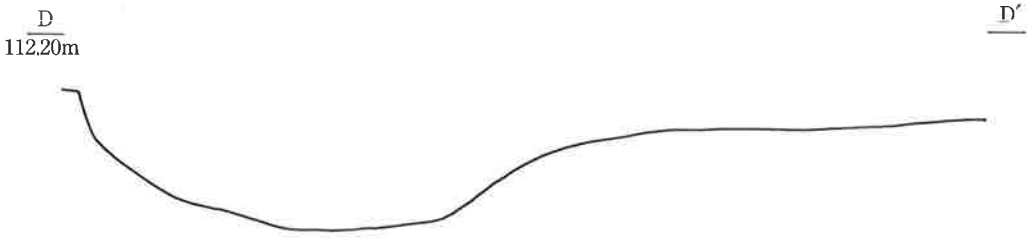
W-13号溝



W-13号溝

W-13号溝層序説明

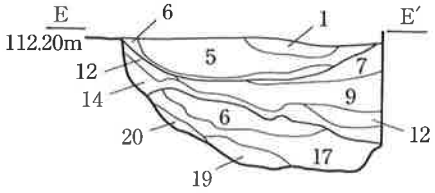
1	5YR3/2	暗赤褐色土	褐色粗砂層。酸化鉄粒を帯び赤味を帯びる。
2	5YR3/2	暗赤褐色土	As-Cからなる。酸化鉄粒を帯び赤味を帯びる。
3	10YR3/3	暗褐色土	As-Cと黒褐色粗砂層がラミナ状に堆積する。
4	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色粗砂層。As-C（φ2～5mm）を多く含む。
5	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色粗砂層。As-C（φ2～5mm）を多く含む。
6	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色粘質土。粗砂、As-Cを多量に含む。
7	5YR3/2	暗赤褐色土	褐色粗砂層。
8	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土。微砂を多量に含む。
9	10YR3/3	暗褐色土	As-C（φ2～5mm）から成る。
10	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土。微砂を多量に含む。
11	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土。微砂をラミナ状に多量に含む。
12	5YR3/2	暗赤褐色土	褐色粗砂層。
13	10YR3/3	暗褐色土	粗砂層。ラミナ状堆積。
14	10YR2/2	黒褐色土	褐色粗砂層。As-C（φ2～5mm）を多量に含む。
15	10YR3/2	黒褐色土	微砂層。黒褐色土粒子を多量に含む。
16	10YR3/2	黒褐色土	微砂層。黒褐色土粒子を多く含む。
17	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土。微砂を多量に含む。
18	10YR3/3	暗褐色土	細砂層。As-C（φ2～5mm）を多く含む。
19	2.5YR3/1	黒褐色土	褐色細砂層。As-C（φ2～5mm）を多く含む。
20	10YR2/3	黒褐色土	細・粗砂層。ラミナ状堆積。As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。
21			粗砂層。
22			細砂層。
23	10YR2/2	黒褐色土	微砂を多く含む。植物遺存体を多く含む。
24	10YR3/2	黒褐色土	暗褐色土（地山）ブロック（φ50～180mm）の堆積。間を粗砂及びAs-C（2～5mm）が埋める。
25			Ⅶ-5層相当。
26	10YR3/0	黒褐色土	As-C堆積層。黒褐色土粒子が多量に混入する。
27	10YR2/3	黒褐色土	微砂を多く含む。
28	10YR3/2	黒褐色土	As-C（φ2～5mm）及び微砂を多く含む。
29	10YR3/2	黒褐色土	As-C堆積層。黒褐色土粒子がやや多く混入する。
30	10YR3/2	黒褐色土	As-C堆積層。黒褐色土粒子が多量に混入する。
31	10YR2/1	黒色土	粘質土。As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。
32	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ2～5mm）堆積層。黒褐色土粒子を混入するものと、酸化鉄粒を混入するものが互層堆積する。
33	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ2～5mm）堆積層。黒褐色粒子がラミナ状に混入する。
34	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。
35	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ2～5mm）堆積層。（灰褐色）酸化鉄を帯びていない。
36	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。
37	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。As-C（φ2～5mm）を少量含む。
38	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ2～5mm）堆積層。酸化鉄を帯びていない。
39	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。As-C（φ2～5mm）を多く含む。
40	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。As-C（φ2～5mm）を多量に含む。
41	2.5YR4/4	オリーブ褐色	As-C（φ2～5mm）堆積層。
42	7.5YR4/6	褐色土	As-C（φ2～5mm）堆積層。酸化鉄粒子を帯びる。
43	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。細砂を多量に含む。
44	5YR3/2	暗赤褐色土	As-C（φ2～5mm）堆積層。酸化鉄を帯びる。
45	10YR2/2	黒褐色土	細砂を多量に含む。植物遺存体を含む。
46	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。
47	10YR2/2	黒褐色土	微砂を多く含む。

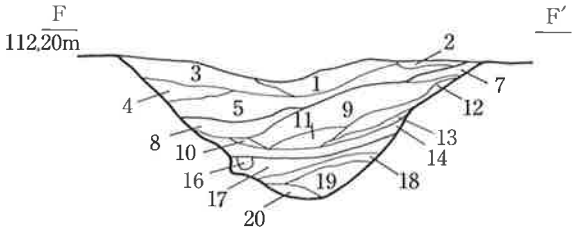


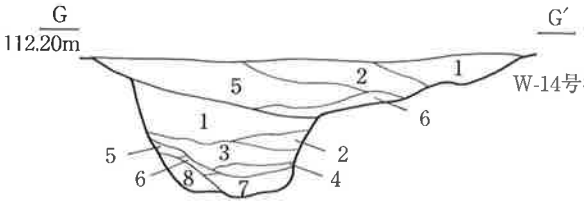
W-13号溝

0　2m
（1：60）

第22図　W-13・17号溝実測図・土層断面図







W-15号溝層序説明

1	10YR2/2	黒褐色土	微砂をまだらに多く含む。As-C（φ2～5mm）を少量含む。植物遺存体を含む。地山の灰黄褐色砂質土（微量）をブロック状にやや多く含む。
2	10YR2/2	黒褐色土	粗砂を多く含み、As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。
3	5YR4/6	赤褐色土	As-C（φ2～5mm）を多く含む。酸化鉄粒を帯びる。
4		細砂層	やや酸化鉄を帯びる。
5		細砂層	酸化鉄粒を帯びる。
6	10YR2/2	黒褐色土	細砂を多量に含む。
7			粗砂及びAs-C（φ2～5mm）堆積層。
8			粗砂及び細砂層。

W-16号溝層序説明

1	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ2～5mm）を多く含む。

W-14号溝層序説明

1	10YR4/8	黄褐色土	As-C（φ2～5mm）及び細砂が堆積する。酸化鉄のため赤味を帯びる。
2	10YR2/2	黒褐色土	微砂をやや多く含む。
3	10YR2/2	黒褐色土	微砂をラミナ状に多量に含む。
4	10YR2/2	黒褐色土	As-C堆積層。細砂がラミナ状に入り込む。酸化鉄粒子をやや多く含む。
5	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土とAs-C（φ2～5mm、酸化鉄を帯びる）がラミナ状に堆積する。
6	10YR2/2	黒褐色土	細砂及びAs-C（φ2～5mm）を多く含む。
7	10YR2/2	黒褐色土	微砂を少量含む。
8		黒褐色細砂層	
9	10YR4/8	赤褐色土	As-C（φ2～5mm）をやや多く含む。
10	10YR3/2	黒褐色土	細砂を多量に含む。
11		粗砂堆積層	酸化鉄粒を少量含む。
12		細砂層	黒褐色土粒子を多く含む。
13			酸化鉄粒子の為赤味を帯びる。
14	10YR2/2	黒褐色土	粘性あり。混入物なし。
15	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ2～3mm）を多く含む。
16	10YR2/1	黒色土	As-C（φ2～5mm）を少量含む。
17		粗砂堆積層	As-C（φ2～3mm）をやや多く含む。
18	10YR2/2	黒褐色土	As-C（φ2～3mm）を多く含む。
19		粗砂堆積層	礫（φ2～10mm）を少量含む。
20	10YR2/2	黒褐色土	粘質土。植物遺存体を含む。

0　2m
（1：60）

第23図　14・15・16号溝土層断面図

W－15号溝（第20・23図、図版２）

位置　I・J－７グリッド。**重複**　W－14号溝と同時期と想定される。**走向**　J－７グリッドでW－14号溝から分岐し南東方向へ走向する。**規模**　幅（1.82m）　深さ1.08m　**形状**　底面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦で断面形は逆台形である。

W－16号溝（第20・23図、図版２）

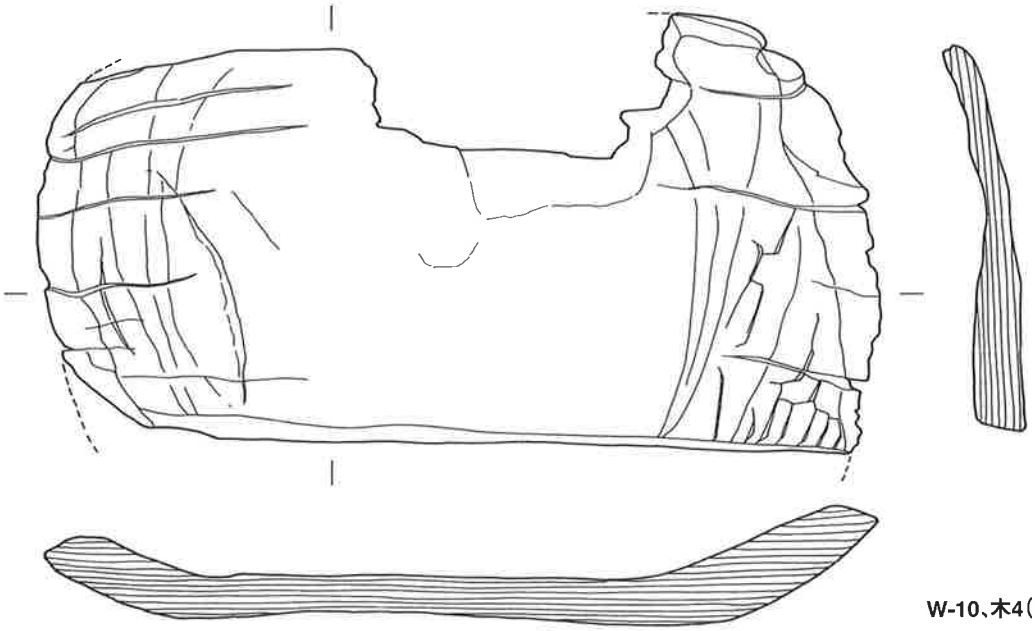
位置　K－５・６グリッド。**重複**　W－18号溝を切る。**走向**　北西（111.99m）－南東（11.039m）**規模**　幅0.35m　深さ0.06m　**形状**　検出長は4.00mで底面がわずかに検出されたものとみられる。断面形はU字状である。**埋没土**　As-Cを多く含む黒褐色土が堆積する。**所見**　As-C純層を切って構築されているが埋没土はⅧa層（As-C混土層）に似る土質で同軽石降下後の間もない時期に埋没していると考えられる。

W－17号溝（第20・22図、図版２）

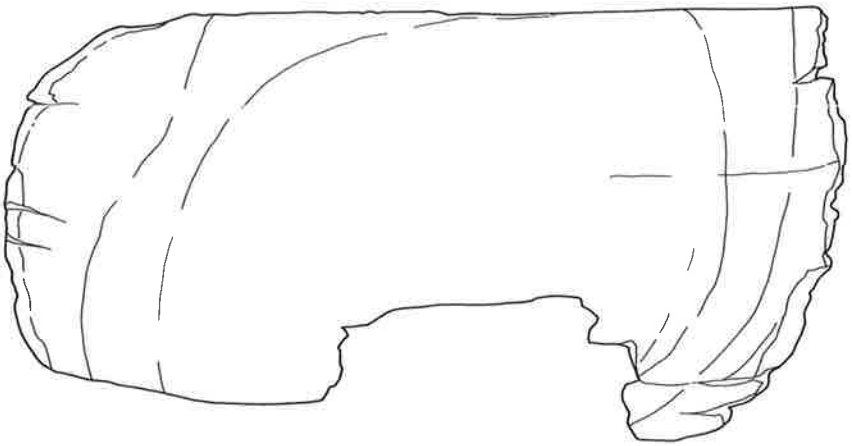
位置　R・S－２、S～U－３グリッド。**重複**　なし。**走向**　北（112.13m）－南（112.09m）　**規模**　幅0.50m　深さ0.07m　**形状**　断面形はU字状である。**埋没土**　As-Cを多量に含む粘性のある黄褐色土が堆積する。**所見**　埋没土の様子からAs-C降下後の間もない時期に埋没したと考えられる。

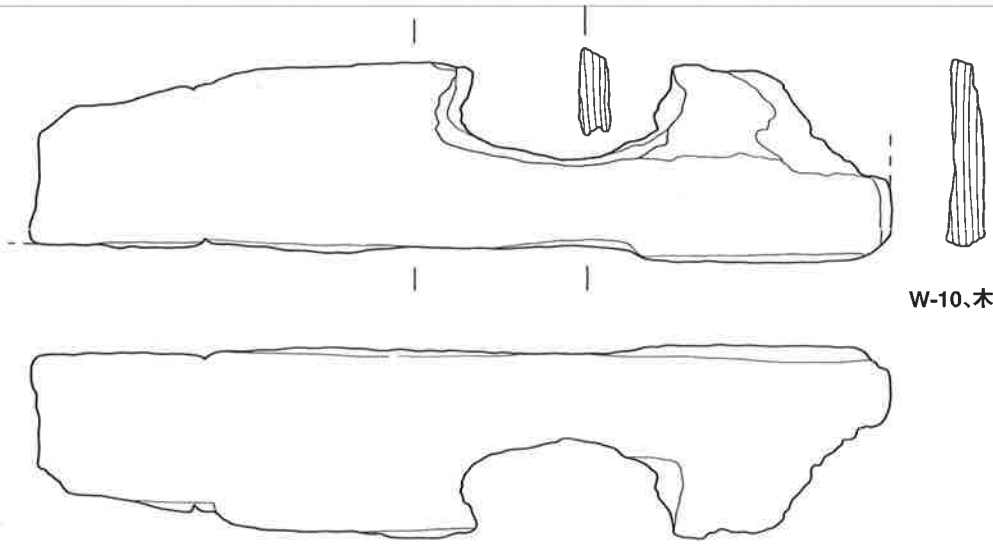
第３項　浅間Ｃ軽石（As-C）下畠跡（第20・27・28・29図、第10表、図版３・７・14）

概要　As-C一次堆積層（Ⅷ層）は部分的な遺存であり、調査区全域では検出されていない。この層の直上にはAs－Cを多量に含む黒褐色土（Ⅷa層、C混土層）の堆積が認められた。調査はAs-C一次堆積層と



W-10、木4（1：3）



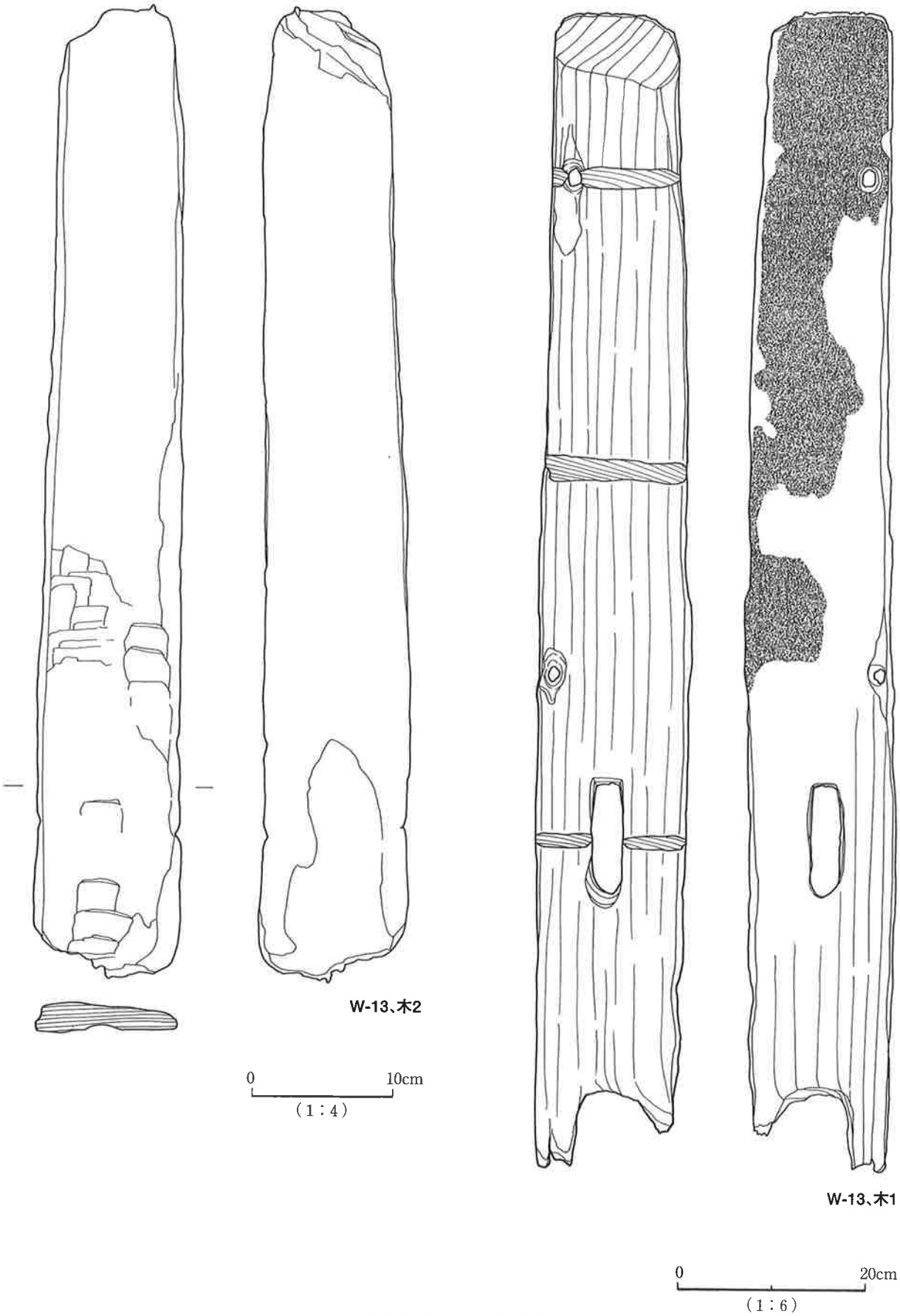


W-10、木5（1：4）

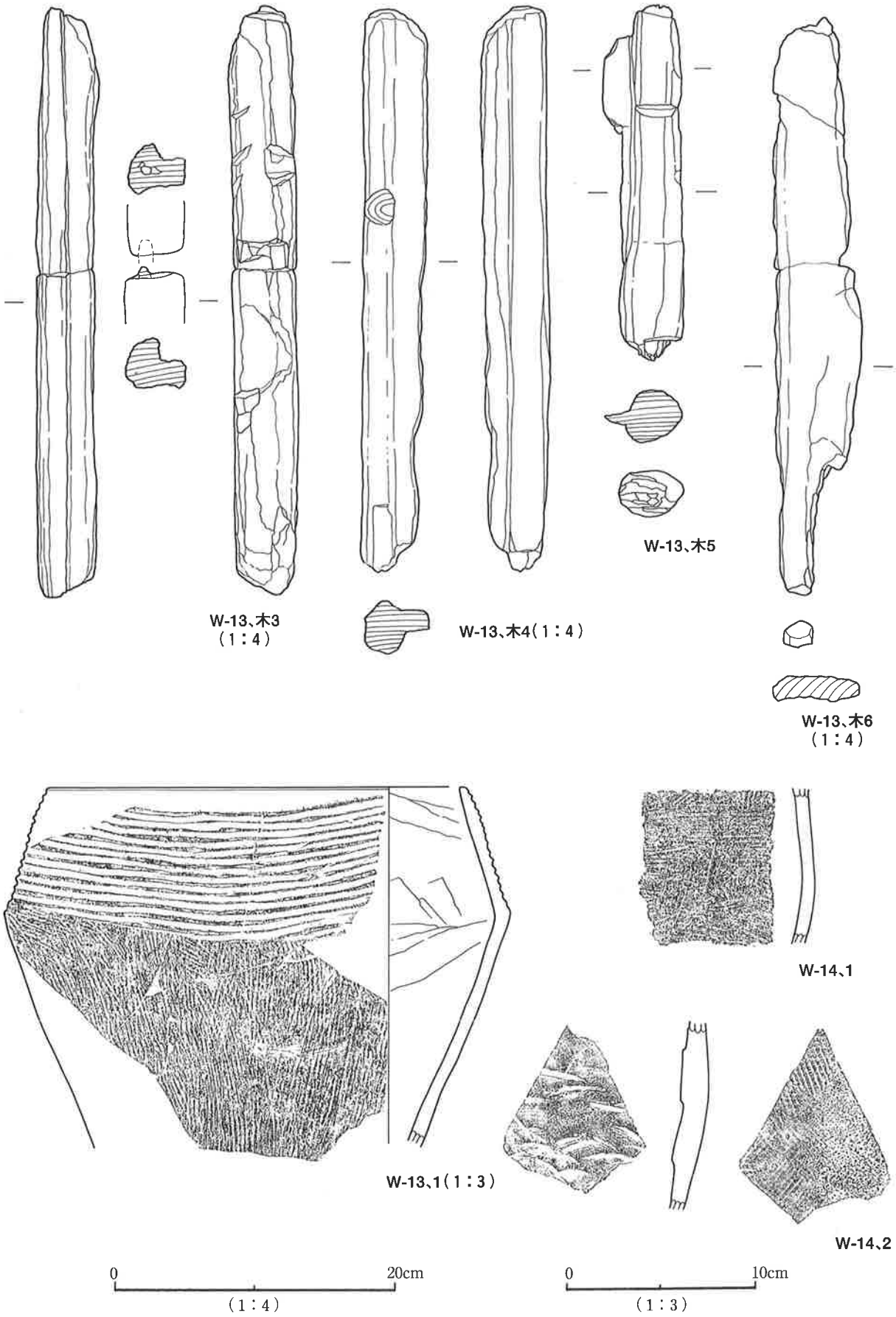
0　10cm
（1：3）

0　20cm
（1：4）

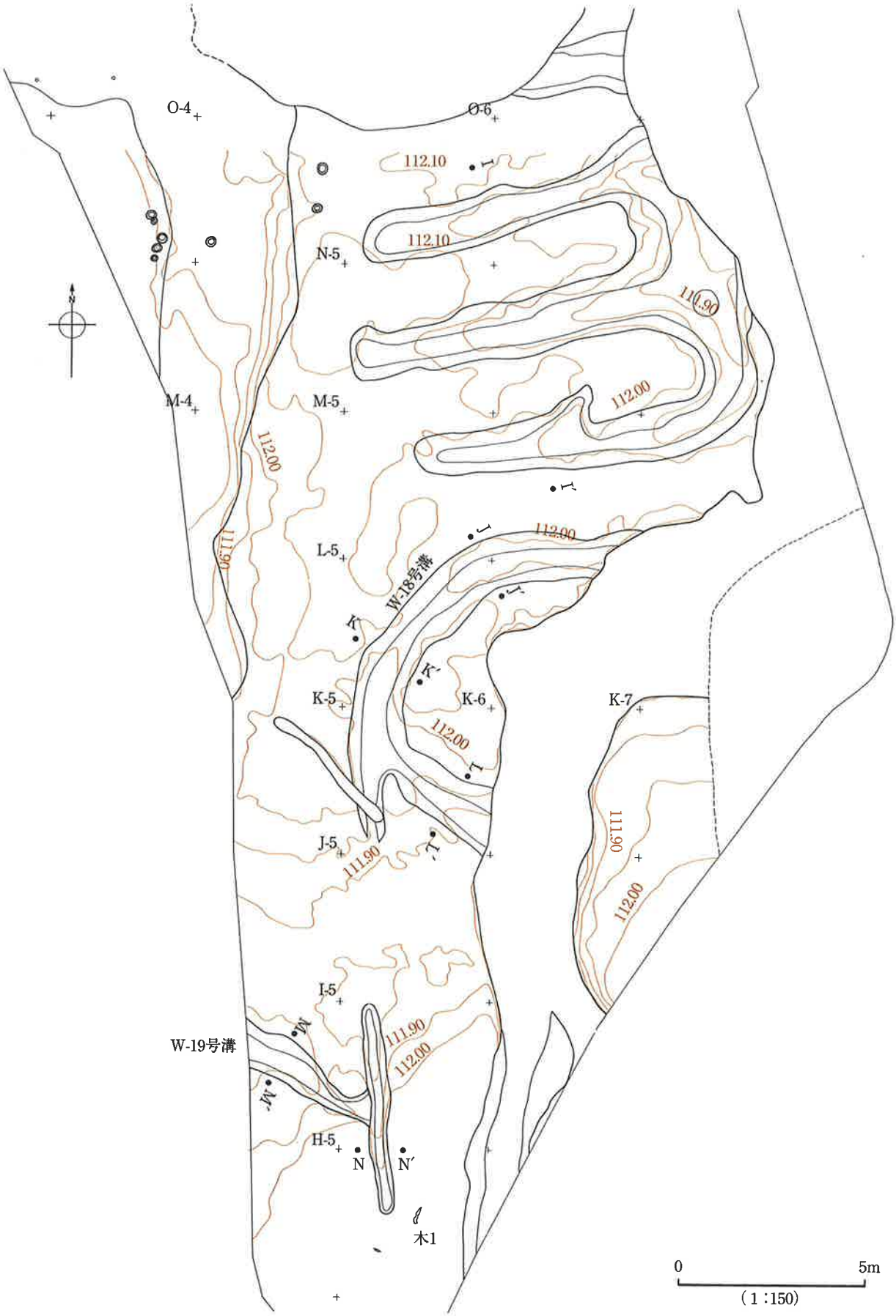
第24図　W-10号溝出土木製品実測図



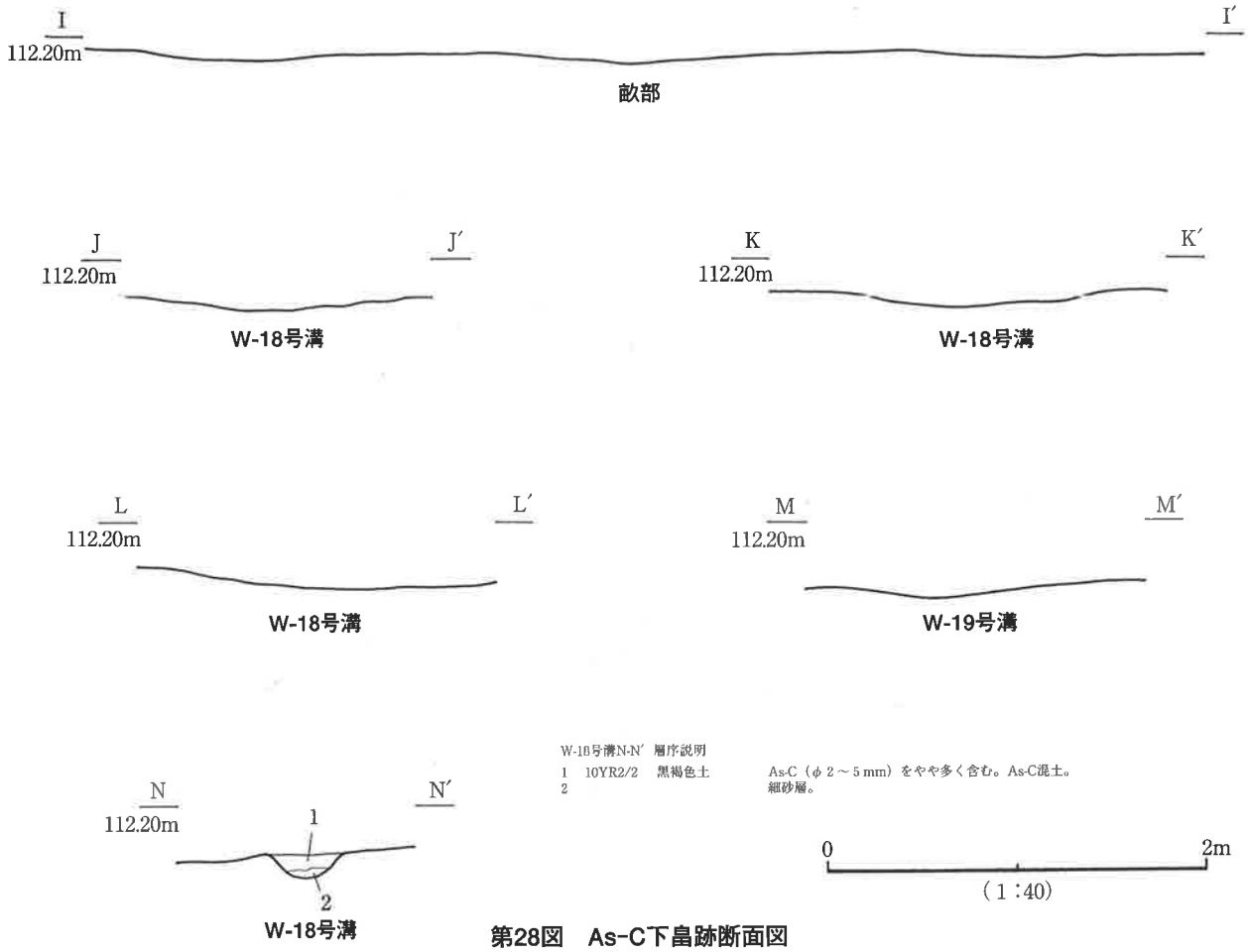
第25図　W-13号溝出土木製品実測図



第26図　W-13・14号溝出土土器・木製品実測図



第27図　As-C下畠跡実測図



第28図　As-C下畠跡断面図

一次堆積層が遺存していない箇所においてはＣ混土層を除去した面を遺構面として調査を行った。本遺構面はＷ－13号溝及びＷ－14号溝によって切られている。Ｗ－13号溝以南、Ｗ－14号溝以西では、東西方向のさく状の浅い落ち込みが４条検出された。類似するこれまでの調査事例から畠跡の可能性が高いと判断され、本報告においては、「畠跡」と理解した。

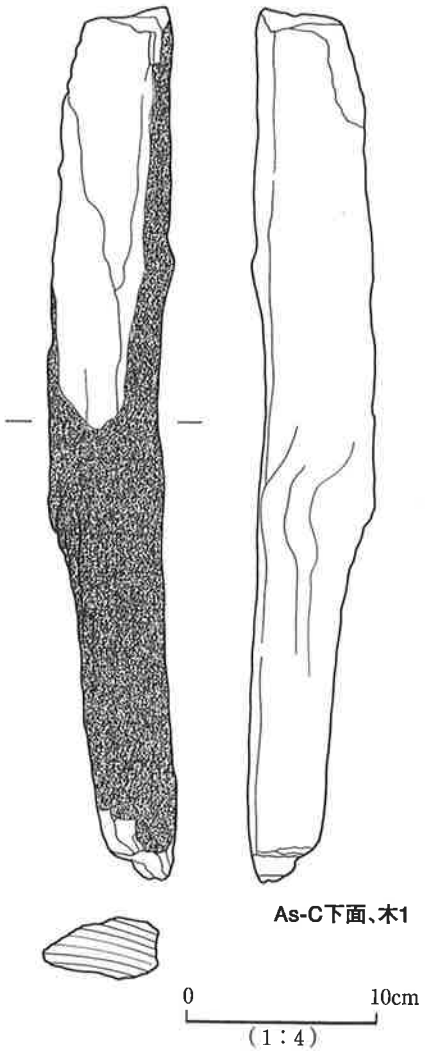
地形　標高は調査区北端で112.25m、Ｗ－13号溝に向かって下り、同溝北辺付近では111.50m である。Ｗ－13号溝以南ではほぼ水平に近い状況であるが、Ｐ－３、Ｍ～Ｐ－４グリッドのＷ－13号溝の南西側では西に向かって緩く傾斜し、Ｉ－４・６、Ｊ－５・６グリッド付近では比高１～３cm の東西方向のわずかな落ち込みが認められる。調査区外西側に自然流路が存在することも考えられるが調査区外となるため詳細は不明である。

畠跡

各畝頂部での間隔は３～3.5m、さく、畝の比高は２～８cm ほどである。東側畝部下端から西側さく部の上端面までの距離は最長で4.96m である。畝部は東側ではＷ－14号溝に接する付近で止まり、これより東はさく部から連続して南北方向のわずかな落ち込みとなっている。

Ｗ－18号溝（第20・27・28図、図版３）

畠跡の南に東から南へ湾曲する浅い落ち込みが検出され、Ｗ－18号溝とした。深さ４～８cm で畠跡のさく、畝の比高と大差なく、畠跡の一部とも考えられるが、走向する形状から溝と呼称した。Ｊ－５・６あたりでごくわずかであるが地形に窪みがあり、この部分に接続する。この窪みから南方へとさらに溝がのびて



第29図　As-C下畠跡出土木製品実測図

いるが、本溝の延長に当たり、同一の溝と判断した。本溝はW－14号溝の走向と並行しているが、同溝との関係は不明である。**所見**　W－14号溝がAs-C降下以前に存在していた可能性は否定できないことや、畠跡そのものがW－14号溝が湾曲する東へ向かって張り出した平坦面に検出されていることと合わせて、同溝との関連も考えられる。

W－19号溝（第20・27・28図、図版3）

位置　H－5・6グリッド。**重複**　なし。W－18号溝南部分に接続する。**走向**　北西から南東に向かって僅かな傾斜で走向する。**規模**　幅1.13～0.48m　深さ0.08m　**形状**　断面形は浅い皿状である。**埋没土**　Ⅷa層（As-C混土層）によって埋没している。走向形状から溝としたが畠跡の一部とも捉えられる。

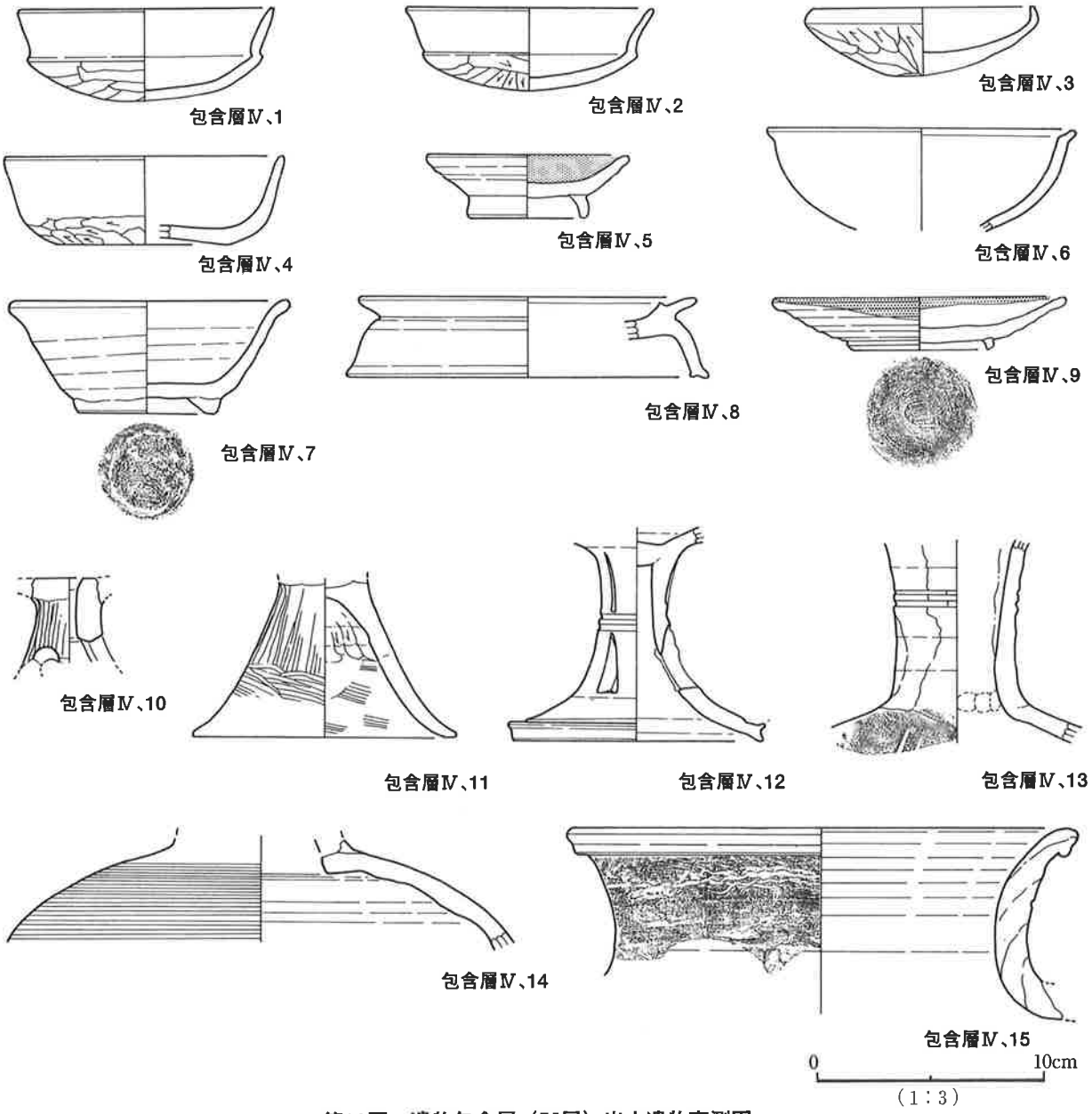
Hr-FA面で検出されたW－12号溝からわずかに南にずれて同様の走向をみせている。

第5節　遺物包含層

第1項　古墳時代～奈良・平安時代遺物包含層（第30図、第4表、図版15）

Ⅳ層は水流によって運ばれたと考えられる砂礫層である。表土からⅤ層（Hr－FPF1）もしくはⅥ層（Hr-FA純層）までの間に堆積している。土層観察から幾筋もの水流の痕跡が認められ、火山泥流堆積物層は当初堆積していたが、本砂礫層の堆積に伴う水流によって押し流された可能性も考えられる。

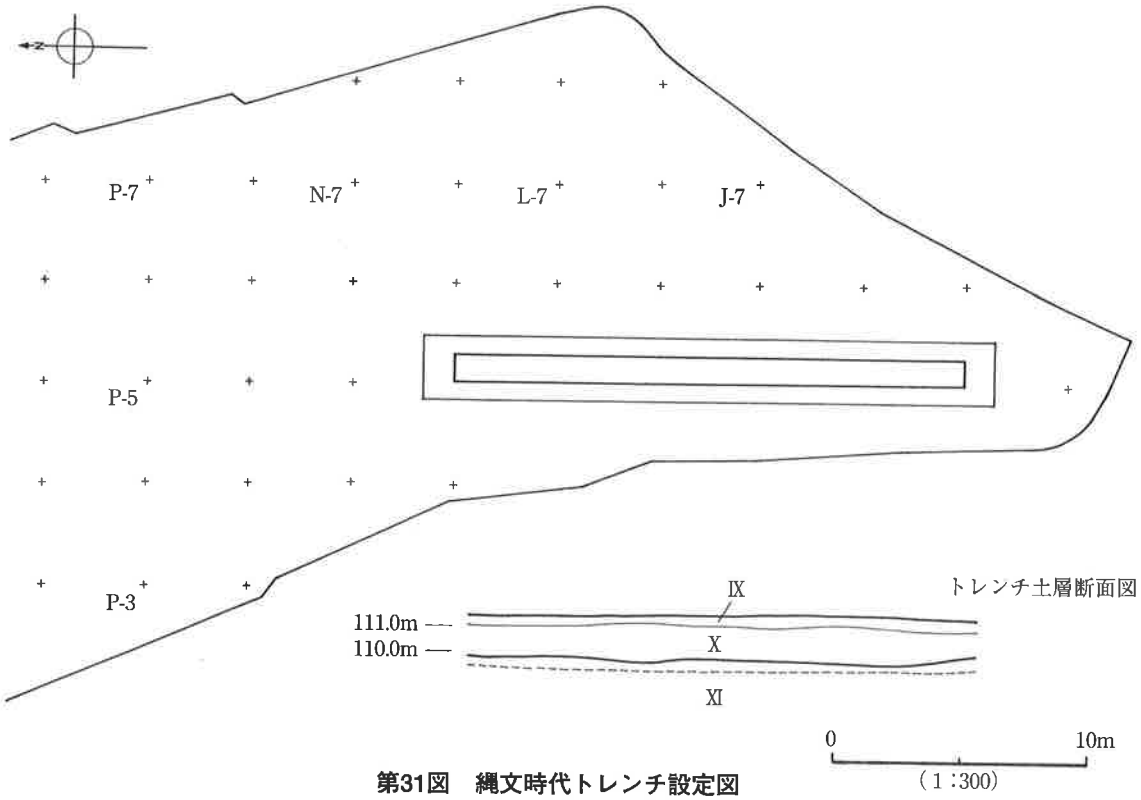
出土した遺物は大半が小片であるが、おもに古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺物が出土している。遺物は遺存のよいものを中心に15点を図示した。



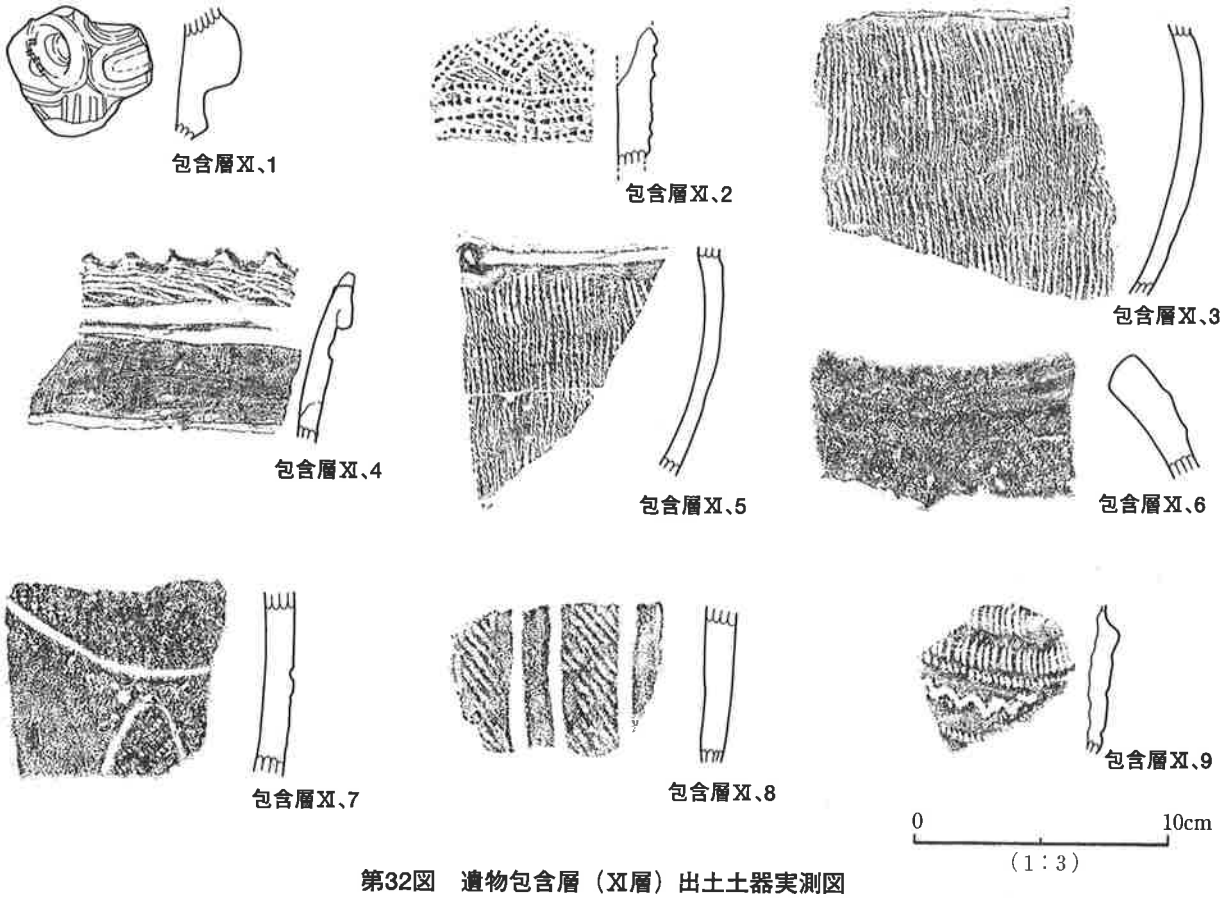
第30図　遺物包含層（Ⅳ層）出土遺物実測図

第２項　縄文時代遺物包含層（第31・32図、第11・12表、図版16）

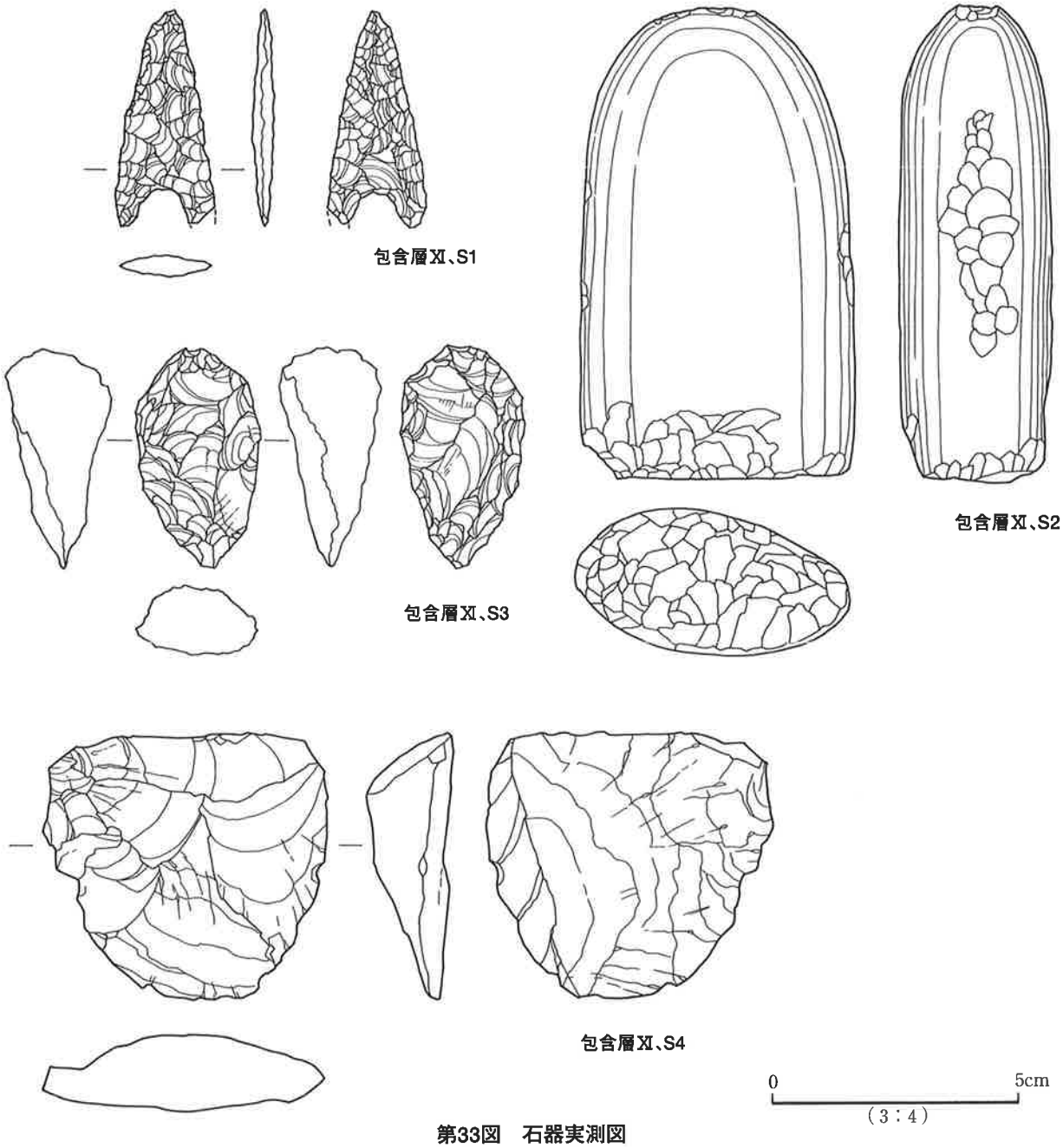
「元総社明神遺跡Ⅷ」の調査で、縄文時代早期から弥生時代前期にかけての土器片が出土する砂礫層（XI 層）が下層で確認されている。その結果を踏まえて、今回の調査においては調査区南に試掘トレンチによる同層序の調査を行った。その結果、量的には少ないものの縄文時代前期から晩期にかけての土器片が出土している。これらの遺物を含む XI 層は水流により運ばれたと考えられる砂礫層であり、上流域からの移動と考えられ、本遺跡の上流域にあたる北方に当該期の遺構があるものと考えられる。



第31図　縄文時代トレンチ設定図



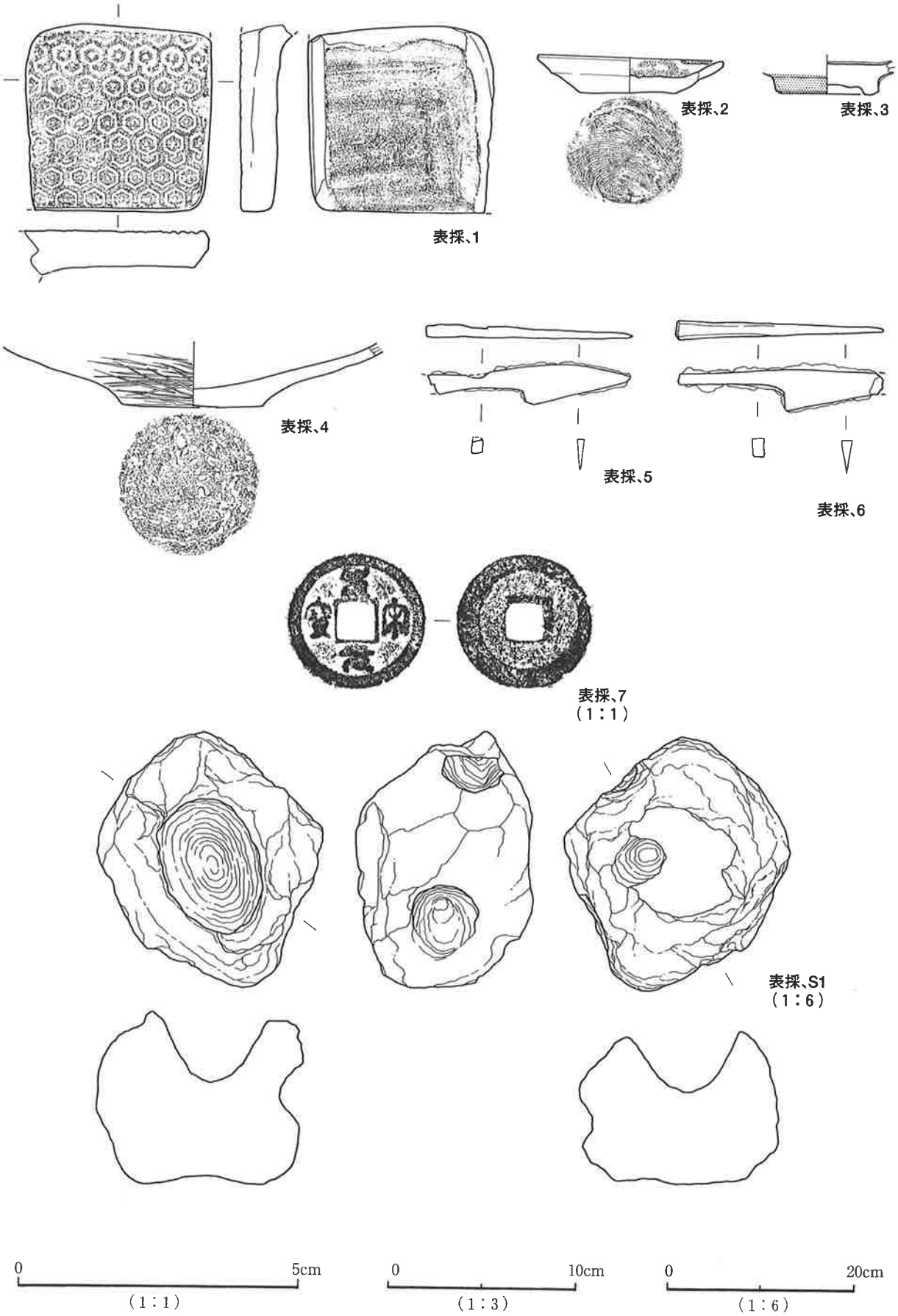
第32図　遺物包含層（XI層）出土土器実測図



第33図　石器実測図

第６節　表採遺物（第34図、第４・14・15・16表、図版16）

表土中及び撹乱内から出土した近世から古代にかけての陶器、土器、鉄製品、古銭、凹石の８点を図示した。１は火鉢脚部とみられる破片、２は土師質小皿で油煙の付着がみられ灯明皿として使用されていたとみられる。３は青磁碗の底部片、４は須恵器甕の底部片、５・６は鋏、７は銭貨で「聖宋元寶」、Ｓ１は凹石である。



第34図　表採遺物実測図

第３表　土器観察表（１）

出土位置	遺物番号	器　種	器　形	法　量			胎　土	色　調	焼　成	成・整形の特徴	遺存状態	備　考
				口径	器高	底径						
W－1	1	灰釉	埦		〔2.6〕	(6.4)	白色粒	灰色	還元	内側灰釉。	底部1/6	
W－1	2	瓦	平瓦				白色粒・黒色噴出物	青灰色	還元	オケ巻き作り。		
W－3	1	灰釉	埦	－	〔1.7〕	(7.6)	白色粒	灰色	還元	調整不明、内側灰釉。	底部1/5	
W－3	2	土師質	小皿	(8.0)	2.1	(5.2)	肌理細か	黄褐色	酸化	底部回転糸切り。	体～底部1/6	
W－4	1	土師器	模倣坏	12.0	4.8	－	褐色	橙色	酸化	内側から体部ナデ、下側ヘラケズリ。	完形	
W－4	2	土師器	模倣坏	11.8	3.9	－	褐色・白色粒	橙褐色	酸化	内側から体部ナデ、下側ヘラケズリ。	1/2	
W－4	3	須恵器	坏	(10.6)	3.5	(6.4)	白色・透明粒	黄褐色	酸化	下端から底部回転ヘラケズリ。	ほぼ完形	
W－4	4	須恵器	坏	(12.6)	3.4	(7.5)	白色粒・黒色斑	灰色	還元	回転糸切り、下端から底部周辺回転ヘラケズリ。部分的に被熱痕あり。	1/4	
W－4	5	須恵器	坏身	9.9	3.3	－	白・黒色粒	灰色	還元	底部回転ヘラケズリ。	完形	
W－4	6	須恵器	蓋	(20.0)	〔2.5〕	－	黒色粒多	灰色	還元	外面上部ヘラケズリ。	1/8	
W－4	7	須恵器	蓋	(13.7)	2.3	(6.2)	白・灰色粒φ1～2mm多	灰色	還元	静止糸切り、手持ちヘラケズリ。	1/6	
W－4	8	須恵器	坏蓋	(9.5)	3.3	－	白・黒色細粒	灰色	還元	外面上部手持ちヘラケズリ。	1/5	
W－4	9	須恵器	薬壺蓋	－	〔3.2〕	－	白色シルト粒	灰色	還元	リング状のつまみは端部で面をなす。	天井部1/4	
W－4	10	須恵器	甕		〔6.3〕	－	白色粒多	灰褐色	還元	外面ヘラケズリ。	肩部1/4 (15cm)	
W－4	11	須恵器	高坏	－	〔6.3〕	－	白色粒	灰色	還元	上部にはがれた痕、長方形2方2段透かし。	脚部	
W－4	12	須恵器	長頸壺	(7.6)	〔7.3〕	－	白色粒多	青灰色	還元	ロクロ成形。内頸部に胴部との調整痕あり。	頸部1/4	
W－4	13	須恵器	甕	－	－	－	白・黒色粒	灰色	未還元	内面同心円当て具痕。外面綾杉状平行叩き。焼成により断面は灰色と黄褐色の互層となる。	胴部片	
W－4	14	須恵器	短頸壺	(18.2)	〔5.0〕	－	白・黒色粒	青灰色	還元	ロクロ成形。	口縁部破片1/6	
W－4	15	須恵器	甕	17.3	〔5.7〕	－	白色粒多、チャート粒φ5mm	青灰色	還元	口縁部は外反し端部で更に外反する。	口縁部1/4	
W－4	16	瓦	平瓦				白色粒・シルト	黄褐色	未還元	布痕・ヘラナデ。	部分	
W－5	1	土師器	坏	9.8	3.3	－	角閃石粒		黄褐色	内面上位ナデ。外面口縁部ナデ。外面底部ヘラ削り。	ほぼ完形	
W－5	2	須恵器	高台付坏	－	〔3.5〕	(9.4)	黒色粒	灰色	還元	底部回転糸切り。外底部に墨書「十」。	底部1/3	
W－5	3	須恵器	坏身	(10.6)	〔2.1〕	－	白色粒	青灰色断面セピア色	還元	内面上位ナデ。外面ナデ。外面底部ヘラ削り。	口縁部～底部破片	
W－5	4	須恵器	甕	－	－	－	白色粒	灰色	還元	外面櫛描き波状文。	胴部中位破片	
W－5	5	須恵器	甕	(23.2)	－	－	白・黒色粒	灰色	還元	口縁下に8＋α状の波状文を3条の沈線で区画され二段以上施す。	口縁部破片	
W－5	6	須恵器	甕	－	〔7.6〕	－	白・黒色粒	灰色	還元	内外面カキ目。	口縁部破片	
W－5	7	土師器	長胴甕	－	〔27.9〕	－	角閃石・白色粒φ2～3mm	褐色	酸化	内側ヘラナデ。外側ヘラケズリ。	胴部片	写真図版のみ掲載
W－5	8	土製品	紡錘車		〔1.7〕		緻密	灰色	酸化	中心に砂粒の移動あり。	上部片	
W－6	1	土師器	模倣坏	10.0	3.0	－	角閃石粒多	黄橙色	酸化	体部ナデ。底部ヘラケズリ。	4/5	
W－6	2	須恵器	坏	(10.7)	3.2	(6.7)	白色、黒褐色粒	黄褐色	酸化	底部回転糸切り。	体～底部1/2	
W－6	3	土師質	小皿	8.6	2.0	5.4	白色粒	白黄色	酸化	底部回転糸切り。内外面ロクロナデ。	ほぼ完形	
W－6	4	須恵器	高坏	(15.0)	〔4.0〕	－	白色粒多	青灰色	還元	口縁～体部ナデ。下位回転ヘラケズリ。	坏部1/4	
W－6	5	土師器	甕	12.0	〔3.8〕	－	緻密。褐色粒	黄橙色	酸化	口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	口縁部破片	
W－6	6	須恵器	壺	(11.4)	〔5.0〕	－	白色粒	青灰色	還元	口縁部は外反し端部の断面は三角形をなす。	口縁部1/3	
W－6	7	須恵器	提瓶	－	〔7.3〕	－	白色粒φ2mm多	灰色	還元	頸部ロクロナデ。	頸部破片	
W－6	8	須恵器	甕	－	－	－	白色粒多	青灰色。断面セピア色	還元	外面は短めの平行叩き。内面は小さめの同心円当て具痕。	胴部中位破片	
W－6	9	須恵器	横瓶	－	－	－	白色粒	青灰色（2層を成す）。	還元	外面カキ目。内面は同心円文の当て具痕。	胴部上位破片	
W－9	1	須恵器	埦	－	〔1.4〕	－	褐色粒	褐色	酸化	底部回転糸切り。	底部片	
W－9	2	灰釉	皿	(12.0)	〔1.7〕	(6.7)	白色細粒	灰色	還元	器高は低く高台断面は三角形を呈する。	1/3	
W－9	3	灰釉	埦	(12.6)	〔3.1〕	－	褐色粒	釉調・灰色、胎土・褐色	未還元	口縁部に灰釉。	口縁部片	

第４表　土器観察表（２）

出土位置	遺物番号	器　種	器　形	法　量			胎　土	色　調	焼　成	成・整形の特徴	遺存状態	備　考
				口径	器高	底径						
W－9	4	須恵器	坏	(10.0)	3.3	5.2	白・黒色粒	黒色から灰色	酸化	回転糸切り、内外黒色処理（いぶし焼き？）。	2/3	
W－9	5	須恵器	羽釜	(18.0)	〔4.6〕	－	白色粒	褐色	中性	端部は面をなす。	口縁部片	
W－10	1	土師器	椀	10.8	6.5	－	白色・透明粒・角閃石	暗橙色	酸化	外面に親指あて痕が連続して周巡する。内面は棒状工具で放射状に磨く。	完形	
W－11	1	須恵器	坏身	－	〔4.2〕	－	白・褐色粒	灰黄褐色	未還元	底部回転ヘラケズリ。	口縁部欠損、体～底部3/4	
W－14	2	須恵器	甕				白色細粒	青灰色	酸化	外面平行叩き、内面無文当て具と剥離。	断面・セピア色	
D－5	1	土師器	坏	11.0	2.3	6.8	白色・透明粒	橙褐色	酸化	底部回転糸切り。	2/3	
II－1	1	須恵器	高台付坏		〔4.7〕	7.4	褐色粒	黄褐色	酸化	体部ロクロナデ。	体～底部	
H－1	2	須恵器	坏	10.6	5.3	4.8	白色粒	黄橙色	中間炎	体部ロクロナデ。	3/4	
H－1	3	須恵器	高台付坏	－	〔2.1〕	4.7	褐色粒	暗黄褐色	中間炎	体部ロクロナデ。	体～底部3/4	
H－1	4	須恵器	羽釜	16.5	〔6.8〕		白色、透明粒	灰～褐色	中間炎	口縁部は内湾し、端部は面をなす。鍔は丁寧につけられ、断面三角形を成す。		
FA水田	1	土師器	坏	〔12.2〕	〔4.2〕	－	白色粒	黄褐色	酸化	横位ナデ、底部一方向からの手持ちヘラケズリ後ナデ。	体部～底部3/4	写真図版のみ掲載
FA水田	2	須恵器	坏	－	－	〔4.2〕	白・褐色粒	灰黄褐色	未還元	底部回転ヘラケズリ。	口縁部破損、体～底部3/4	写真図版のみ掲載
FA水田	3	須恵器	高坏		〔6.3〕			灰色	還元		脚部	写真図版のみ掲載
包含層Ⅳ	1	土師器	模倣坏	〔9.9〕	〔4.2〕	－	肌理細か	橙色	酸化	横位ナデ、底部一方向からの手持ちヘラケズリ後ナデ。		
包含層Ⅳ	2	土師器	模倣坏	11.0	3.7	－	肌理細か	橙色	酸化	横位ナデ、底部一方向からの手持ちヘラケズリ後ナデ。	完形	
包含層Ⅳ	3	土師器	坏	(9.7)	3.0	－	白色粒・角閃石粒・褐色粒	黄橙色	酸化	底部から口縁部までヘラケズリ、口縁部から内側をナデ。	1/3	
包含層Ⅳ	4	須恵器	坏	(12.3)	3.9	(7.4)	白色粒多	暗灰色	還元	焼成はざっくりした質感あり。下側手持ちヘラケズリ、口縁端部剥離。	1/4	
包含層Ⅳ	5	土師器	高台付皿	(8.7)	2.8	5.0	肌理細か	灰黄色	酸化	内面黒色。	1/3	2区
包含層Ⅳ	6	土師器	埦	(13.6)	〔4.5〕	－	白・灰色粒	橙褐色	酸化	内外剥離激しく図示はできない。内側ヘラ磨き。	口から体部1/3	
包含層Ⅳ	7	須恵器	高台付坏	12.5	5.0	6.1	白・黒色粒	灰色	還元	回転糸切り。	3/4	
包含層Ⅳ	8	須恵器	蓋	(16.1)	〔3.5〕	－	白色シルト	青灰色	還元	上野型短頸壺蓋。	口縁部片	断面・セピア色
包含層Ⅳ	9	灰釉	高台付皿	(12.7)	2.3	6.0	白色細粒多	灰色	還元	内底部は視に転用のため墨痕＋光沢、体部灰釉、底部糸ケズリからロクロナデ。	1/4	
包含層Ⅳ	10	土師器	器台		〔4.0〕		白色粒	黄灰色	酸化	孔３ヶ、ヘラ磨き。	脚部	
包含層Ⅳ	11	土師器	高坏		〔7.0〕	(11.8)	白色粒・角閃石	黄橙色	酸化	端部は面をなす、外側ヘラ磨き、内側ヘラケズリ・ハケメ・ナデ。	脚部3/4	
包含層Ⅳ	12	須恵器	高坏		〔9.4〕	(11.0)	白色細粒	暗青灰色	還元	ロクロ使用、三方スカシ、ヘラ描線がコイル状に2～3条入る。	脚部	
包含層Ⅳ	13	須恵器	長頸壺	－	〔8.8〕	－	白色細粒多	青灰色	還元	頸部内側に指おさえ、肩部に線刻あり。	頚部	
包含層Ⅳ	14	須恵器	瓶		〔5.0〕		チャート粒φ5mm	灰色	還元	砂っぽい。		
包含層Ⅳ	15	須恵器	甕	(22.3)	〔8.1〕	－	白・灰色粒φ1mm多・褐色粒	黄褐色	未還元	体面に１本波状文。	口縁部1/5	
表採	表採、1		火鉢	－	〔9.8〕	－	白色・角閃石粒	暗褐色	酸化	内外ベンガラ付着。	脚部か？	
表採	表採、2	土師質	小皿	10.0	2.0	5.0	緻密	灰黄	酸化	回転糸切り。	完形	
表採	表採、3	陶器	碗	－	〔1.8〕	5.4	磁胎	釉調は青色	堅緻		底部	
表採	表採、4	土師器	甕	－	〔3.5〕	7.2	白色粒多	褐灰色	酸化	細かなヘラ磨き。	底部	

第５表　羽口観察表

出土位置	遺物番号	先端部		吸気部		最大長	重さ（g）	装着角度	調　整	胎　土	色調	備考
		内径	外径	内径	外径							
W－4	17	－	－	2.0	－	〔9.8〕	243g	3°	指オサエ　指ナデ	角閃石　粗砂粒	浅黄橙	

第６表　石臼観察表

出土位置	遺物番号	名称	部位	石　質	直　径(cm)	最大高(cm)	ふくみ(cm)	重　さ(kg)	分画×溝	心棒孔直径(cm)	備　考
D－4	S１	粉き臼	下臼	粗粒安山岩	(28.0)	12.5	－	8.40	(6)×(6)	(2.9)	下臼面1/2スリ目は8区画、周囲は被熱により弾けている。下臼下面はノミ状工具での調製（加工）痕が見られる。
D－5	S１	粉き臼	上臼	粗粒安山岩	－	－	－	2.35	－	－	
D－5	S２	粉き臼	下臼	粗粒安山岩	－	11.8	(1.7)	4.00	－	(2.7)	
D－5	S３	茶臼	下臼	粗粒安山岩	26.8	15.0	－	8.2	－	3.0	被熱による煤
I－1	S２	粉き臼	下臼	粗粒安山岩	29.5	9.2	－	7.50	－	(2.2)	下臼の上面はやや膨らむ、所謂東国糸である。上・下面共に擦痕が顕著である。またその為かスリ目の残りは僅かである。

第７表　石鉢観察表

遺構番号	遺物番号	石　質	直径(cm)	最大高(cm)	内径(cm)	重さ(kg)	内深 (cm)	備　　考
W－4	S 1	角閃石安山岩	34.0	18.0	21.0	13.0	11.4	

第８表　五輪塔観察表

出土位置	遺物番号	部　位	幅(cm)	高さ(cm)	重さ (kg)	石　　質	備　　考
D－4	S 2	水輪	37.0	25.3	34.00	角閃石安山岩	
D－5	S 4	火輪	33.5	21.0	21.40	角閃石安山岩	
D－5	S 5	空風輪	16.7	26.5	4.52	角閃石安山岩	
D－5	S 6	空風輪	17.7	24.4	5.82	角閃石安山岩	
D－5	S 7	地輪	21.0	15.3	7.40	角閃石安山岩	ベンガラで丸を描き内側に「バク？」か。
D－5	S 8	火輪	21.8	13.0	3.50	角閃石安山岩	
I　1	S 1	火輪	24.7	13.0	4.53	角閃石安山岩	

第９表　宝篋印塔観察表

出土位置	遺物番号	部位	幅(cm)	高　さ (cm)	重　　さ (kg)	石　質	備　　考
D－5	S 9	基礎	27.1	21.0	22.3	粗粒安山岩	工具痕は上下（凹み有り）がノミ幅広と幅狭の2種が認められる。両面側は幅の狭いノミでの調整となる。正面の紀年名は<妙香禅尼　文明四年□□>。

第10表　木製品観察表

出土位置	遺物番号	種　類	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	備　　考
ＦＡ水田	木 1	加工木材	〔39.2〕	2.6	16.0	割材。3面。
ＦＡ水田	木 2	杭	〔47.6〕	3.2	3.2	丸材。
ＦＡ水田	木 3	部材	63.4	9.8	3.2	割材を加工。3面　端部を凹状とする。
ＦＡ水田	木 4	部材	24.7	13.5	5.8	写真図版のみ掲載
W－10	木 1	剣型木製品	〔30.7〕 茎部9.7	刀身3.8 茎部2.7	1.0	3面。刀の形代。刀身と茎部を意匠するタイプで、柄部は表現しない。また刃部も表現され、ほぼ断面は２等辺三角形となる。また失敗品かは不明であるが、刀身側面と刃部に工具痕が見られる。あるいは行為の結果なのであろうか？
W－10	木 2	建築部材	33.0	5.8	3.0	3面。7～8cmに亘り両方面から加工された渡顎風の切口がみられる。別途の部材との組み合わせがある
W－10	木 3	横槌	30.4	5.0	4.6	柄径1.5～2.0cm。割材を用い従来身から次第に削り、細めていくが加工痕は不明。柄尻は太く残し、刀身の柄頭風に意匠する。身の周囲は使用によるものか多面体をなし、打痕顕著である。
W－10	木 4	舟形容器（槽）	33.0	〔15.4〕	1.9	全体の約2/3程の遺存である。内外腐食により形態・加工痕は今ひとつであるが、円部には部分的に加工痕がみられる。木取りは丸太板材による刳ものである。
W－10	木 5	板材	〔45.4〕	9.8	18.0	
W－10	木 6	杭	40.0	5.8	5.3	写真図版のみ掲載
W－10	木 7	杭	〔36.4〕	5.0	4.0	写真図版のみ掲載
W－13	木 1	部材	123.8	15.0	2.8	板材の側面に２孔、中央に長方形の孔が穿たれている。工具痕は腐食により不明。木口側には削られる。２次的な炭化範囲がみられる。＊別途の部材と組み合わせが考えられる。
W－13	木 2	板材	69.4	10.0	2.0	この面に工具痕が部分的に見られる。上部にも観られるが腐食のため図示できない。
W－13	木 3	部材	〔42.0〕	4.2	3.4	割材1/4の片方を［L字形」に切り落とす。1本物途中に継ぎ目があり、出柄・柄孔で継ぐ。用途不明であるがこれのみで使用するのではなく、支え的な使用か？
W－13	木 4	部材	40.2	4.6	3.6	木３と同一か。
W－13	木 5	部材	〔37.8〕	6.6	3.0	木３と同一か？　刃物痕あり。
W－13	木 6	部材	〔41.2〕	6.2	1.8	両端部の片面のみ切り込みを入れる部材と思われる。
W－13	木 7	棒状	101.5	4.8	3.7	写真図版のみ掲載
W－13	木 8	部材	〔30.0〕	10.0	4.3	写真図版のみ掲載
W－13	木 9	部材	23.8	5.3	3.9	写真図版のみ掲載
W－13	木10	部材	5.4	14.2	3.0	写真図版のみ掲載
W－13	木11	種子				トチか　写真図版のみ掲載
W－13	木12	種子				クルミ　写真図版のみ掲載
W－14	木 1	種子				トチの皮　写真図版のみ掲載
As－C 下面	木 1	焼棒杙	46.0	5.8	3.2	割材。浅間Ｃ下。炭化部あり。

第11表　弥生・縄文土器観察表

出土位置	遺物番号	器　種	部　位	胎　土	色　調	焼　成	器形の特徴と内外面の特徴
W－13	1	弥生甕形土器	口～胴部	白色粒・角閃石粒	黒褐色	酸化	内部ヘラナデ・指ナデ、外部屈曲部に斜めハケ目・胴部縦位ハケ目・下部に平行沈線。
W－14	1	弥生甕形土器	胴部破片	白色・角閃石粒多	黄褐色（断面・暗灰色）	酸化	条線？ハケメ？。
包含層 XI	1	縄文	胴部破片	角閃石粒多	暗褐色	酸化	
包含層 XI	2	諸磯ｃ式	胴部破片	角閃石・白色粒	茶褐色	酸化	結節、浮線文。
包含層 XI	3	縄文深鉢	胴部破片	白色・褐色粒多、角閃石粒	黄褐色	酸化堅緻	カーボン付着。
包含層 XI	4	縄文深鉢	口縁部片	白色・褐色粒多、角閃石粒	黄褐色	酸化堅緻	平口縁にキザミを入れ、折り返される。
包含層 XI	5	縄文深鉢	胴部破片	白色・褐色粒多、角閃石粒	黄褐色	酸化堅緻	縦位撚糸。
包含層 XI	6	縄文深鉢	口縁部片	白色細粒多	褐色	酸化	口縁部は内傾し、それに沿って隆帯・渦巻きで構成する。
包含層 XI	7	縄文深鉢	胴部破片	白色・透明粒多	暗灰色	酸化	沈線で楕円区画を構成して内部に縄文を施し、他を磨消する。
包含層 XI	8	縄文深鉢	胴部破片	白色粒・角閃石粒多	黄褐色	酸化	懸垂文。
包含層 XI	9	縄文深鉢	胴部破片	白色・褐色	茶褐色	酸化	隆起線に沿って爪形文を施す、勝坂式。

第12表　石器観察表

出土位置	遺物番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
包含層 XI	S 1	石鏃	7.4	2	4.5	2.95	珪質頁岩。
包含層 XI	S 2	敲石	9.5	5.5	3.1	274.6	
包含層 XI	S 3	スクレーパー	4.4	2.6	2.1	17.4	頁岩系のチャート。
包含層 XI	S 4	剥片	5.2	5.8	1.5	50.0	黒色緻密安山石。

第13表　勾玉観察表

出土位置	遺物番号	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
W－11	S 1	勾玉	2.1	1	0.8	3.76	硬玉。

第14表　鉄製品観察表

出土位置	遺物番号	種　類	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ（g）	備　考
W－4	18	鉄滓					62.0	
表採	5	鋏	鉄	〔10.8〕	2.4	1.0	22.3	刃部は直線的で、背は丸く納める。
表採	6	鋏	鉄	〔11.0〕	2.7	0.7	28.1	切先は欠損、刃部は直線的で背はやや丸い。

第15表　銭貨観察表

出土位置	遺物番号	銭貨銘	読順	材質	外径(mm)	内径(mm)	孔（mm）	初鋳造年・備考	
W－9	6	聖宋元寶	順読	銅	－	－	－	行書　初鋳造年1101年　北宋第４期	写真のみ
表採	表採、7	聖宋元寶	順読	銅	24	20	6	篆書　初鋳造年1101年　北宋第４期	

第16表　凹石観察表

出土位置	遺物番号	名称	－	石質	幅(cm)	奥行(cm)	重さ(g)	備　考
表採	S 1	凹石	－	粗粒安山岩	27.0	18.0	8.7	五輪塔水輪か？。

第Ⅵ章　成果と問題点

今回の調査では、表土直下での第１の中世・古代面、古墳時代から平安時代にかけての遺物を包含する砂礫層、第２の古墳時代後期のHr-FA直下の面、第３のAs-C降下からHr-FA降下までに存続した溝、第４の古墳時代前期のAs-C直下の面、「元総社閑泉明神遺跡Ⅷ」の調査によって確認された弥生・縄文時代の遺物を包含する第５の遺物包含層（礫層）の各時期の文化層が確認された。

第１面では溝跡としたものの、自然流路の可能性がある遺構が検出され、牛池川が氾濫を繰り返していた様子が窺える。この砂礫層にはH-１号住居跡とした住居カマド跡と考えられる遺構が掘り込まれ、10世紀後半と想定されることから、砂礫層の堆積はこれ以前に形成されていたものとみられる。

D－４～６号土坑はW－３号溝埋没土中を掘り込んで構築されたものであるが、３基の土坑がいずれもW－３号溝の流路中から検出されていることから、W－３号溝が埋没する過程においてその痕跡を留めている時期に構築されたものとみられる。D－４号土坑からは石臼や五輪塔の水輪が、D－５号土坑からは石臼、五輪塔の空風輪、火輪、地輪、さらに宝篋印塔の基礎が出土している。出土状況は五輪塔や宝篋印塔の基礎が自然礫と共に人為的に配置された状況であった。しかし、本来は供養塔として建立されていたものであり、この時点で役割は終わっていたものである。一般に中世の調査事例では井戸や溝から出土する例が数多くみられ、16世紀初頭前後の変革の際に廃棄されたと想定されている。本事例においても、これに近い状況であるが、墓域に建立していた供養塔がその役割を終え、さらに新墓式として採用された集石墓に使用された可能性もある。廃棄と集石墓の２つの側面を指摘しておきたい。

第２面では２箇所の水田跡とそれに付属する配水用溝が検出されている。水田跡と溝はHr-FAによって履われているが、この火山灰の降下年代は６世紀初頭に比定されている。

さて、旧牛池川によって調査区の東半を失い調査が実施できたのは僅かな面積ではあったが、給水用溝２条の発見によって降灰時の水田の状況を復元することができた。

遺跡内の遺構の位置関係を概観すると、遺跡の北側、即ち上流部に位置する配水溝がW－10号であり、遺跡の南側、即ち下流部に位置する配水溝がW－11号溝ということになる。W－10号溝内には最下層に黒褐色粘質土が堆積し、その上部にHr-FAが堆積するという状態であった。これに対してW－11号溝では底部から上部まで直接Hr-FAによって埋められていた。この堆積状況から判断すると、降灰時に機能を果たしていたのは、あるいは流水があったのはW－11号溝であり、降灰以前に開削され、かなり使用された後に降灰があったのがW－10号溝ということになる。

さらに水田の状況をみると、明瞭に畦畔が確認できたのは下流のW－11号溝が配水していた部分であり、ここでは方形の区画をもった小型の水田に加えて、水田面に倒伏した稲の籾と葉茎部も確認されている。上流に位置するW－10号溝の西側では明瞭な畦畔は確認することができず、したがって方形に区切られた１枚ずつの水田も確認することができなかった。

このような本調査地区の状況を検討すると、Hr-FA降灰以前には上流部にあたるW－10号溝が配水する水田が、ある期間使用された状態となっており、溝や畦畔は修理されないままに放置されていたことになる。あるいは休耕中であったものかもしれない。ところが下流のW－11号溝西側では盛んに水田が整備され、稲作が行われていたらしく、しかも稲は収穫目前の状態であったことが知られる。溝内は清掃され、流水は溢れ、畦畔も高く盛り上げられた状態となっていたものと想像される。Hr-FA降灰はこの時期に起こり、

本調査区を埋没させたものと考えられる。

プラント・オパール分析を行った結果、稲が検出されている。水田跡としての判断基準は密度3,000個/gであり本遺跡の分析においては3,000個/gという結果を得ているが、前述したようにHr-FAの除去作業中に水田面直上で植物の痕跡とみられるHr-FAが筋状に酸化している箇所が認められている。この部分から籾が検出され、筋状の植物痕は葉茎部が痕跡として残ったと判断された。穂部分の痕跡は捉えられず痕跡の遺存状態は良くなかったが、確認できた茎の最長は55cm以上であった。籾の検出と茎の長さから判断すると、稲の収穫直前にHr-FAの降灰によって埋もれたと判断できるものであった。

第4面のAs-C直下の面では畝状の高まりと4条の畝間が検出されている。プラント・オパール分析の結果では稲等は検出されず、ススキ属やタケ亜科が検出されていて当時は湿地であった可能性が指摘されるものであった。これはサンプル地点が畝頂部ではなく調査区南端部であったため、畝状遺構の正確な判断基準とするには無理があると思われる。類例では渋川市「中筋遺跡　第5次」(渋川市教育委員会)がある。Hr-FAによって被覆された畠跡で、畝立て状のものや長方形の畠跡が確認されている。本遺跡で検出された畝状の遺構はこの畝立ての部分と酷似していたため、畠跡の名称を用いた。隣あう畝頂部間の距離は「中筋遺跡」では2m前後であるのに比して3～3.5mと広く、また、畝間から畝頂部までの高さは僅かに2～8cmであるなど相違点も認められる。

参考文献

宮瀧交二　1992　「板碑の廃棄に関する基礎的検討(一)」『研究紀要』第9号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990　『元総社明神遺跡Ⅷ』土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報
群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団　1993　『元総社寺田遺跡Ⅰ』一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
渋川市教育委員会　平成3年　『中筋遺跡』第5次調査概要
日本考古学協会二〇〇〇年度鹿児島大会実行委員会編　平成十二年　『はたけの考古学』日本考古学協会二〇〇〇年度鹿児島大会資料集　第一集

報告書抄録

ふ り が な	そうじゃかんせんみょうじんきた
書　　名	総社閑泉明神北遺跡
副　書　名	元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編 著 者 名	井野誠一・大越直樹・長谷川一郎・日沖　剛史
編 集 機 関	山武考古学研究所
所　在　地	〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地　　0476-24-0536
発 行 機 関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
所　在　地	〒371-0018　群馬県前橋市三俣町二丁目10－2
発行年月日	西暦2000年3月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m^2	
総社閑泉 明神北	群馬県前橋市総社町 総社字明神北3615-1	1020	11A97	36° 23′ 19″	139° 02′ 19″	20000111 ～ 20000321	5,100m^2	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
総社閑泉明神北	遺物包含層	縄文時代		加曽利Ｅ式土器、後期土器、	
	生産跡	古墳時代	浅間Ｃ軽石下畠跡、ＦＡ下水田跡	土師器、須恵器、木製品	
	遺物包含層	平安時代	住居跡		
		中世	溝、井戸、土坑	中世陶器、五輪塔、石臼	

図版 1

総社閑泉明神北遺跡全景（南→）

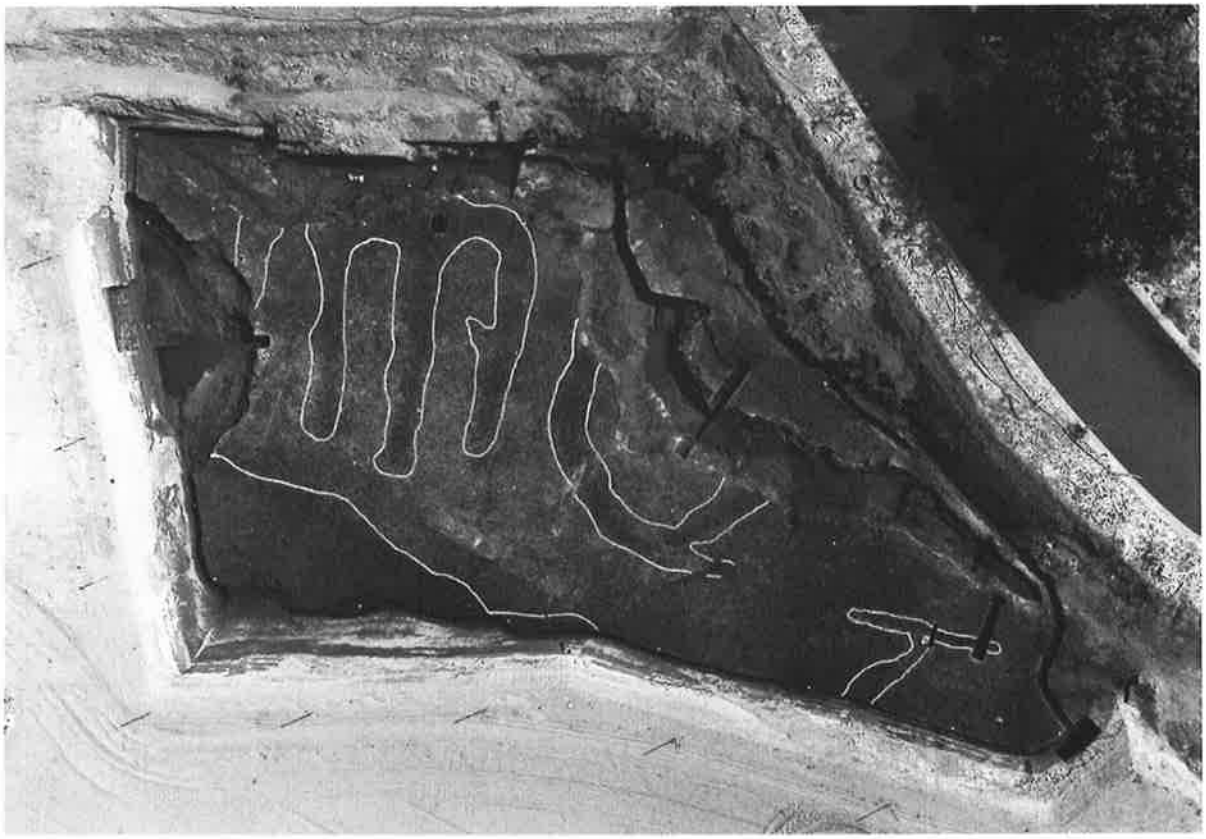
調査区北側 Hr-FA 下面（左が北）

図版 2

調査区南側 Hr-FA 下面（左が北）

W-13・14号溝全景（左が北）

調査区北側 As-C 下面（左が北）



調査区南側 As-C 下畠跡（左が北）

図版 4

基本土層

調査区北側中世・古代面全景（北→）

W-７号溝完掘状況(北→)

調査区北側中世・古代面全景（南→）

W-８号溝　土層断面（南西→）

W-１号溝　土層断面（東→）

W-５号溝　出土遺物（北→）

W-４号溝　遺物出土状況（北→）

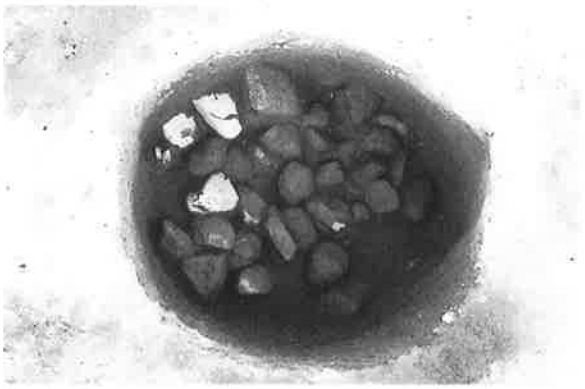
D-１号土坑　土層断面（南→）

D-４号土坑　石出土状況（南→）

D-５号土坑　石出土状況（北→）

D-５号土坑　完掘状況（北→）

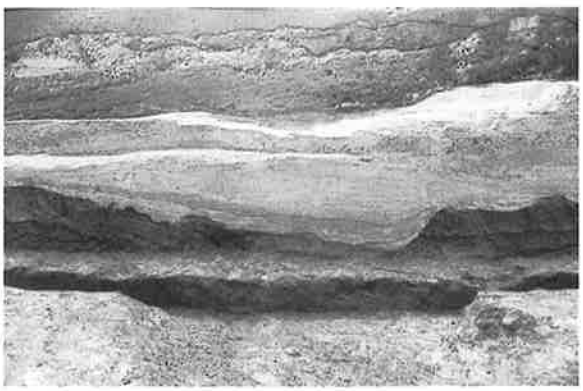
I-１号井戸　石臼出土状況（南→）



I-１号井戸　石出土状況（北→）

H-１号住居跡カマド　土層断面（南→）

H-１号住居跡カマド　完掘（北→）



W-10号溝　土層断面（東→）

図版 6

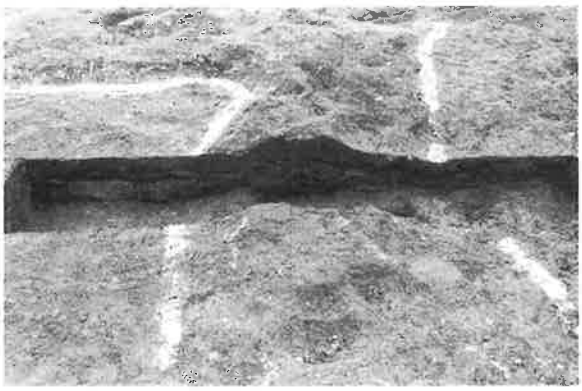
W-10号溝　出土遺物（東→）

W-10号溝　木製品・勾玉出土状況（西→）

W-10号溝　木製品（杵）出土状況

W-10号溝　木製品出土状況

W-11号溝　土層断面（西→）



Hr-FA 水田　畦畔断面（南→）

Hr-FA 水田　水口（南→）

Hr-FA 水田　木製品出土状況（西→）

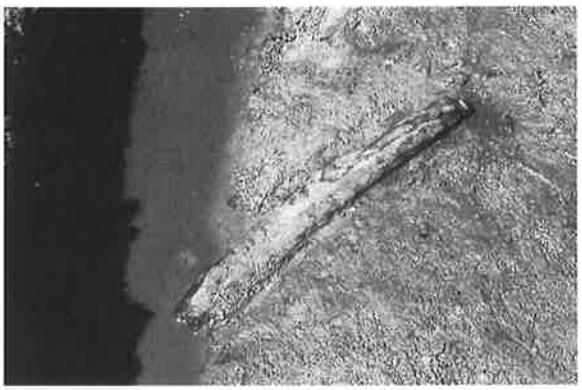
W-13号溝　木製品出土状況（南東→）

W-14号溝　土層断面（西→）

W-15号溝　土層断面（北→）

W-14号溝　掘り下げ作業状況（北→）

As-C 下面　作業状況（東→）

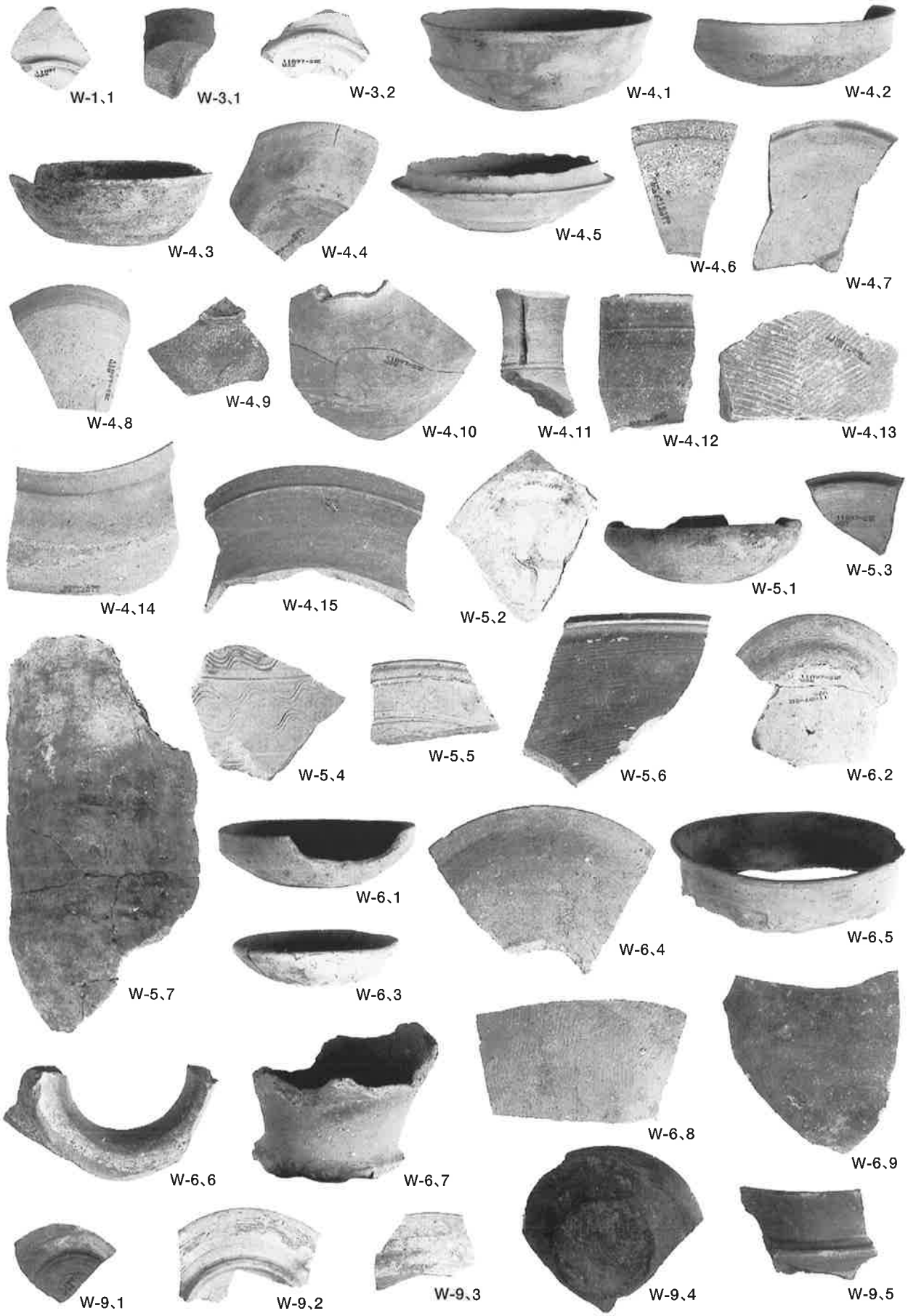


As-C 下面　木製品出土状況（東→）

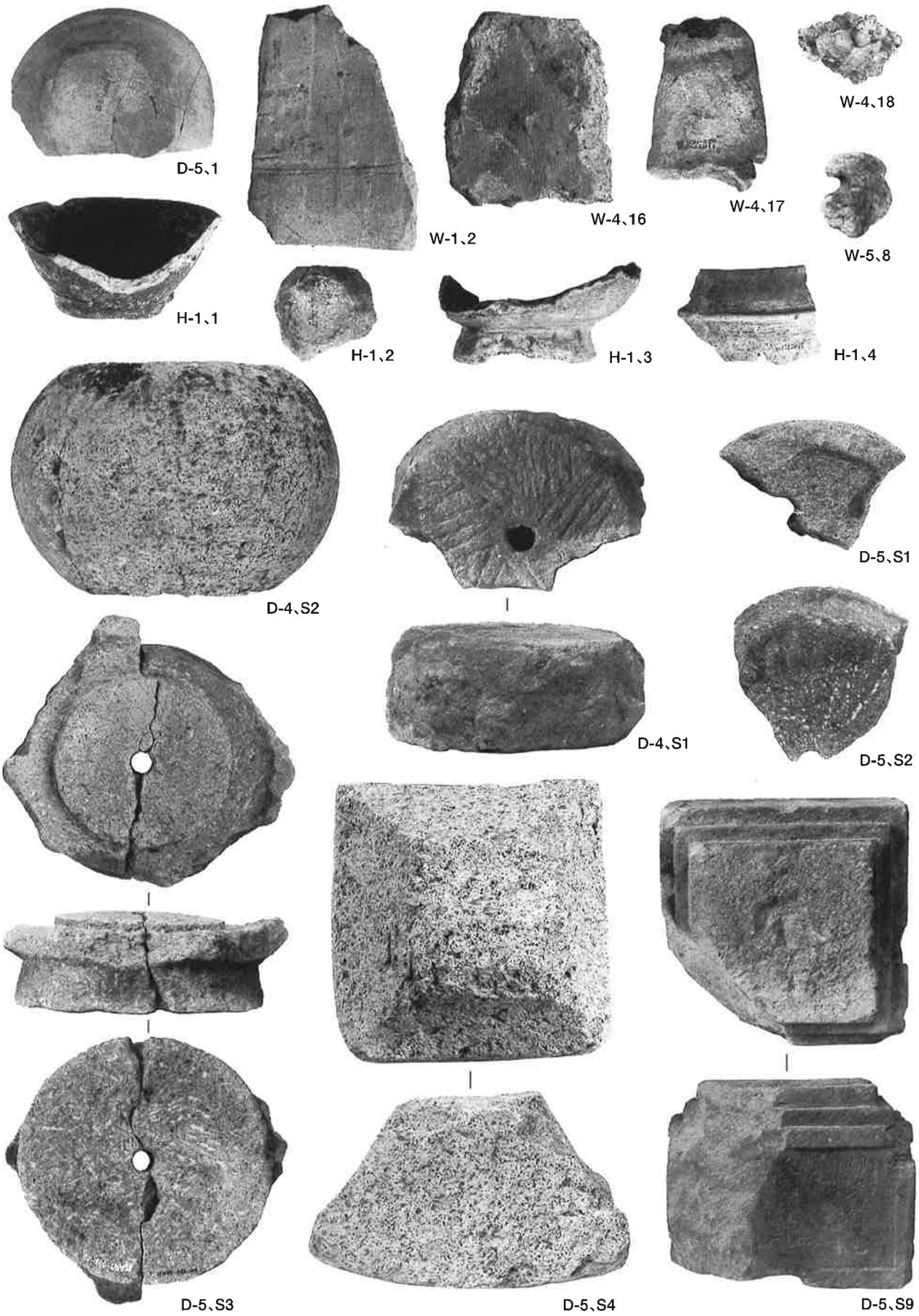
縄文トレンチ（北→）

縄文トレンチ土層断面（西→）

図版 8

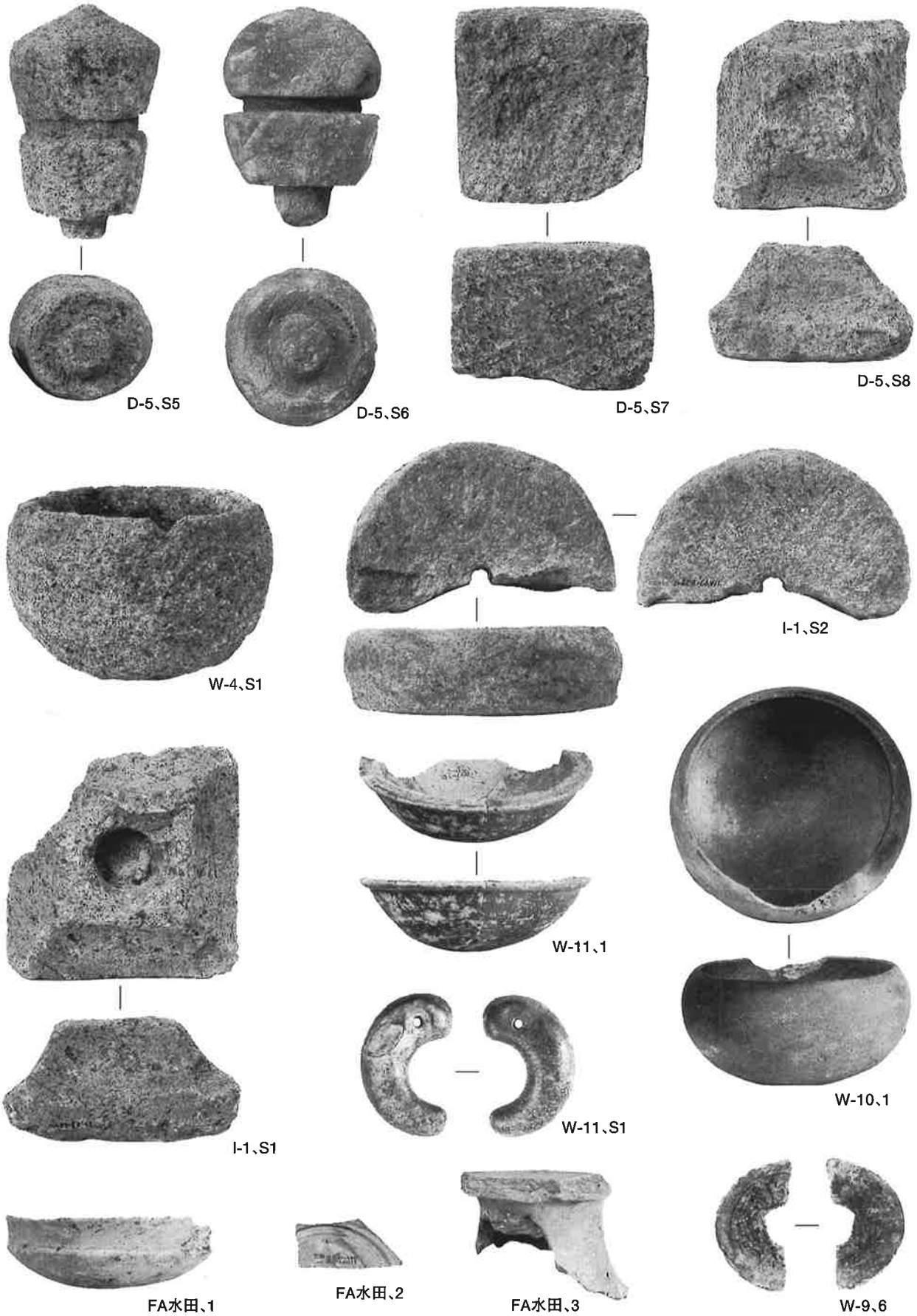


W-1・3・4～6・9号溝出土遺物

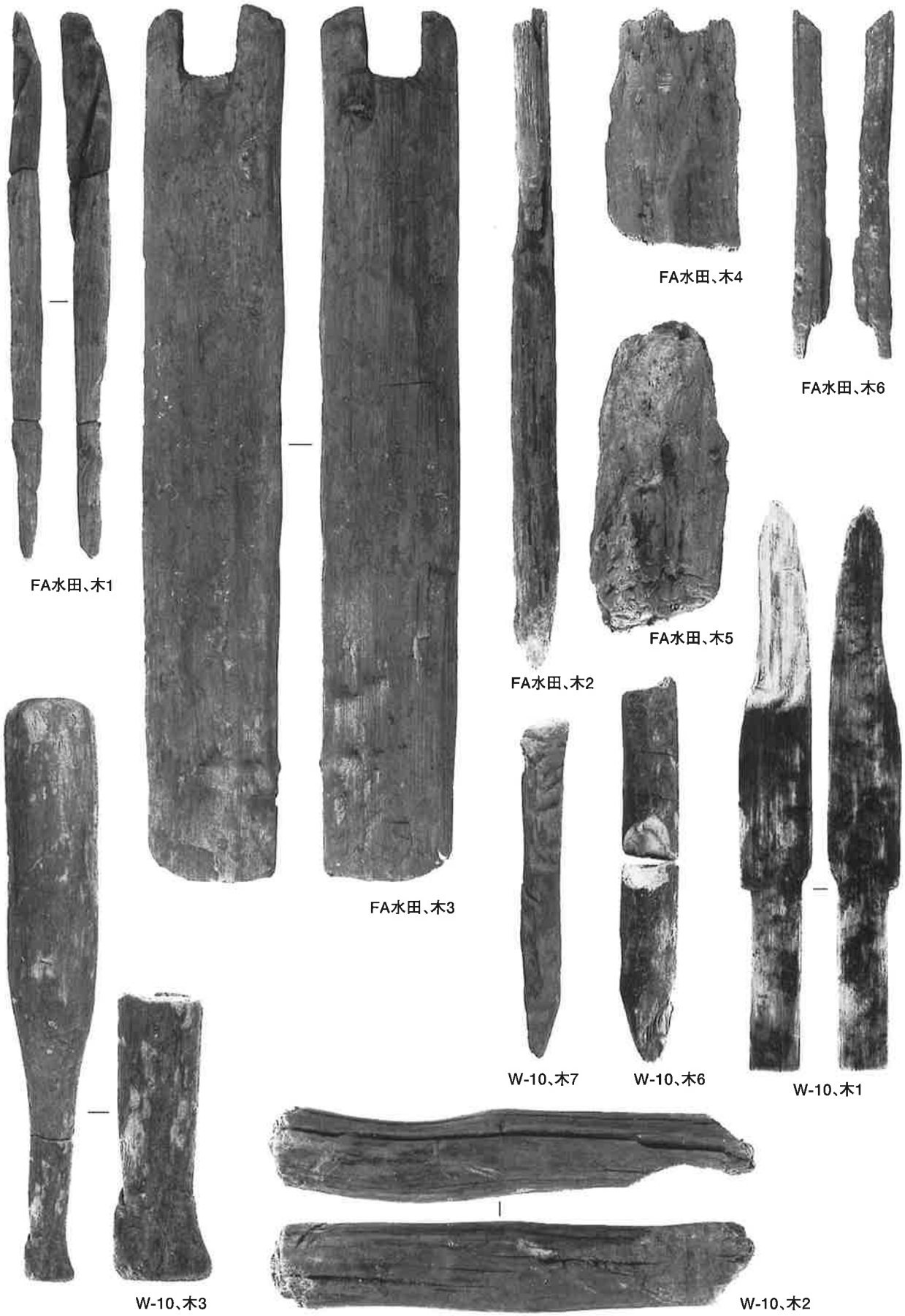


W-1・4・5号溝、D-4・5号土坑・H-1号住居跡 出土遺物

図版10



W-4・9・10・11号溝、D-5号土坑、I-1号井戸、Hr-FA下水田跡出土遺物

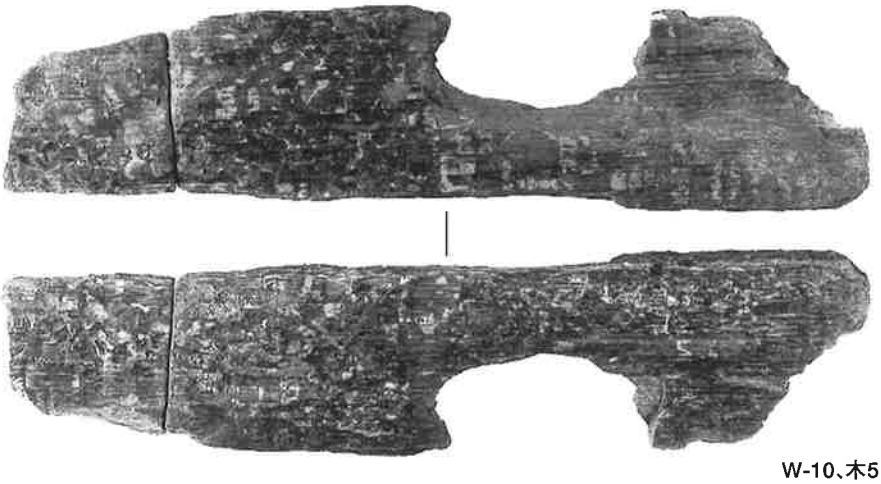


W-10号溝、Hr-FA下水田跡出土遺物

図版12

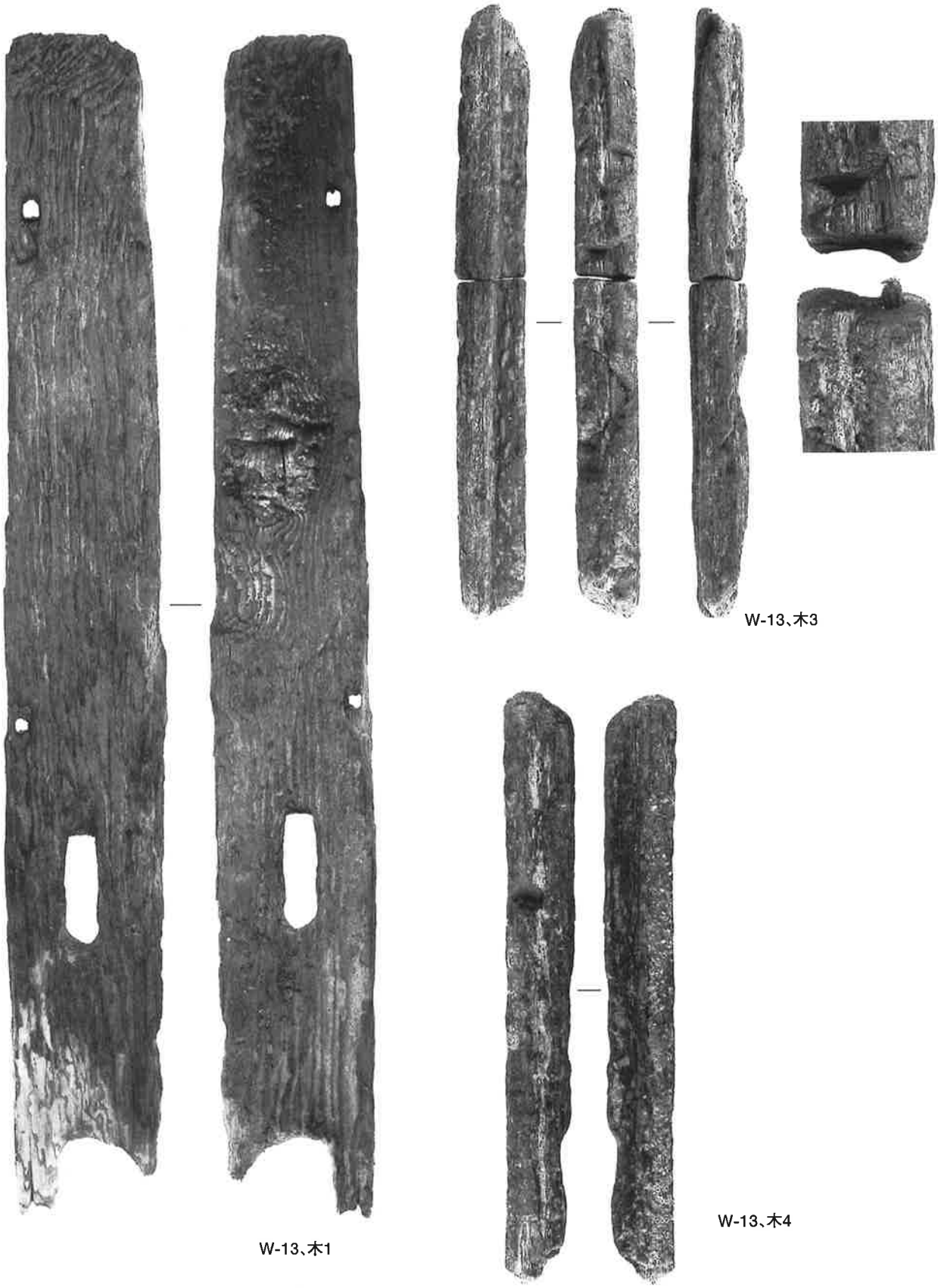
W-10、木4

W-13、木2



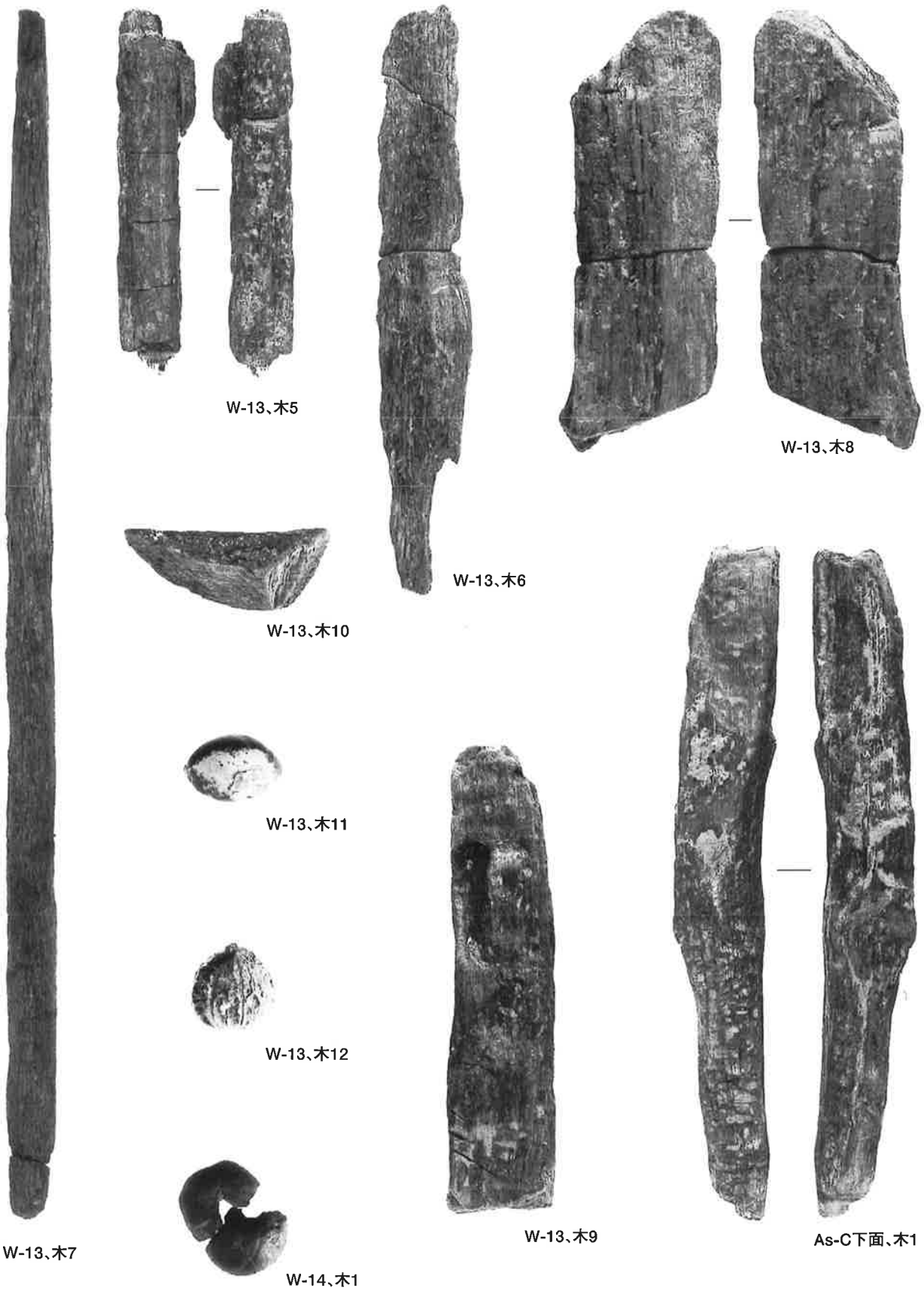
W-10、木5

W-10・13号溝出土遺物

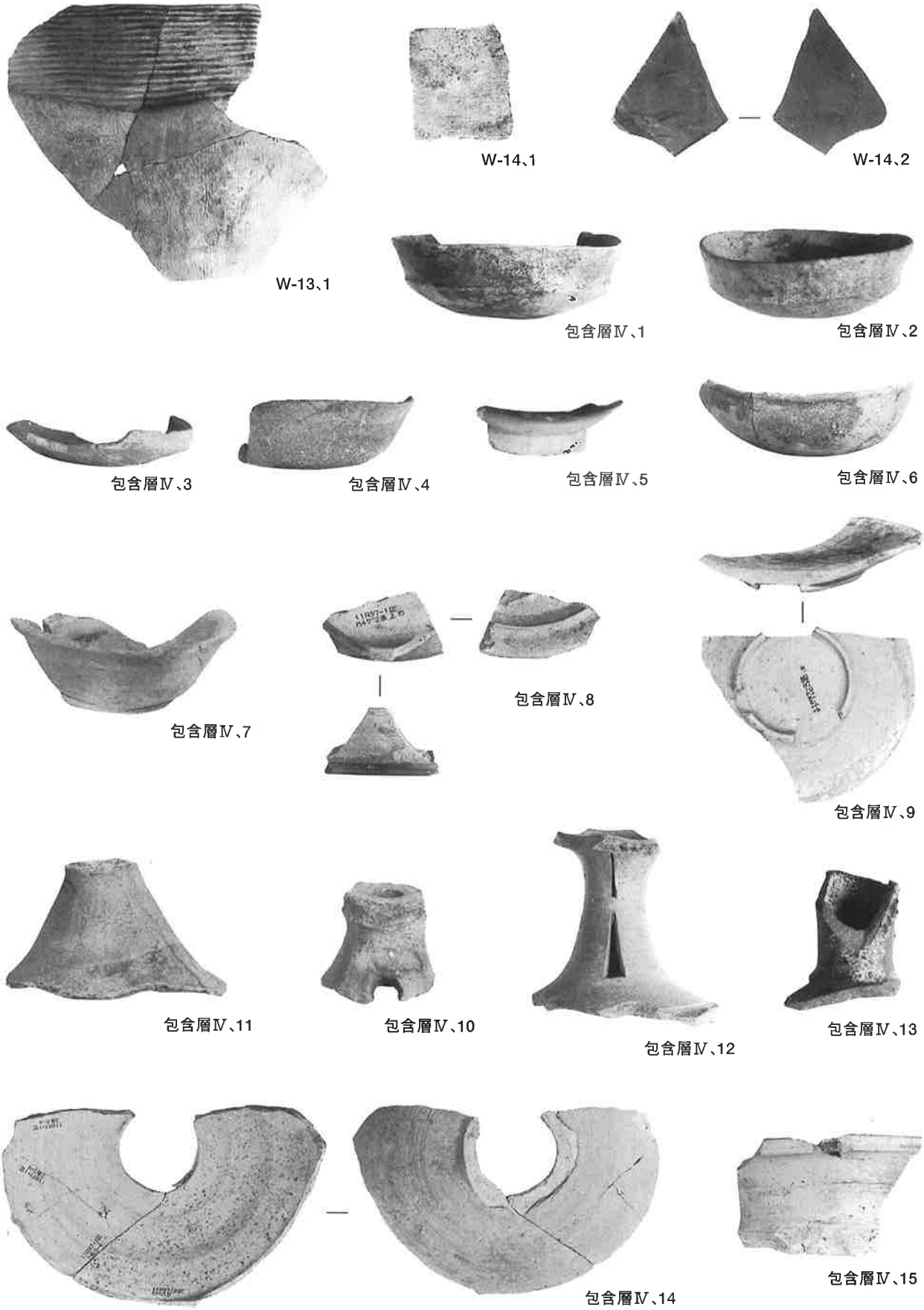


W-13号溝出土遺物

図版14



W-13・14号溝、As-C下面出土遺物



W-13・14号溝、遺物包含層（Ⅳ層）出土遺物

図版16

縄文、1

縄文、2

縄文、3

縄文、4

縄文、5

縄文、7

縄文、6

縄文、8

縄文、9

包含層Ⅺ、S1

包含層Ⅺ、S2

包含層Ⅺ、S3

包含層Ⅺ、S4

表採、1

表採、2

表採、4

表採、3

表採、5

表採、6

表採、7

表採、S1

遺物包含層（Ⅺ層）、表採遺物

出土遺物及び図面等の取り扱いについて

項目		内容
水洗い		• 全量を行った。
注記		• インクジェットプリンターを使用した。 • 遺跡略号（11A97） • 遺構（W：溝、D：土坑、I：井戸、H：住居跡）
復元		接合は可能な限り行った。必要に応じてエポキシ樹脂を充填し、強度的に必要最小限の復元を行った。
実測		• 遺物実測は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳		• 遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、それぞれ資料の検索が可能であるよう作成した。
保管方法	出土遺物	• 出土遺物は、報告書使用分と未使用に分け、コンテナあるいは段ボール箱に収納した。木製品についてはバキュームシーラーにより、真空パックを行い、ビニールにて梱包、収納した。また、各箱には収納内容を明記した。 • 遺物については、注記番号・台帳番号・報告書掲載番号の３種類が存在するが、基本的に報告書掲載番号を優先して記載・収納してある。
	図面	• 遺構実測図と遺物実測図に分け、それぞれ図面ケースに収納した。
	写真	• 遺構写真は、モノクロ35mm、カラーリバーサル35mm、カラーネガ35mm、モノクロ６×６cm（空撮のみ）の４種類がある。 • 遺物写真は、報告書掲載分についてのみモノクロ６×７cmフイルムを使用しておこなった。なお、写真中の番号は、遺物の台帳番号である。
遺構名称等の変更について		• 排土置き場が確保できず、南半、北半の切り返しで調査を行ったため、遺構名称は報告書作成時点で各遺構面ごとに整理し、変更を行った。注記番号は現地での遺構名称を用いて行っている。遺構名称変更の詳細は次の通りである。

	報告書名称	調査時名称	報告書名称	調査時名称		報告書名称	調査時名称
溝	W－1	W－24	W－12	W－5	土坑	D－1	D－29
	W－2	W－23	W－13	W－7		D－2	D－5
	W－3	W－22		W－32		D－3	D－6
	W－4	W－28		旧牛池川		D－4	1号集石
	W－5	W－27	W－14	W－8		D－5	D－23
	W－6	W－26	W－15	W－9		D－6	D－26
	W－7	W－1	W－16	W－17	井戸	I－1	I－1
	W－8	W－2	W－17	W－31			D－7
	W－9	W－30	W－18	W－15	住居跡	H－1	H－1
	W－10	W－29	W－19	W－16			
	W－11	W－4					

総社閑泉明神北遺跡

元総社蒼海土地区画整理事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査

印刷　平成12年３月14日

発行　平成12年３月21日

編集　山武考古学研究所

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷　㈱文化総合企画

TEL　0476(93)0593